罪と罰「2」（ドストエフスキー）

第二篇

一

こうして、彼はずいぶん長い間横になっていた。時おりふっと目がさめるらしく、もうとっくに深夜が訪れているのに気づくこともあったが、起きようなぞという考えは頭に浮かばなかった。とうとう彼は、もう昼間の明りになっているのに気がついた。先ほどからの忘却状態で、硬直したようになったまま、長椅子の上で仰向けに寝ていた。通りの方から恐ろしい、やけ半分みたいな叫喚（きょうかん）が鋭く彼の耳にまで伝わってきた。もっとも、それは毎晩二時過ぎに、窓の下あたりでよく聞いたものである。つまり、この音が今も彼の目をさましたのである。『ああ、もう酔っぱらいどもが酒場から出て来たな』と彼は心に思った。『二時過ぎだ』こう思うと彼はいきなり、まるで誰かにもぎ離されでもしたように、長椅子からがばとはね起きた。『やっ！　もう二時過ぎだ！』彼は長椅子の上にすわった――と、その時初めていっさいを思い出した！　突如として一瞬の間に、何もかも思い出したのである！

最初の瞬間、彼は気が違うのだと思った。恐ろしい悪寒（おかん）が全身を包んだ。もっともその悪寒は、まだ寝ているうちから起こっていた熱のせいである。ところが、今はふいに激しい発作となって襲ってきたので、歯は抜けておどり出さんばかりにがちがちと鳴り、体じゅうがわなわな震え始めた。彼はドアをあけて耳を澄ました。家の中は何もかもしんと寝静まっている。彼は愕然として自分の体と、部屋全体を見回し、ほとほと合点がいかなかった――昨夜はいって来るなり、ドアに鍵（かぎ）もかけず、服も脱がないのはまだしも、帽子までかぶったまま、長椅子の上へぶっ倒れるなんて、どうしてそんなことができたのだろう？　帽子はすべり落ちて、すぐそこの床の上に、枕と並んでころがっている。『もし誰かはいって来たら、いったいなんと思ったろう？　酔っぱらっているとでも思ったかな、しかし……』彼は窓の傍へ飛んで行った。光線はもうかなり十分だった。で、彼は何か痕跡（こんせき）はないかと、急いで自分の全身を頭から足の先まで見回し始めた。服もずっと一通り調べてみた。けれども、着たままではうまくいかないので、彼は悪寒のために震えながら、身につけたものを残らず脱ぎ捨てて、再び万遍なく調べにかかった。彼はあらゆるものを糸一本、切れっぱし一つ残さぬように引っくり返してみたが、それでも自分に信用がおけなくて、三度ばかりも検査をくり返した。けれど、何も痕跡はないように思われた。ただズボンが裾（すそ）の方で裂けて房のようにぶら下っているあたり、その房の上に凝結した血の痕（あと）が濃くついていた。彼は折り込みになった大形ナイフを取って、その房を切り取った。そのほかには、もう何もないらしかった。ふと

老婆のところで、トランクの中から引きずり出した品物や財布が今だにそっくり方々のポケットにはいっていたのを思い出した！　彼は今までそれを取り出して、隠すことも考えなかったのだ！　今服を調べている時でさえ、思い出さなかった！　いったいなんとしたことだろう？……彼はいきなりそれをつかみ出して、テーブルの上へほうり出しにかかった。すっかり取り出した上、まだ何か残っていないかと、ポケットを裏返してまで見た。彼はその一かたまりをそっくり片隅へ持って行った。そこには一ばん隅っこの下の方に壁紙が裂けてふわふわしている所が一つあった。彼はすぐさまその穴へ、壁紙の下へ品物を押し込み始めた。『うまくはいった！　これでもう目ざわりにならない、財布も同様だ！』彼は腰を上げて、その片隅の一しおふくれあがった穴を、鋭い目つきで見つめながら、さもうれしそうに考えた。と、ふいに彼は恐怖のあまり愕然とした。『なんということだ』と彼は絶望したようにつぶやいた。『おれはいったいどうしたのだろう？　いったいこれで隠したつもりなのか？　こんな隠し方を誰がするものか？』

　もっとも、彼は品物など最初から考慮に入れてなかった。ただ金だけしか頭になかったので、前もって場所を用意しておかなかったのである。『いったい、いま、いまおれは何をあんなに喜んだのだ？』と彼は考えてみた。『こんな隠し方をするやつがどこにあるものか？　全くおれは理性に見放されてるのだ！』彼はぐったりと長椅子に腰を落とした。と、たちまち堪え難い悪寒がまたしても彼の体をゆすぶり始めた。彼は傍のテーブルの上にあった外套（がいとう）――暖かくはあるが、もうまるでぼろぼろになっている昔の学生時代の冬外套を機械的に引寄せ、それを頭から引っかぶった。すると、睡魔と混迷がまたもや一時に彼を襲った。彼は前後不覚に陥った。

　五分もたつかたたぬかに、彼はまたもやはね起きた。そして、すぐさま夢中になって、自分の服の方へ飛んで行った。『ああ、またしてもよく寝られたもんだ。まだなにもできちゃいないじゃないか！　はたしてそうだ、はたしてそうだ。腋（わき）の下の輪さだって今まで取ってないんだ！　忘れてる、こんなかんじんなことを忘れてるんだ！　たいへんな証拠じゃないか！』彼は輪さをちぎって、急いでそれをずたずたに引裂きながら、枕の下の洗濯物の中へぐいぐい押し込んだ。『ぼろの切れ屑（くず）ならどんなことがあったって、嫌疑の種になる気づかいはない。そういったわけらしい、そういったわけらしい！』と彼は部屋のまんなかに突っ立ったままそうくり返した。そして、痛いまでに注意を緊張させながら、何かまだ忘れたものはないかと、再び床の上から隅々までもあたりを見回しにかかった。すべて何もかもが、記憶や単純な判断力までが、自分を見捨てようとしているのだと確信すると、たまらないほど苦しくなってきた。『どうしたんだ、もうそろそろ始まってるんだろうか？　これはもう罰がやってきてるんだろうか？　それ、それ、この通りじゃないか！』実際、彼がズボンから切り放した房の切れ端が、そのまま部屋のまんなかの床の上にころがって

いた。誰かはいって来たらすぐ見られてしまう！　『ああ、いったいおれはどうしたんだろう？』彼はまた途方に暮れたようになり、思わずこう叫んだ。

　するとその時奇怪な想念が、彼の頭に浮かんできた――もしかすると、自分の服はすっかり血まみれなのかもしれない、しみだらけなのかもしれない。ところが、判断力が鈍って、ばらばらになって……知力が曇っているので……自分だけそれが見えもせねば、気もつかずにいるのかもしれない……と、ふいに、財布にも血がついていたことを思い出した。『やっ！　してみると、ポケットにも血がついてるに相違ない。あの時まだべたべたの財布をねじこんだから！』彼は即座にポケットを裏返してみた。と――はたせるかな――ポケットの裏にも血痕があった。しみ！　『してみると、まだぜんぜん理性に見放されたわけでもないな。自分で気がついて察したくらいだから、つまり、判断力も記憶も確かにあるんだ！』と彼は勝ち誇ったような思いで、深く胸いっぱいに吐息を漏らしながら、喜ばしげに考えた。『あれはただ熱病性の衰弱だ。ちょっと熱に浮かされただけだ』そこで、彼はズボンの左のポケットから裏をすっかり引きちぎった。その時太陽の光線が左の長靴を照らした。とたん、長靴の中からのぞいていた靴下に、何やら証跡らしいものが見えたような気がした。彼は靴を脱いだ。『はたして証跡だ！　靴下の爪先（つまさき）がまるで血だらけじゃないか』きっとあの時、うっかり血溜（ちだま）りへ踏み込んだものに違いない……『だが、今度はこいつをどうしたものかなあ？　この靴下や、房の切れっぱしや、ポケットをどこへやったものだろう？』

　彼はそれをすっかり両手へかき集めて、部屋のまんなかに突っ立っていた。『ストーブの中へ隠すかな？　しかし、ストーブの中はまっ先に捜すだろう。焼いてしまうか？　だが、何で焼くんだ？　マッチもないじゃないか。いや、それよりどこかへ行って、みんな捨てちまう方がいい。そうだ！　捨てちまう方がいい！』また長椅子に腰をおろしながら、彼は考えた。『すぐ、今すぐ、猶予なしに！……』けれどそうする代わりに、彼の頭はまたしても、枕の上へ傾いてしまった。またしても堪え難い悪寒が体を氷のようにしてしまった。彼はまた外套を引っかぶった。こうして長いこと幾時間も幾時間も、絶えず一つの想念がちぎれちぎれに彼の夢を訪れた。『今すぐにも、猶予なしにどこかへ行って、何もかも捨ててしまおう、二度と人の目にはいらぬように、少しも早く、一刻も早く！』彼は幾度も長椅子から身をもぎ放して、起き上ろうとしたけれど、すでにそれはできなかった。激しくドアをたたく音がやっと完全に彼の目をさました。

「あけなさいってばよ、生きてるの、死んでるの？　いつもぐうたらぐうたら寝てばかしいてさ」拳（こぶし）でドアをたたきながら、ナスターシャがわめいた。「毎日毎日朝から晩まで、犬みたいに寝てばかしいるんだ！　全く犬だよ！　いい加減にあけなさいってば！　十時過ぎよ」

「いねえのかもしんねえぜ」と男の声が言った。

『やっ、あれは庭番の声だ……なんの用だろう？』
彼はがばとはね起き、長椅子の上にすわった。心臓が痛いほど動悸を打ち始めた。
「だって、この鍵は誰がかけたの？」とナスターシャは言い返した。「まあ、鍵なんかかけるようになってさ！　ご当人が盗まれそうで心配なのかしら！　あけなさいよ、この唐変木、起きなさいよう！」
『やつら何用があるんだろう？　なんだって庭番なんか？　何もかもわかっちまったんだ。抵抗したものか、あけたものか？　ええ、どうともなれ……』
彼は半ば身を起こして、前の方へ身をかがめ、鍵をはずした。
彼の部屋は、ベッドから起きなくても鍵がはずせるくらいの広さだった。
はたせるかな、庭番とナスターシャが立っていた。
ナスターシャは、何やら妙な顔をして、彼をじろりと見回した。彼はいどむような自暴自棄の表情で庭番を見た。こちらは無言のまま、二重に折って安封蝋で封印した灰色の紙切れを彼の方へ差し出した。
「差し紙でがす、役所から」と彼は紙を渡しながら言った。
「なんの役所だい？……」
「つまり、警察から呼んでるんでさ、役所へね。なんの役所って、わかり切ってまさあ」
「警察へ？……なんのために？……」
「そんなこと、わしの知ったこってすかい。来いというんだから、行きゃいいんでさ」
庭番はじろじろ彼を見て、あたりを見回した後、くびすを返して行こうとした。
「なんだかほんとの病人になっちまったようだね？」ラスコーリニコフから目を放さないで、ナスターシャはこう言った。庭番もちょっと振り返った。「昨日から熱があるんだからね」とナスターシャは言い足した。
彼は返事をしないで、まだ封も切らない紙ぎれを手に持っていた。
「そんならもう起きない方がいいよ」と、彼が長椅子から足をおろそうとするのを見て、哀れを催したナスターシャはことばを続けた。「病気なら行かないがいいよ――大丈夫だあね。あんた、その手に持ってるものいったいなあに？」
彼は何ごころなく見ると、右の手に例の房の切れっぱしと、靴下の先と、引きちぎったポケットの裏を握っていた。こうしてそのまま寝ていたのだ。もう後になってこのことを考えたとき、彼は熱に浮かされながらも夢うつつに、それを手の中に固くしっかと握りしめながら、また眠りに落ちて行ったのが思い出された。
「ちょっ、こんなにぼろっきれを集めてさ、まるでお宝みたいに抱いて寝てるんだよ……」
こう言ってナスターシャは、例の病的な神経性の笑い声を高々と立てるのであった。
彼はすばやくそれを外套の下へ押し込んで、じっと食い入るように彼女を見つめた。そのとき彼は十分に理路

整然と、ものを判断することができなかったけれど、人を逮捕に向かう時には、こんな風に扱うものでないと直感した。『しかし……警察へ来いとは？』
「お茶でも飲んだら！　ほしいかね？　持って来てあげるよ。残ってるから……」
「いや……僕は行ってくる。これからすぐ出かける」と彼は立ち上がりながらつぶやいた。
「どうも、階段さえおりられそうもないね？」
「行ってくるよ……」
「じゃ、好きにするがいい」
　彼女は庭番のあとについて行ってしまった。彼はやにわに明るい方へ飛んで行って、靴下とズボンの切れ端を調べにかかった。『しみはあるが、しかし大して目に立ちゃしない。すっかりよごれて、こすれてしまって、色がさめてるからな。前もって知らない者には――てんで見分けなんかつきゃしない。してみると、ナスターシャもあれだけ離れてたから、なんにも気がつきゃしなかったろう、しめた！』その時、彼は胸をおどらせながら呼出状の封を切って読み始めた。長いことかかって読んだ後、ようやく意味がわかった。それは今日九時三十分に、区の警察署へ出頭せよという普通の呼出状だった。
『いったいいつこんな例があったろう？　おれは警察に用なんかいっさいないんだがなあ！　しかも、折もおり今日に限ってどうしたわけだ？』と、彼は悩ましい疑惑に包まれながら、とつおいつ考えた。『ああ、神さま、もうこうなったら、とにかく早く済みますように！』彼はいきなりひざまずいて祈ろうとしかけたが、われながら笑い出してしまった――それは祈祷を笑ったのではなく、自分自身を笑ったのである。彼は急いで着替えにかかった。『破滅するなら破滅するでいいさ、同じこった！
　この靴下をはいてってやれ！』こんな考えが急に彼の頭にわいた。『もっと埃の中でこすれたら血の痕も消えてしまうだろう』しかし、それをはくが早いか、またすぐ嫌悪と恐怖の念に襲われ、引きむしるように脱ぎ捨てた。が、脱ぎ捨てはしたものの、代わりのないことを思うと、また取り上げてはいてしまった。そして、またからからと笑い出したのである。『こんなことはすべて条件的だ、何もかも相対的だ。こんなことはすべて形式にすぎないんだ』と彼はちらと、ほんの頭のはじっこだけで考えた。けれど、そう考えながらも、同時に体じゅうが震えるのであった。『ほら、この通りはいてしまったぞ――見ろ、結局はいてしまったじゃないか』とはいえ、たちまち笑いは絶望に変わった。『いや、とても力に及ばない……』という考えが自然にわいて出る。彼の足はぶるぶる震えた。『恐怖のせいだ』と彼は一人でつぶやいた。頭はぐらぐらして、熱のためにずきんずきん痛んだ。『これは策だ！　これはやつらが策略でおれをおびきよせて、不意打ちに面くらったところを完全に抑えてしまおうというんだ』と彼は階段へ出ながら、ひとり言を続けた。『何よりいけないのは、おれがほとんど熱に浮かされていることだ……何かうっかりへまな口をすべらすかもしれやしないぞ』

階段の上に立ったとき、彼はふと、いっさいの品をあのまま壁紙の穴へ残して来たことも思い出した。『これはもしかすると、わざとおれのいないうちに、家宅捜索をやるのかもしれないぞ』と気がつき、彼は足を止めた。けれど極度の自暴自棄と、極度の（もしこういいうるならば）滅亡の自嘲心（シニーズム）が、ふいに彼を領してしまった。彼は片手を一つ振って、そのまま先へ進んで行った。

『ただ一刻も早くすんでくれ……』

通りは相変わらず堪え難い暑さだった。この四、五日の間に、雨の一滴も降らばこそ、相変わらずの埃、相変わらずの煉瓦（れんが）や石や石灰、相変わらず安店や酒場から出る臭気、相変わらずひっきりなしに出会う酔漢、ポーランドの行商人、半分こわれかかったような辻馬車（つじばしゃ）の御者。太陽はぎらぎらと彼の目を射て、物を見るのが痛いくらい、頭はすっかりぐらぐらになってしまった――それは、強く太陽の照る日突然町へ出た熱病患者に、普通ありがちの感じだった。

昨日の町へ曲がる角まで来ると、彼は悩ましい不安を感じながら、その方を、あの家の方を見やったが……すぐに目をそらしてしまった。

『もし尋ねたら、おれは言ってしまうかもしれない』と彼は、警察へ近づきながら考えた。

警察は彼の家から、四分の一露里ばかりの所にあって、新しい建物の四階に移転したばかりだった。もとの事務所へは、彼もいつかちょいと行ったことがあったが、それもずっと前の事である。門の下をくぐるとき、右手に階段が見えた。帳簿を持った百姓が一人、その階段をおりてくる。『庭番だな、つまり、してみると、あすこが役所なんだ』こう考えて、彼はあてずっぽうにのぼり始めた。何によらず人にものを聞く気になれなかったのだ。『はいって行ったら、いきなり膝（ひざ）を突いて、何もかも話してしまおう……』と彼は四階へ上りながら心に思った。

階段は狭くて急で、一面にきたない水がこぼれていた。建物いったいのアパートは、台所口が全部この階段に向かっていて、しかもほとんど一日（いちにち）あけ放されているので、むんむんするようないきれが立ちこめていた。小脇に帳簿をかかえた庭番や、巡査や、種々雑多な男女の外来者などが、上ったりおりたりしている。警察の入口のドアもやはりあけ放しになっていた。彼は中へはいって、控室に立ち止まった。そこには何やら百姓体の連中が立って待っていた。ここの息苦しさも並み一通りでなく、その上新しく塗られた部屋部屋の、腐った油で溶いたペンキが、まだかわききらないで、胸の悪くなるほど鼻をついた。しばらく待った後、彼はさらに先へ進んで、隣室まではいって行こうと思案を決めた。どれもこれもちっぽけな、天井の低い部屋だった。恐ろしい焦燥が、彼をなおも先へ先へと引っ張って行った。誰も彼に気のつくものはなかった。次の部屋には、彼よりも少しはましかと思われるくらいの服装（なり）をした、書記らしい連中が控えて、せっせと書き物をしていた。見たところみんなへんてこな人間ばかり。彼はその中の一人に近よった。

「お前なに用だ？」

彼は呼出状を出して見せた。
「君は大学生ですか？」呼出状をちらと見て、相手はこう尋ねた。
「そうです。もとの大学生」
けれど、書記は一こう好奇心らしいものも示さず、じろじろ彼を見回した。それは、なんだかこう特別に髪をぼうぼうさした男で、目つきに何か固定観念（イデー・フィクス）みたいなものを浮かべていた。
『こんなやつに聞いたって何もわかりゃしまい。こんなやつの知った事じゃないんだからな』とラスコーリニコフは考えた。
「あっちへ行きなさい、事務官の方へ」と筆生は言って、一番はずれの部屋を指でさして見せた。
彼は、順番からいうと四つめに当たる、この狭い部屋へはいった。部屋は人でいっぱいになっていたが、皆これまでの部屋部屋にいた連中よりは、いくらか気のきいた服装（なり）をしていた。外来者の中には、婦人が二人まじっていた。一人はみすぼらしい喪服を着て、事務官とさし向かいにテーブルの前に腰をかけ、何やら口授されながら書いていた。いま一人は恐ろしくふとった婦人で、紫色に見えるほど赤い顔にしみがあったけれど、なかなか立派な押し出しで、なんだか恐ろしくけばけばしい服装（なり）をして、胸には茶わんの受け皿ほどもあるブローチをさしている。これはちょっと脇の方に立って、何やら待っていた。ラスコーリニコフは事務官に呼出状を突きつけた。こちらはちらと見て、『ちょっと待ちなさい』といっただけで喪服の女の仕事を続けた。
彼はほっとした気持で息をついた。『こりゃ確かに違う！』彼はだんだん元気づいてきた。元気を出せ、正気に返れと、懸命に自分で自分に言って聞かせるのであった。
『何かちょっと馬鹿なことをしても、何かちょっとした些細（ささい）な不用意をやっても、おれは自分でしっぽを出してしまいそうだ！　ふむ！……どうもここは空気の流通が悪いからつらいな』と彼は心の中でつけ足した。『息苦しい……頭がぐらぐらしてくる……思考力だってそうだ』
彼は総身に恐ろしい混乱を感じた。自分で自分を支配しえないのが恐ろしかった。彼は何かにすがりつこう、なんでもいい、ぜんぜん無関係な事を考えようと努めたが、それはどうしてもうまくいかなかった。にもかかわらず、事務官はひどく彼の興味をひいた――彼はその顔つきで何かを読み取り、最後の判断を下したくてたまらなかった。それはまだ二十二ぐらいの生若（なまわか）い男だったが、よく動く浅黒い顔つきは、年よりも老けて見えた。流行のハイカラ扮装（いでたち）で、ポマードをしこたまつけ、櫛目（くしめ）をきちんと立てた髪はうしろ頭まで分け目を見せ、刷毛（はけ）でみがき上げた白い指にはさまざまな指輪をでこでこにはめ、チョッキには金鎖を光らしていた。彼は居合わせた外国人の一人とフランス語で二言ばかり話したが、それも相当のものになっていた。
「ルイザ・イヴァーノヴナ、あなたお掛けになったら」

と彼は軽い調子で、けばけばしい身なりをしたあから顔の婦人に声をかけた。こちらは、椅子がすぐ傍にありながら、勝手に掛けるのを遠慮するように、ずっと立っていたのである。

「ありがとう（イッヒ・ダンケ）」と女は言って、衣（きぬ）ずれの音を立てながら、静かに椅子へ腰をおろした。白いレースの飾りのついた薄い空色の服は、軽気球みたいに椅子のまわりへ広がって、ほとんど部屋を半分がた占領してしまった。香水がぷんぷんにおい出した。けれど婦人は、自分が部屋を半分も占領して、香水のにおいをぷんぷんさせるのが、いかにも済まない様子で、臆病（おくびょう）らしいくせにずうずういしいところもあるような微笑を浮かべていたが、とにかく明らかに不安らしい風だった。

喪服の女はやっと用を済まして、立ちにかかった。するとたんに、かなり騒々しい音をさせて、一足毎になんだか一種特別な肩の振り方をしながら、一人の警部がだんぜん景気よくはいってきて、徽章（きしょう）のついた制帽をテーブルの上へほうり出すと、安楽椅子に腰をおろした。けばけばしい婦人はその姿を見ると、いきなり椅子からおどり上がって、一種特別な歓喜の色を浮かべて、小腰をかがめにかかった。けれど、警部がいささかの注意も向けようとしなかったので、婦人はもう彼の前で腰をおろすのを遠慮してしまった。これは区の副署長で、両方へ水平にはねている赤みがかった口ひげを生やし、一種のあつかましさを除いては別段なんの表情もない、いかにも浅薄な顔の輪郭をしている。警部はいささか憤慨のていで、横目にラスコーリニコフを見やった。彼の服装があまりひどかったし、しかも、そうした零落ぶりにもかかわらず、なりに似合わぬ尊大な態度を持していたからである。ラスコーリニコフはついうっかりして、あんまり長いことまともに彼を見つめたので、警部はとうとう向かっ腹を立ててしまった。

「なんだお前は？」と彼は叫んだ。このぼろ男が、稲妻のような彼のまなざしを受けて、こそこそ隠れようともしないのに、どうやら驚いたらしい。

「出頭を命じられたんです……呼出状で……」とラスコーリニコフはどうやらこうやら返辞をした。

「それはその男から、大学生から金を取り立てる件です」事務官は書類から目を放して、せかせかと口を入れた。

「そら、これです！」と彼は帳簿をラスコーリニコフの方へ投げて、場所を示した。「読んでごらんなさい！」

『金？　なんの金だろう？』とラスコーリニコフは考えた。『しかし……してみると、もうたしかにあれじゃない！』彼はうれしそうにぶるっと身震いした。彼の心は急にどかっと、ことばに尽くせないほど軽くなった。すっかり重荷が肩からおりた思いだった。

「いったい君は何時に出頭を命じられてるんだね、君？」警部はどうしたのか、いよいよ侮辱を感じながら、こうどなりつけた。「九時と書いてあるのに、もう十一時過ぎておるじゃないか」

「僕はつい十五分ばかり前にこれを受け取ったのです」とラスコーリニコフは同じくふいに、自分でも思いがけ

ないくらいむらむらとなって、しかもそれに一種の満足さえ見出しながら、肩越しに大きな声で答えた。「それに僕は病人で、熱を押して出て来たんですから、それだけでもたくさんでしょう」

「どなるのはよしてもらいましょう！」

「僕はどなってなんかいやしません。きわめて平静に言ってるんです。かえってあなたの方こそ、僕をどなりつけてるんじゃありませんか。僕は大学生です、どなりつけられて黙っているわけにいきません」

副署長はすっかり逆上してしまって、しばらくは口をきくこともできず、ただ口からしぶきのようなものを飛ばすばかりだった。彼は席からおどり上がった。

「おーだーまんなさい！　君は官衙にいるんですぞ。ぼ……ぼうげんを吐くんじゃない！」

「あなただって官衙にいるんじゃありませんか」とラスコーリニコフは大喝一声した。「ところが、あなたはどなるばかりじゃない、煙草までふかしておいでになる。それは僕ら一同を蔑視することになります」

こう言い切ると、ラスコーリニコフはなんともいえぬ快感を覚えた。

事務官は微笑を含んで、二人をながめていた。短気な警部はどうやら荒胆をひしがれたらしい。

「それは君の知ったこっちゃない！」とうとう彼は、なんとなく不自然に大きな声で叫んだ。「さあ、そこで、君は要求されている答弁をしてくれたまえ。アレクサンドル・グリゴーリッチ、この男に見せてやってくれたまえ。君は告訴されてるんですぞ。借金を踏み倒そうなんて！　ふん、どうも大した美丈夫ぶりだ！」

けれど、ラスコーリニコフはもう聞いていなかった。そして、少しも早く謎を解こうと、むさぼるように紙切れをつかんだ。一度読んで、また二度めに読んだが、かいもくわからなかった。

「いったいこれはなんですか？」と彼は事務官に尋ねた。

「借用証書によって、あなたから返金を請求しているんです、支払の督促です。あなたは科料その他の諸費用をこめて借金を支払うか、それともいつ支払いうるかということを、書面で答えなければならないのです。それと同時に、支払を済ますまでは、首都から外へ出ないこと、財産を売却もしくは隠匿しないということもね。債権者は、あなたの所有品を売却することも自由だし、あなたに対しては、法によって制裁を下すこともできるんです」

「でも僕は……誰にも借金なんかありません」

「それはもはやわれわれの知ったことじゃない。われわれの方へはこの通り、債務取立の告訴が提出されてるんです。つまり九か月前に、あなたが八等官未亡人ザルニーツィナに渡した百五十ルーブリの借用証書です。これがその後ザルニーツィナから、七等官チェバーロフの手へ渡っているが、もう期限がきれて不渡り手形になっている。こういったわけで、あなたに答弁を要求しているんです」

「ああ、そりゃ下宿のかみさんじゃありませんか？」

「下宿のかみさんならどうしたんです！」

事務官は『どうだい、お前、今どんな気持がするね？』とでも言いたげな様子で、今みんなから包囲攻撃を受け始めたばかりの新参者に対するような憐愍と、同時にある勝利感を含んだ寛容の微笑を浮かべながら、彼を見つめていた。しかし、今の彼にとって借用証書がなんだろう。支払命令がなんだろう！　これしきなことに現在の自分として、いささかなりとも心配する価値があろうか、いな、多少なりと注意に値いしようか！　彼は突っ立ったまま、読んだり、聞いたり、答えたり、自分の方から質問までしたが！　それはすべて機械的だった。自衛の勝利と、心を圧迫する危険からのがれたという感じ――ただそれだけが、いま彼の全存在を満たしているのだった。予見もなければ、分析もなく、未来に対する想像もなければ、推察もなく、疑惑もなければ、問題もない。それはきわめて本然的な、純動物的な歓喜の瞬間だった。けれど、ちょうどこの時事務所の中では、青天の霹靂ともいうべき事件が起こった。さきほど受けた不敬の侮辱に、まだ腹の底までにえくり返るような気持で、ことごとくまっかになって怒っていた警部は、傷つけられた尊厳を回復しようと考えたらしく、彼がはいってきた時から、にたにたと馬鹿げきった微笑を浮かべながら彼を見つめていた例の『けばけばしい婦人』をつかまえて、可哀想に、頭から雷でも落ちたように、がみがみ食ってかかった。

「ええ、この……女！」と彼はふいにありたけの雑言を並べながら、喉も裂けよとばかりどなりつけた。（喪服の婦人はもう帰っていた）。「ゆうべ貴様んとこのていたらくは、いったいなんというざまだ？　あん？　またしても、町内中に恥さらしな大乱ちきを持ち上げやがって、またぞろ喧嘩にへべれけ騒ぎだ。懲治監へでもくらい込みたいのか！　おれはもうちゃんと貴様に言っておいたじゃないか、もう十ぺんから注意しといたじゃないか――十一ぺんめには断じて許さんからって！　それを貴様はまたしても、またしても！　ええ、この……め！」

ラスコーリニコフは、思わず手から書類を取落としたほどである。彼はけうとい目つきで、かくも無遠慮にやっつけられているけばけばしい婦人をながめていたが、やがてまもなく事のなんたるやに考え及んだ。と、すぐさまいっさいのいきさつが、大いに愉快にさえなってきた。彼は喜んで耳を傾けた。彼はありたけの声で笑って、笑って、笑い抜きたいような気持さえもした……ありたけの神経がむやみにおどり狂っていた。

「イリヤー・ペトローヴィッチ」と事務官は気づかわしげに言いかけたが、時機を待つことにしてことばをやめた。猛り立った警部を押し静めるには、手を抑えるよりほかに方法のないことを、これまでの経験で知っていたからで。

一方けばけばしい婦人の方はどうかというと、はじめのうちこそ、その霹靂に震え上がっていたが、不思議なことには、警部の罵言がますます激しくなり、ことば数が多くなればなるほど、彼女の顔つきはいよいよ愛想がよくなり、ものすごい警部に向けられた微笑は、ひとし

お魅惑を増してきた。彼女は立ったままその場で小刻みに足を動かし、のべつぺこぺこ腰をかがめながら、いよいよ自分のことばをさしはさむ機会のくるのを、もどかしげに待っていたが、とうとうその機会をつかんだ。

「どういたしまして、署長さま、わたくしどもではけっして騒ぎも喧嘩もいたしませんですよ」急に彼女は豆でもまきちらすように、達者なロシア語ではあるけれど猛烈なドイツなまりのアクセントで、べらべらまくし立て始めた。「けっして、けっして不体裁なことはございません、あの人たちが酔っぱらって来られましたんです。すっかり詳しいことを申し上げますが、署長さま、わたくしが悪いのじゃございません……わたしどもはお上品な家でしてねえ、署長さま、お客あしらいも上品なのでございます、署長さま。そしてねえ、わたしだっていついかなる時にも、けっして不体裁をしでかしたくないと心掛けております。それだのに、あの人たちがすっかり酔っぱらって来られましてね、やがてまたお酒を三本ご注文になったんでございますよ。それから、一人が足を上げて、足でピアノをひき出すんですからねえ。こんなことは上品な家では、全くよくないことでございます。こうしてとうとう、その馬鹿者がひどくピアノをこわしてしまいました。まるで作法も何もあったものじゃございませんよ。それでわたしがそう言ってやりますと、そいつ瓶をつかんで、みんなを後ろから突き出すじゃございませんか。そこでわたしは、急いで庭番を呼びましたので、カルルがやってきました。すると、そいつめ、カルルをつかまえて目をたたきました。ヘンリエットもやはり目をたたかれました。わたしはほっぺたを五へんも打たれましたよ。こんなことは上品な家じゃぶしつけでございますものねえ、署長さま。で、わたしはどなってやりました。するとそいつは濠（ほり）の方へ向いた窓をあけてね、そこに立ちはだかって、豚の子みたいにわめくんでございます。ほんとに恥さらしな、どうしたらまあ往来へ向いた窓で、豚の子みたいに鳴けるのでしょう？　フイ、フイ、フイ、フイってね！　それで、カルルがうしろからそいつの燕尾服（えんびふく）をつかんで、窓から引きずりおろしました。もっとも、その時、これは本当でございますが、署長さま、上着の裾（ゼインロック）が破れましたんで。するとそいつめ、弁償金を十五ルーブリ払えってわめくんで、わたくしは自分でその裾（ゼインロック）の弁償金に五ルーブリ払ったんでございます。ほんとうに下品なお客ったら、署長さま、ありったけの不体裁をしでかして！　それでどうでしょう――おれは貴様のことを長い滑稽（こっけい）小説に作ってやるぞ、どの新聞にもみんな貴様のことを書いてやれるんだから、なんか言いまして」

「すると、そいつは文士なんだな？」

「はい、署長さま、全くほんとうに下品なお客でございます、署長さま、お上品な家に来て……」

「うむ、よし、よし！　たくさんだ！　おれはもう貴様にさんざん言って聞かしておいた。よく言ってあるじゃないか……」

「イリヤー・ペトローヴィッチ」と事務官はまた意味あ

りげに言い出した。
警部はちらとその方を振り返った。事務官は軽くうなずいて見せた。
「……さあ、名誉あるラヴィーザ・イヴァーノヴナ、これが貴様に聞かしてやるおれの最後のお説教だ。それこそほんとに最後だぞ」と警部は続けた。「今後もし貴様の上品な家で、たとい一度でも不体裁をしでかしたら、それこそおれは貴様の首に縄（ツグンデル）をかけてやるぞ、高尚なことばで言えばだ。わかったか！　すると何かな、文士が……作者が『上品な家』で、裾の弁償に五ルーブリ取ったんだな？　いや、作者なんて、えてそうしたもんだ！」こう言って、彼は軽蔑に満ちた視線をラスコーリニコフに投げた。「一昨日も居酒屋でやはり似たりよったりの事件があった。昼食はしたが金を払おうとせん。そして、『おれはその代わりにこの家の事を滑稽小説に書いてやる』と言うんだ。ある汽船の中でも、先週同じようなことがあった。れっきとした五等官の家族、つまり細君と令嬢が、聞くにたえない下等なことばで罵倒（ばとう）されたのだ。この間もさる喫茶店から突き出されたやつがある。まあ、みなこういう風なんだ、作者だの、文士だの、大学生だの、新聞記者だのというやつらは……ぺっ！
おい、貴様はもう帰れ！　いまにおれが自分で行ってやる！……その時は気をつけるがいいぞ！　わかったか？」
ルイザ・イヴァーノヴナは、気ぜわしない愛嬌（あいきょう）をふりまき、四方八方へ小腰をかがめながら、戸口まであとずさりして行った。ところが、ドアの所であけっ放しのすがすがしい顔に、ふさふさとしたみごとな亜麻色の頬ひげを生やした、一人の立派な警察官に尻（しり）をぶっつけた。それは署長のニコジーム・フォミッチその人だった。ルイザ・イヴァーノヴナはあわてて床につくほど低く会釈し、小股（こまた）にちょこちょこと飛び上がるようにしながら、事務所から駆け出して行った。
「またぞろ天地晦瞑（かいめい）、雷鳴、稲妻、竜巻、颶風（ぐふう）というわけですな！」と愛想のいい親しげな調子で、ニコジーム・フォミッチは副署長に向かってこう言った。「また癇癪（かんしゃく）を起こして、自分で心臓を悪くしたんですな！
階段のところまで聞こえましたぜ」
「いや、なに！」とおうように無造作な調子で副署長は言った。（「なに」とさえはっきりいわず「や、なあん！」といった風に聞こえた）。そして、何かの書類を持って、ほかのテーブルへ移りながら、一歩毎に気取った格好で肩をゆすって行った。一足前へ出すと、肩が一緒について出るので。「これです、ごらんください――この著述家先生、いや、違った、大学生、といって、もとの大学生がですね、金を払わん代わりに手形をむやみと出して、部屋はあけんというわけで、当人に対してのべつ訴えがくるんですよ。それでいて、わたしが先生の前で煙草を吸ったからといって、ご憤慨あそばすんですよ！　自分は、ひ、卑劣きわまるまねをしながら、どうです、やつを見てやってください、あの通りすてきな格好をしているじゃありませんか！」

「貧は不善にあらずさ、君。いやどうも仕方がないて！　君は有名な火薬なんだから、侮辱を忍ぶことはできなかったでしょうよ。しかし、君もきっと何かこの人に腹を立てて、我慢がしきれなかったんでしょう」とニコジーム・フォミッチは、愛想よくラスコーリニコフの方へふり向きながら、ことばを続けた。「しかし、それは間違いですよ。君――この人はじーつーに高潔な男です。それはわたしが誓います。ただ火薬なんです！　癇癪もちなんです！　ぱっと爆発して、ぐらぐらっと沸き立って、燃えてしまうと――それでおしまいなんです！　それで何もかもすんでしまって、結局、黄金のごとき心だけが残るんです！　この人は連隊時代にも、『火薬中尉』とあだ名されていたんですからなあ……」

「しかもその連隊ときたら！」と、副署長は署長にうまくくすぐられたので大恐悦のくせに、まだふくれ面をしながら叫んだ。

ラスコーリニコフは突然みんなの者に、何かうんと愉快なことを言ってやりたくなった。

「いや、とんでもない、署長」ふいに彼はニコジーム・フォミッチの方へふり向きながら、恐ろしくくだけた調子で言い出した。「僕の身にもなってみてください……もし何か僕の方に失礼なことがあったら、僕はあの人に謝罪してもいいと思ってるくらいです。僕は貧しい病身な学生です。貧乏にへしつけられて（彼は全く「へしつけられて」と言ったのである）いる男です。僕はもとの大学生です。つまり学資がないからです。でも、金はきます……僕には母と妹が××県におりまして……それが送金してくれるはずです。そしたら僕……返済します。うちのかみさんはいい人なんですが、僕が出稽古の口をなくして、四月ごし払いをしないので、かんかんにおこってしまって、食事もよこしてくれないようになりました……それから、手形がどうとかいうんですが、僕にはさっぱりわけがわかりません！　いまかみさんはこの借用証書で僕に請求してるんです。しかし、今のところどうして払えましょう、ご賢察を願います！……」

「だが、そんな話はこっちの知ったことじゃない……」とまた事務官が注意しようとした……

「ちょっと、ちょっと、それはそうですが、僕にも釈明さしてください」とラスコーリニコフはまたことば尻を抑えて、事務官ではなく、依然としてニコジーム・フォミッチを相手にしながらそう言ったが、同時に、副署長にも話しかけるようにしようと、一生懸命に努力するのであった。ところが、こちらは書類をかき回して、お前などに注意も向けてやらないぞとばかり、軽蔑の態度を見せていた。「まあ、僕にも今度は事情を述べさせてください。僕はあの女の所に、もうかれこれ三年も暮らしているんです。国を出てここへ着くとすぐにずっと。そして以前……以前……なに、僕の方でもすっかり白状してしまったってかまわないでしょう。僕は最初から、かみさんの娘と結婚しようと約束したんです。もっとも、それはぜんぜん自由な口約束だったんですが……この娘は……もっとも、僕はその娘が気に入ってたくらいなん

です……もっとも、惚れていたわけじゃありませんが……一口に言えば、若かったんですね。いや、つまり僕が言いたいのはこうなんです。かみさんはそのために、当時多額に信用貸しをしてくれたので、僕も多少その、気楽な暮らしをしていました……僕は実に軽はずみだったんです……」

「われわれはそんな立ち入った打明け話を、君から要求してるんじゃない。それに暇もない」と副署長はいけぞんざいな調子で、威猛高にさえぎろうとしたが、ラスコーリニコフは、熱くなってそれを抑えた。もっとも、急に口をきくのがたまらないほど苦しくなったのだけれど……

「いや、失礼ですが、失礼ですが、多少なりと完全に釈明さしてください……どういう事情でこうなったか……僕の方でも……もっとも……こんなことをしゃべるのは余計なことでしょう、そりゃおっしゃる通りですが――しかしともあれ、この娘は一年前にチブスで死んでしまったけど、僕はやはり下宿人として残っていました。今の住まいへ移った時に、かみさんはこう言いました……しかも、隔てのない態度で言ったのです……わたしはあなたを十分信用しています、云々……だが、今まであなたに貸してあげた百五十ルーブリに対して、借用証書を一本入れてもらえますまいか、とこうなんです。まあ聞いてください――かみさんは全くこう言ったのです――あなたが証書を入れてさえくだされば、今後またいくらでも立て替えてあげます。それから自分の方としては、けっして――これはかみさんのことばそのままです――あなたが自分で払うまで、この証書に物をいわすようなことはしませんって……それをどうです、いま僕が出稽古の口をなくして、食うものもなくなっている時に、こんな告訴をするなんて……これで僕、なんと言ったらいいんです？」

「そんなセンチな事情なんか、君、われわれには関係のないことですよ」と副署長は横柄にさえぎった。「君は答弁を書いて宣誓をしなくちゃならん。君が誰かにお惚れ遊ばしたとか、そんな愁嘆話なんか、われわれにはなんの関係もありゃしない」

「いや、どうも君は……ちとひどすぎるよ……」とニコジーム・フォミッチはテーブルについて、同じく書類のサインを始めながら、こうつぶやいた。なんとなくきまりが悪くなったのである。

「さあ、書きなさい」と事務官はラスコーリニコフに言った。

「何を書くんです？」と彼はなんだか格別ぞんざいに問い返した。

「わたしがいま口授します」

ラスコーリニコフは、今の打明け話をしてから、事務官が自分に対して前より無頓着に、横柄になったような気がした――けれど、不思議なことには――彼自身も突然、誰がなんと思おうと同じことだ、という気持になった。この変化は実に一瞬の間に、一刹那に生じたことである。もし彼がちょっとでも物を考える気になったら、

つい一分前に、どうして彼らとあんな話をした上、自分の感情まで押し売りする気になったかと、むろん驚きあきれたに違いない。それに、いったいどこからあんな感情がわいてきたのだろう？　ところが、今はその反対に、もしこの部屋が急に警察官でなく、もっとも親しい友人でいっぱいになったとしても、彼は自分の親友のために、何一つ人間的なことばを考えつくこともできなかったろう。それほど彼の心は急にがらんとしてしまったのである。悩ましい無限の孤独感と暗い逃避の念が、突然意識的に彼の心に現われてきた。彼の心をかくも急に転向させたのは、副署長を相手にした打明け話の陋劣さでもなければ、また彼に対する中尉の勝利の下劣さでもない。ああ、いま彼にとって自分の卑劣さや、およそこういった連中の自尊心や、火薬中尉や、ドイツ女や、告訴や、警察や、そんなものになんのかかわりがあろう！　彼はよしこの瞬間、火あぶりを宣告されたにしろ、びくともしなかったに相違ない。おそらく宣告さえも注意して聞かなかったろう。彼の内部には何かしら全く覚えのない、新しい、思いがけない、かつてためしのないあるものが成就したのである。彼はそれを了解したというよりも、感覚の持ちうるありたけの力で感じたのである――さっきのような、感傷的な、長たらしい、愚痴まじりの打明け話はもちろんのこと、どんな話であろうと、もはやこれ以上警察の事務室で、この連中に話しかけるのは不可能だということを、はっきり感じたのである。これがたといみんな警察官でなく兄弟姉妹であるにしても、今後生涯のいかなる場合においても、彼らに話しかける必要はないのだ。彼はこの瞬間までかつて一度もこうした奇怪な恐ろしい感じを経験したことがなかった。そして、彼にとって何より苦しかったのは、これが意識とか観念とかいうよりもむしろ感触だった一事である。それは、今までの生活で経験したあらゆる感触の中でもっとも端的な、もっとも悩ましい感触だった。

　事務官は、こういう場合の答弁にありふれた書式を、彼に口授し始めた。つまり、即刻返済しかねるから、いついつまでには（あるいはそのうちいつか）支払う、当市からは離れない、所有品を売却したり人に贈与したりしない、等々である。

「おや、あなたは字が書けないんですね、ペンが手から落ちそうですよ」と事務官は、不思議そうにラスコーリニコフに見入りながら、こう注意した。「病気なんですか？」

「そうです……頭がぐらぐらして……さあ、先を言ってください！」

「いや、それだけです。署名なさい」

　事務官は紙を取上げて、ほかの仕事にかかった。

　ラスコーリニコフはペンを返したが、立ち上がって出て行こうともせず、両肘をテーブルの上について、両手で頭を引っつかんだ。まるで脳天へ釘でも打ち込まれているような感じだった。奇怪な想念が突如として彼の頭にわいた。ほかでもない、これからすぐ立ち上がって、ニコジーム・フォミッチの傍へ行き、昨日の事を細大漏

らさずくわしく話した上、それから家へ一緒に案内して行って、隅っこの穴に隠してある品々を見せてやりたくなったのである。この衝動はきわめて強烈なもので、彼はそれを実行するために、本当に腰を持ち上げたほどである。

『しかし、たとい一分間でも、よく考えた方がいいのじゃなかろうか？』こういう考えが彼の頭にひらめいた。『いや、なんにも考えないで、ひと思いに肩の荷をおろした方がいい！』けれどふいに、彼は釘づけにされたように立ち止まった。ニコジーム・フォミッチが何やら熱くなって副署長に話している、そのことばが彼の耳にまではいってきたのである。

「そんなことはあるはずがない、二人とも放免になるさ！　第一、何もかも矛盾してるじゃないか。考えてみたまえ――もしこれが彼らの仕業なら、なんのために庭番を呼ぶ必要があるのだ？　自分で自分を告発するためともいうのかね？　あるいは瞞着手段なのか？　いや、それはあまりたくらみ過ぎるよ！　また最後にこういうことが言える――大学生のペストリャコフは、二人の庭番と町人の女房に、門をはいって行くところを見られたんだぜ。この男は三人の友だちと一緒に来て、門の所で別れたんだが、まだ友だちのいる前で、庭番に住まいを尋ねてたということだ。ねえ、もしそんな計画をいだいて来たものなら、まさか住まいを尋ねもしなかろうじゃないか？　またコッホの方だが、これは婆さんの所へ行く前に、階下の銀細工屋に三十分もすわり込んで、かっきり八時十五分前に、そこから婆さんの所へ上って行ったんだ。そこで考えてみたまえ……」

「しかし、失礼ですが、どうして彼らの言うことにあんな矛盾が生じたんでしょう？　はじめは自分たちがたたいたとき、戸はしまっていた、と自分で断言してるでしょう。それが、わずか三分たって、庭番と一緒に来た時には、ドアがあいていたなんて？」

「そこのところにいわくがあるのさ。犯人はきっと中にいて、栓をさしていたんだ。だから、もしコッホがばかなまねさえしなけりゃ――自分で庭番を呼びに行ったりしなかったら、きっとその場でつかまえてしまったに相違ない。つまりやつはそのわずかな隙に、うまく階段をおりて、どうかして皆の傍をすりぬけたのだ。コッホのやつ両手で十字を切りながら、『もしわたしがそこに残っていたら、奴はいきなり飛び出して来て、きっとわたしを斧で殺してしまったに違いありません』と言ってやがる。ロシア式の感謝祈祷でもやりかねない勢いだぜ――は、は……」

「だが、誰も犯人を見たものはないじゃありませんか？」

「どうして見られるもんですかね？　あの家はノアの方舟ですからな」自席から耳を傾けていた事務官が、こう口をさしはさんだ。

「事件は明瞭だ、すこぶる明瞭だ！」とニコジーム・フォミッチは熱心にくり返した。

「いや、きわめて不明瞭ですよ」と副署長は釘をさした。

ラスコーリニコフは帽子を取ってドアの方へ歩き出し

た。が、彼は戸口まで行きつかなかった……
　気がつくと、彼は椅子に腰をかけて、右の方から一人の男にささえられているのに気がついた。左の方にはもう一人の男が、黄色い液を満たした黄色いコップを持って立っていた。ニコジーム・フォミッチは、彼の前に突っ立って、じっと彼を見つめている。彼は椅子から立ち上がった。
「これはどうしたことです、病気なんですかね？」かなりきっとした口調で、ニコジーム・フォミッチは尋ねた。
「この人は署名する時にも、やっとのことでペンを動かしていたほどですからね」と事務官は自席について、また書類に取りかかりながら言った。
「もう前から病気なのかね？」と副署長も同じように書類を繰りながら、自席からどなった。
　もちろんかれも、ラスコーリニコフが気絶している間は、やはり病人を観察していたのだが、正気に返ると、すぐそばを離れたのである。
「昨日から……」とラスコーリニコフはつぶやくように答えた。
「きのう外出しましたか？」
「しました」
「病気なのに？」
「病気なのに」
「何時ごろ？」
「晩の七時すぎです」
「そしてどこへ、失礼ながら？」
「通りへ」
「簡単明瞭だね」
　ラスコーリニコフは布のように真青な顔をして、その黒い燃えるような瞳（ひとみ）を副署長の視線から放さず、ちぎれちぎれな声で鋭く答えた。
「この人は立っているのもやっとなんだよ、それを君は……」とニコジーム・フォミッチは言った。
「いや、べーつーに」と副署長は何かこう特別な語調で言った。
　ニコジーム・フォミッチは、まだ何か言い足そうと思ったが、やはりじっと穴のあくほど彼を見つめている事務官を見ると、口をつぐんでしまった。みな急に黙りこくった。何やら変なぐあいだった。
「いや、よろしい」と副署長は結んだ。「もうお引止めはせんですよ」
　ラスコーリニコフは外へ出た。後ろで急に、がやがやと勢い込んだ会話が始まったのを、彼は聞き分けることができた。中でも、ニコジーム・フォミッチの質問を帯びた声が、一番よく響いていた……彼は通りへ出ると、すっかりわれに返った。
『捜索、捜索、すぐ家宅捜索だ！』と彼は帰りを急ぎながら、心の中でくり返した。『あの強盗めら！　疑ってやがるぞ』先ほどの恐怖がまたしても彼の全身を、足の先から頭のてっぺんまでわしづかみにしてしまった。

二

『だが、もう家宅捜索をやられてしまってたら？　ちょうど家に帰ってみて、やつらが来ていたら？』

が、もう自分の部屋だ。何事もない、誰もいない。誰一人のぞいて行ったものもない。ナスターシャさえも手をつけていなかった。それにしても、まあなんということだ？　どうして先ほどあの品々をそっくりこの穴に打っちゃって行けたのだろう？

彼は片隅へ飛んで行って、片手を壁紙の下へ差し込むと、例の品々を引っ張り出して、それをポケットへねじ込み始めた。全部で八品あったが、耳輪か何か、そんな物のはいった小箱が二つ――彼はろくすっぽ見もしなかった――それから小さなキッド皮のサックが四つと、ただ新聞にくるんだだけの鎖が一本と、ほかにまだ何やら新聞紙にくるんだものがあった。どうやら勲章らしい！……

彼はこれをすっかり方々のポケットへ入れた。外套のポケットと、残ったズボンの右ポケットへ、なるべく目立たないようにと苦心しながら納めてしまった。財布もやはり一緒に取出した。それから部屋を出たが、今度はすっかりあけっぴろげにして置いた。

彼は早いしっかりした足どりで歩いた、全身が打ちくじかれたようになっているのを覚えたが、意識はちゃんとしていた。彼は追跡を恐れた。三十分後、いや、十五分後に、彼に対する尾行命令が出はしないかと恐れた。したがって、どんなことがあろうとも、それまでに証跡を湮滅しなければならない。そして、まだいくらかでも気力と判断力の残っているうちに、うまく処理しなければならない――だが、どこへ行ったものだろう？

それはもうずっと前から決めていたことである。『何もかも堀の中へ投げ込んで、証跡を消してしまうんだ。そうすれば万事かたがついてしまう』彼はもうゆうべ熱にうかされながら、いくどか起き上がって出かけようともがいた瞬間に（彼はそれを覚えている）こんな風に決したのである。『早く、少しも早くみんな捨ててしまうんだ』けれど捨ててしまうということも、案外なかなか難かしいとわかった。

彼はエカチェリーナ運河の河岸通を、もう三十分か、あるいはそれ以上もぶらぶらして、いくどか水ぎわへおりる口を見つけて、下をのぞいてみた。ところが、目算を実行するのは、考えも及ばないことだった。ある所では、筏がおり口のすぐそばにあって、その上で洗濯の女たちが肌着類を洗っていたり、ある所ではボートがもやってあったりして、どこもかしこも人がうようよしていた。それに、河岸通からでも、どこからでも見とおしなので、男がわざわざ水ぎわへおりて行って、そこにしばらく立ち止まり、何やら水の中へほうり込むのに気がついたら、変に思うに相違ない。その上、もしサックが沈まないで、流れ出したらどうする？　またそうなるに違いない。すれば、誰の目にだって止まるわけだ。それ

でなくてさえ、みんな出会いがしらにじろじろ見たり、振り返ったりするではないか。まるで、彼一人だけに用でもあるような具合だ。『なぜこうなんだろう？　それとも、おれにそんな気がするだけなのかしら』と彼は考えた。

とうとうしまいに、いっそネヴァ河へ行った方がよくないかという考えが頭に浮かんだ。あすこなら人通りも少ないし、ここほど目に立たないから、いずれにしても好都合だ、それに一番うまいのは、この辺からだいぶ離れていることだ。すると、彼は急にわれながら驚いた――いったいなんのために、こんな危険な場所を、憂愁と不安に悩まされながら、三十分もうろつき回って、これしきのことをもっと早く思いつけなかったのだろう？

こんな無鉄砲な仕事にまるまる三十分もつぶしたのは、要するに、夢の中で熱に浮かされながら決めたことだからである！　彼は恐ろしくぼんやりして、忘れっぽくなっていた。そして、自分でもそれを知っていた。もう断然急がなければならない！

彼はV通をネヴァ河さして歩き出した。けれど、途中でふと別な考えがわいてきた！　『なぜネヴァへ行くんだ？　なぜ水の中へほうり込むんだ？　いっそどこかずっと遠いところ、たとえば島の方へでも行って、どこかその辺の淋(さび)しい場所で――森の中か藪(やぶ)のかげにでもこんな物をすっかり埋めてしまい、立木を目じるしにしておいた方が、よくはないだろうか？』彼はこの瞬間、はっきりした健全な判断力がないのを自覚してはいたものの、この考えは違っていないような気がした。

とはいえ、島へも行かないで済むめぐり合せになっていた。まるで別な風になってしまったのである。V通から広場へ出ながら、彼はふと左手に当たって、窓一つない殺風景な壁にとり囲まれた裏庭へはいる口を見つけた。右側には、門をはいると庭の奥へかけて、隣りの四階家の荒壁が続いていた。左側には、その荒壁に平行して、同じく門からすぐ板塀になっており、二十歩ばかりも奥へはいると、そこで初めて左へ折れていた。それは全くがらんとした、外界から隔離された空地で、何か建築材料などの置き場になっていた。ずっと先の奥の方には、一見して何かの工場の一部らしい、低いすすけた石造の物置の一角が板塀の陰からのぞいていた。そこはたしか馬車製造所か、鉄工所か、何かそんな風なものに相違ない。門の入り口からそこら一面に、石炭の屑(くず)で真っ黒になっていた。『ここそいっさいの物をほうり込んで逃げ出すのにくっきょうな所だ！』という想念がふいに彼の頭に浮かんだ。裏庭には人影もなかったので、彼はちょろりと門内へすべり込んだ。と、すぐ気がついた。門のかたわらの板塀に沿って樋(とい)が取りつけてある（それは職工や、組合労働者や、辻馬車屋(つじばしゃや)などのたくさん住んでいる、こんな風の家によく設けてある種類のものだ）。樋の上の板塀にはこうした場所につきものの落書がチョークで書いてあった。

『ここに立ち止まること無用』（小便無用の意）してみると、ここへはいって立ち止まっていても、なんの嫌疑も

あり得ないから、むしろ好都合である。『ここでどこかその辺へみんな一まとめに捨ててしまって、そのまま逃げ出してやれ！』

いま一度あたりを見回してから、彼はもう片手をポケットへ突っ込んだ。そのとたんに、外側の壁のすぐ傍で、やっと一アルシンばかりしかない門と樋の間に、大きな割り放しの石が目についた。およそ一プード半（約二十三キログラム）も目方のありそうなもので、通りに面した石壁のすぐわきにあった。この塀の向こうは往来の歩道で、この辺にいつもかなり多い通行人の、あちこちする足音が聞こえていた。しかし、門外からは誰も彼を見つけることはできないはずである。ただ誰か往来からはいってくる時は別問題で、それも大きにありそうなことだ。したがって、急がなければならない。

彼は石へ身をかがめて、その上の端にしっかり両手を掛け、ありたけの力をしぼって、石をひっくり返した。石の下にはちょっとしたくぼみができていた。彼はすぐポケットからいっさいがっさい取出して、その中へほうり込み始めた。財布は一ばん上になったが、それでもくぼみにはまだ余地があった、それから、彼はまた石に手をかけ、一ころがしでもとの側へ向けた。石はかっきり元の位置に落ち着いた。ただほんの心持高く思われるくらいのものである。けれど彼は土をかきよせて、まわりを足で踏みつけた。もうなんにも目立たなくなった。

さて彼はそこを出て、広場の方へ足を向けた。とまたもや、先ほど警察で経験したと同じような、強い堪え難いほどの喜びが、ほんの一瞬間、彼の全幅を領した。『もうこれで始末はついた！　この石の下を捜そうなんて考えが、いったい誰の頭に浮かぶものか？　あの石は、家を建てた時のそもそもからあすこにころがってるんで、これから先も同じくらいの間は、あのままころがっているだろう。よしまた見つけたところで――誰がおれに嫌疑をかけるものか？　もういよいよ片付いた！　証拠がないんじゃないか！』こう考えて、彼は思わず笑い出した。そうだ、彼は後々までも覚えていたが、それは神経的な、はてしのない小刻みな、人には聞こえないほどの笑い方だった。そして、広場を通り抜ける間も、ずっと笑い続けていたのである。が、おとといの少女に出会ったK並木通（ブールヴァール）へさしかかった時、その笑いはぴたりと止まった。別な想念が彼の頭に忍びこんできた。あの時かの少女が立ち去った後で、彼が腰をかけて、さまざまに思いめぐらしたベンチの傍を通り過ぎるのが、とつぜん恐ろしく忌まわしいことに思われたのである。そして、例の二十カペイカくれてやったひげの巡査にもう一度出会うのも、やはり苦しくてたまらないだろうと思われてきた。『くそ、あんなやつ勝手にしやがれ！』

彼はそわそわした意地悪い目つきで、あたりを見回しながら歩いた。彼のすべての思考力は、今ある重大な一点の周囲をどうどうめぐりしていた――そして、実際それが非常に重大な点であることを、自分でも感じていた。今という今こそ、彼はこの重大な点に面と面とつき合せた――しかも、それはこの二か月以来初めてのことだと

さえいえる。
『ええ、こんなことみんなどうなとなってしまえ！』ふいに彼は、はかり難い憤怒の発作にかられながら考えた。
『ふん、始まったことは始まったことに違いない、あんな婆あや新生活なんか、くそくらえだ！　ああ、実になんという愚劣なことか！……おれは今日どれだけ嘘をついたり、卑劣なまねをしたもんだろう！　さっきも、あの胸くその悪くなるような警部風情の鼻息をうかがったり、ごきげんをとったりしたが、なんという陋劣なざまだ！　もっとも、それだってやはりくだらないことだ！　あんなやつらはみんな唾でもひっかけてやればいいんだ！　それから、おれが鼻息をうかがったとか、ごきげんをとったとかいうことも、やはりご同様だ！　そんなことはまるで見当ちがいさ、まるで見当ちがいさ！……』
突如、彼は歩みを止めた。まるで思いがけない、新しい、しかもいたって単純な疑問が、一時に彼を真底からまごつかせ、手痛い驚愕を感じさせたのである。
『もし実際あのことがふらふらした衝動でなく、意識的に行なわれたものとすれば――しんじつ、貴様に一定の確固たる目的があったものとすれば、なぜ今まで財布の中をのぞきもしないで、自分の手に入れたものを知らずにいるのだ。いったい貴様はなんのためにかほどの苦痛を一身に引受けたのだ？　なんのためにあんな陋劣な、けがらわしい、卑しい行為を意識して断行したのだ？　貴様はたった今あの財布をほかの品と一緒に（ほかの品だってやはり調べて見やしなかった）、水の中へほうり込もうとしたじゃないか…これはいったいなんとしたことか？』
そうだ、その通りだ、何もかもその通りだ。もっとも、これは彼も前から心づいていることで、けっして新しい疑問ではない。すでに昨夜それを決めた時から、なんの動揺も反問もなく、あたかもそれが当然のことで、ほかにはなんともしようがないかのように、思い込んでいたのである……そうだ、彼はそれを意識していた、何もかもわかっていた。それはきのう彼が、トランクの上にかがみ込んで、サックなどを引っ張り出していた瞬間から、ほとんどそう決めていたとさえいえる……全くその通りではないか！
『これはつまり、おれがひどい病気にかかっているせいだ』とうとう彼は気むずかしげに断定した。『おれは我とわが身を苦しめて、へとへとにさいなみながら、自分で自分のしていることがわからないのだ……昨日も、一昨日も、いや、ずっとこの間じゅうから、自分で自分をさいなんでいたのだ……健康さえ回復したら……自分で自分を苦しめるようなこともしなくなるだろう……だが、もしまるで回復しなかったら！　ああ、もうこんなことつくづくいやになった！……』彼は立ち止まろうともせず、歩き続けていた。なんとかして気をまぎらしたいと思ったが、どうしたらいいか、どんなことを始めたらいいか、見当がつかなかった。ただどうもこうもならない一つの感触が、ほとんど一刻ましに強く強く、彼の心を領して行った。それは目に触れる周囲のすべてに対

する、限りない嫌悪の情であった。それはほとんど生理的なものといっていいほどで、執拗な、意地わるい、憎しみに満ちたものである。彼は行き会うすべての人が忌まわしかった。彼らの顔、歩き振り、挙動までが忌まわしかった。もし誰かが話しかけでもしようものなら、彼はいきなりその男に唾でも吐きかけるか、かみつきでもしたかもしれない……

ヴァシーリエフスキイ島にある小ネヴァ河の河岸通の、とある橋の袂へ出た時に、彼は突然立ち止まった。『ああここにあの男が住んでいるんだ、この家に』と彼は考えた。『これはどうしたんだ、どうやらおれは自分から、ラズーミヒンのとこへやって来たらしいぞ！　まったあの時と同じようなことになっちゃった……だが、なかなか面白いぞ――おれはわざわざ自分でやって来たのか、それともただ歩いているうちに、ここへ来て来たのか？　まあ、どうでもいいや。おれは自分でそういったじゃないか……そうだ、一昨日のことだ……あれが済んだらその翌日、やつの所へ出かけようって。なに、ぐずぐずいうことはない、行ってやれ！　まるで今はもう、あの男のところは寄れないかなんぞのようにさ……』

彼はラズーミヒンの住まいをさして、五階へ上って行った。

当人は家にいた。ちょうどそのとき自分の小部屋で、何やら書き物をしていたので、自分でドアをあけてくれた。二人は四月も会わなかったのである。ラズーミヒンは、ぼろぼろになるまで着古した部屋着をまとって、素足に上靴を引っかけ、ひげもあたらなければ顔も洗わず、ぼうぼう頭のままでいた。彼の顔には驚きの表情が現われた。

「君どうしたんだい？」はいって来た友を、頭から爪先までじろじろ見回しながら、彼はこう叫んだ。それからしばらく無言の後、ひゅうと口笛を鳴らした。

「いったいそんなにまでひどいことになっているのかい？　いや、君、それは我々仲間の上手をいってるぜ」ラスコーリニコフのぼろを見回しながら、彼は言い足した。「さあ、掛けろよ、どうやら疲れているようだね！」そして、こちらが彼自身のよりもっとひどい、模造皮張りのトルコ式長椅子に、どっかり身を投げ出したとき、ラズーミヒンはふいと客が病気なのに気がついた。

「君はよっぽど体が悪いらしいぜ、君自身でそれを知ってるかい？」

彼は友の脈を見ようとした。ラスコーリニコフはその手をもぎ放した。

「よせ」と彼は言った。「僕が来たのは……こういうわけさ。僕いま出稽古の口がまるでないんだ……で、なんとかして……もっとも、出稽古の口なんかちっともほしかないが……」

「おい、君、君はうわ言をいってるんだぞ！」じっと相手を観察していたラズーミヒンは、そう注意した。

「いいや、うわ言なんかいってやしない……」

ラスコーリニコフは長椅子から立ち上がった。彼は、ラズーミヒンの所へ上ってくる途中も、この友だちと顔

を突き合わさねばならないということを、考えもしなかったのである。ところが、いま彼は一瞬の間に、この場合世界中の誰であろうとも、人と顔を突き合わすなどという気分にはまるでなっていないのを、実地の経験で悟ったのである。体内にありったけの癇癪がむらむらとこみ上げてきた。彼はラズーミヒンの家の敷居をまたいだということだけで、そうした自分自身に対する腹立たしさのあまり、ほとんどむせ返りそうな気がした。

「失敬！」と彼はだしぬけに言って、戸口の方へ歩き出した。

「おい、待てよ、君、待てというのに、変人だなあ！」

「いいよ……」こちらはまた手を振り放しながら、こうくり返した。

「ふん、それくらいなら、貴様なんのためにやって来やがったんだ！　血迷いでもしたのか！　だってそれは……ほとんど侮辱じゃないか。僕はこのまま帰しゃしないよ」

「じゃ、聞きたまえ――僕が君んとこへ来たのは、つまり君以外に僕を助けて……始めさしてくれる人を、誰も知らないからなんだ……だって、君は世間の誰よかも一ばん善良で、というより一ばん聡明で、物を判断する力を持っているからさ……けれど今は、なんにもいらないことがわかった、いいかい、まるっきりなんにもいらないんだ、誰の助けもかかり合いもいらない……僕は自分……一人で……いやもうたくさんだ！　僕にかまわないでくれ！」

「まあ、ちょっと待て、この煙突掃除め！　まるで気ちがいだ！　僕の言うことを聞いてから、あとはなんとでも勝手にしろ。実はね、出稽古の口は僕にもない。それに、そんなものくそくらえだ。ところがさ、古物市場の本屋で、ヘルヴィーモフという男がいる。これがまあ一種の口なんだ。今じゃ僕は、商人の家の出稽古を五つぐらい持って来たって、こいつととっかえっこしないよ。この男は怪しげな出版をやっていてね、通俗科学の本なんかも出してるんだ――ところが、それがすてきにはけるじゃないか！　標題だけでも大した値うちもんだからね！　ほら、君はいつも僕を馬鹿にきめていたが、全くのところ、君、僕に上こす馬鹿がいるぜ！　近頃じゃ奴さん、人並みに傾向がどうとかってなことを言い出したんだからなあ。自分じゃなんにもわからないくせにさ。だが、僕はもちろん、大いに奨励してやってるよ。で、ここにドイツ語の原文が二台分の余あるが――僕に言わせりゃ、ばかげ切った山師論文さ――手っとり早くいえば、女は人間なりや否やという問題を研究して、最後にはもちろん堂々たる論法で、人間なりと証明しているのさ。ヘルヴィーモフはこいつを婦人問題の本に仕立てようてんで、僕が翻訳を引受けたわけさ。先生この二台半ばかりの代物を六台くらいに引のばして、ページ半分も埋まるようなでかでかの標題をつけて、五十カペイカで売り出すんだ。それで立派に立ちいくんだぜ！　僕は翻訳料として一台分六ルーブリもらうから、つまり全部で十五ルーブリ手にはいる勘定だが、もう六ルーブリは前

借りしちゃった。これが済むと、鯨の本の翻訳を始めるんだ。それから『懺悔録（コンフェッション）』の第二部の中からも、思い切ってくだらない無駄話をえり出しておいたから、これもそのうちに訳すわけだ。誰だったかヘルヴィーモフをつかまえて、ルソーは一種のラジーシチェフ（十九世紀の初頭に現われたロシアの先駆的思想家、農奴制度に世人の注意を喚起した第一人者）だなんて言ったからさ。僕はむろん反対なんかしない。あんなやつどうだって勝手にしやがれだ！　そこで、君も『女は人間なりや』の一台目を訳してみないか？　やる気があったら、今すぐテキストを持っていきたまえ。ペンも紙も持っていくがいい――みんな官費だからね――そして、三ルーブリも持ってっていいよ。僕は第一台の分と、二台目の分も、すっかり前借りしちゃったから、三ルーブリは当然君のものになるわけさ。その一台分を済ますと、また三ルーブリ受け取れるぜ。ああ、それからね、これは僕が君に何か恩でもかけてるなんて、そんなことを考えないでくれよ。それどころか、僕は君がはいってくるが早いか、こいつは僕にとって、ありがたい人になるなと、心の中で決めたんだよ。第一に、僕は正字法が得意でないし、第二には、ドイツ語の方だって全然へなちょこだから、まあどっちかといえば、自分で創作する方が多くなるんだ。もっとも、その方がかえってよくなるもんだから、それを慰藉（いしゃ）にしてはいるがね。しかし、ことによったら、よくならないで、悪くなってるかもしれん。そんなことは誰にもわかりっこなしさ……君、引受けるかどうする？」

ラスコーリニコフは無言のまま、ドイツ語の論文を取り上げ、三ルーブリを手にすると、一言も口をきかないで、ぷいと出てしまった。ラズーミヒンはあっけにとられ、そのあとを見送っていた。が、一丁目のところまで来ると、ラスコーリニコフは急にくびすを返し、またラズーミヒンのところへのぼって行った。そて、ドイツ語のテキストと三ルーブリをテーブルの上へ置くと、またもや一言も口をきかずに、さっさと出てしまった。

「君はいったい脳炎でもやってるのかい！」とうとうラズーミヒンは、かんかんにおこり出して、どなりつけた。

「なんだってそんな道化芝居を打ってみせるんだ！　僕でさえ面くらわされるじゃないか……それくらいなら、なぜやって来たんだ、ちくしょう？」

「いらない……翻訳なんか……」と、ラスコーリニコフはもう階段をおりながら、こうつぶやいた。

「じゃ、いったい貴様は何がいるんだい？」とラズーミヒンは上からどなった。

こちらは黙々と階段をおりつづけた。

「おおい！　君はいったいどこにいるんだ！」

答えはない。

「ちょっ、そんなら勝手にしやがれ！……」

しかし、ラスコーリニコフはもう通りへ出ていた。ニコラエフスキイ橋の上で、きわめて不愉快な一事件のために、彼はもう一度はっきりわれに返った。ほかでもない、ある幌馬車（ほろばしゃ）の御者が、三度も四度もどなりつけたにかかわらず、彼が危く馬の首の下へはいってきそうにな

ったので、鞭でぴしっと背中をどやしつけたのである。鞭の打撃は、彼の心に激しい憤怒を呼び起こした。彼は欄干の方へ飛びのいて（なぜ歩道でなく、車道になっている橋のまんなかを歩いていたのか、それはまるでわからない）憎々しげに歯を食いしばって、きりきりと鳴らした。あたりにはいうまでもなく、どっと笑い声が起こった。

「いい気味だ！」

「どっかのやくざ野郎よ」

「わかり切ってらあな、酔っぱらいのまねをして、車の下に敷かれてよ、さあどうしてくれる、ってやつなんさ」

「それが商売なんでさ、お前さん、それが商売なんでさ……」

けれどその時、彼はまだ依然として欄干のかたわらに立ったまま背中をさすりながら、しだいに遠ざかって行く馬車のあとを無意味な毒々しい目つきで見送っていたが、ふと誰かが手に金をつかませるのに気がついた。見ると、それは頭巾をかぶって山羊皮の靴をはいたもう年配の商家の女房で、そばには帽子をかぶって緑色のパラソルを持った女の子がいた。たぶん娘なのだろう。『とっておくんなさいよ、お前さん、クリストさまのためにね』彼は受取った。二人はそのまま通り過ぎた。金は二十カペイカ銀貨だった。身なりと全体の様子で、二人は彼を全くの乞食、街頭における本物の袖乞いと思い込んだらしい。大枚二十カペイカ奮発したのも、あの鞭が女に惻隠の情を起こさせたからに違いない。

彼は二十カペイカ銀貨を手に握りしめて、十歩ばかり歩いてから、宮殿の見えるネヴァ河の流れへ顔を向けた。空には一片の雲もなく、水はほとんどコバルト色をしていた。それはネヴァ河として珍しいことだった。寺院の円屋根はこの橋の上からながめるほど、すなわち礼拝堂まで二十歩ばかり隔てた辺からながめるほど鮮やかな輪郭を見せる所はない。それがいまさんらんたる輝きを放ちながら、澄んだ空気を透かして、その装飾の一つ一つまではっきりと見せていた。鞭の痛みは薄らぎ、ラスコーリニコフは打たれたことなどけろりと忘れてしまった。ただ一つ不安な、まだよくはっきりしない想念が、いま彼の心を完全に領したのである。彼はじっと立ったまま、長い間瞳を据えてはるかかなたを見つめていた。ここは彼にとって特別なじみの深い場所だった。彼が大学に通っている時分、たいていいつも――といって、おもに帰り道だったが――かれこれ百度ぐらい、ちょうどこの場所に立ち止まって、しんに壮麗なこのパノラマにじっと見入った。そして、そのたびにある一つの漠とした、解釈のできない印象に驚愕を感じたものである。いつもこの壮麗なパノラマがなんともいえぬうそ寒さを吹きつけてくるのだった。彼にとっては、この華やかな画面が、口もなければ耳もないような、一種の鬼気に満ちているのであった……彼はそのつど、われながらこの執拗な謎めかしい印象に一驚をきっした。そして、自分で自分が信用できないままに、その解釈を将来へ残しておいた。ところが、いま彼は急にこうした古い疑問とけ

げんの念を、くっきりとあざやかに思い起こした。そして、今それを思い出したのも、偶然ではないような気がした。自分が以前と同じこの場所に立ち止まったという、ただその一事だけでも、奇怪なありうべからざることに思われた。まるで、以前と同じように思索したり、つい先ごろまで興味をもっていたのと同じ題目や光景に、興味をもつことができるものと、心から考えたかのように……彼はほとんどおかしいくらいな気もしたが、同時に痛いほど胸がしめつけられるのであった。どこか深いこの下の水底に、彼の足もとに、こうした過去いっさいが――以前の思想も、以前の問題も、以前のテーマも、以前の印象も、目の前にあるパノラマ全体も、彼自身も、何もかもが見え隠れに現われたように感じられた……彼は自分がどこか高いところへ飛んで行って凡百のものがみるみるうちに消えていくような気がした……彼は思わず無意識に手をちょっと動かしたはずみに、ふと拳の中に握りしめていた二十カペイカを手に感じた。彼は拳を開いて、じっと銀貨を見つめていたが、大きく手をひとふりして、水の中へ投げ込んでしまった。それからくびすを転じて、帰途についた。彼はこの瞬間かみそりか何かで、自分というものをいっさいの人と物から、ぶっつり切り放したような思いがした。

彼はもう夕方になって家へたどりついた。してみると、みんなで六時間も歩き回ったわけである。どこをどう歩いて帰ってきたのか――彼はさっぱり覚えがなかった。服を脱ぐと、へとへとに追い使われた馬のように、全身をわなわなふるわせながら、長椅子の上へ横になって、外套を引っかぶると、たちまちなんにもわからなくなった。

たそがれの色がすっかり濃くなったころ、彼は恐ろしい叫び声で我に返った。大変、いったいなんとした叫び声だろう！　こんな不自然な物音や、こんな咆哮や、悲鳴や、歯がみや、哀泣や、乱打や、罵詈雑言は、いままでついぞ一度も聞いたことも、見たこともない。こんな獣のような暴行ざた、こんな激しい憤怒の発作は、想像することさえできなかった。彼は恐ろしさに身を起こして、ひっきりなしに肝を消したり、悩みもだえたりしながら、寝床の上にすわっていた。しかし、つかみ合いの音や、悲鳴や、ののしる声は、ますます激しくなっていく。やがて、驚き入ったことに、彼はふとこの家のおかみの声を聞き分けた。彼女はうなったり、金切り声で叫んだり、なにやらしきりにかきくどいている。あわてせきこんで、ことばをぬかしたりしながら、祈るような調子でしゃべっているので、何をいってるのやら聞き分けられなかったが――それはもちろん、階段で情容赦なくぶたれているのだから、ぶつのをよしてくれと、祈っているに相違ない。ぶっている男の声は、憎悪と憤怒のために聞くも恐ろしいほどで、ただしゃがれた音を出すばかりだったが、それでもやはりせきこんで咽喉をつまらせながら、何かしら早口にわけのわからぬことをしゃべっていた。と、ふいにラスコーリニコフは、木の葉のようにわななき始めた――彼はその声に気がついたの

である。それは副署長の声であった。イリヤー・ペトローヴィッチがここに来ていて、おかみをぶっているのだ！　足蹴にしたり、頭を段々へぶっつけたりしている――それは明瞭だ。物音や、悲鳴や、打擲の音でわかる！　ぜんたいこれは何事だ、世界がひっくり返りでもしたのか？　どの階にも、どの階段にも、群衆の集まってくるのが聞こえる。人声や叫びが聞こえてくる。階段をのぼってくる、靴をごとごと鳴らす、ドアをばたんばたんいわせる。方々からかけ集まってくる。『しかし、ぜんたいなんのためだ、なんのためにあんなことをするのだ？　どうしてあんなことができるのだろう？』もう真剣に自分は気ちがいになったと考えながら、彼はこうくり返した。しかしそんなはずはない、あんまりまざまざと聞こえ過ぎる……してみると、もしそうだとすると、ここへもすぐやってくるに相違ない。『だって……確かにこれはあのことから……昨日のことから起こったんだもの……さあたいへんだ！』彼は戸に鍵をかけようとしたけれど、手が上がらなかった……それにまたむだなことだ！　氷のような恐怖は彼の魂を包み彼を悩まし抜いたあげく、彼の身体を化石同然にしてしまった……けれどもやがて、まるまる十分間から続いたこの騒動も、ようやくだんだん静まっていった。おかみはため息をついたり、うなったりしているし、副署長はまだやはりおどしたり、ののしったりしていたが……やがて、いよいよ彼も鳴りを静めたらしい。ああ、もう彼の声も聞こえない。『本当に行ってしまったんだろうか！　ありがたい！』そうだ、現におかみも相変わらずうなったり、泣いたりしながら、引取っていく……さあ、とうとう居間のドアがぱたんとしまった……見物の群衆も階段を引上げて、それぞれの住まいへ散っていく――ため息をついたり、いい争ったり、叫びかわしたりしていたが、その声はわめき声に近いほど高くなるかと思うと、ささやくように低くなるのであった。てっきり、うようよ集まったに相違ない。ほとんど建物じゅうの人が駆けつけたものらしい。『だが、どうも、これは実際ありうべきことだろうか！　それにどうして、どうしてあいつがここへやってきたのだ！』

ラスコーリニコフはぐったりと長椅子の上に倒れたが、もう目をふさぐことはできなかった。かつて経験したこともないような、限りない恐怖の堪え難い感じと名状し難い苦痛の中に、三十分ばかりぶっ倒れていた。ふいにあざやかな光線が彼の部屋をぱっと照らした――ナスターシャが蝋燭とスープの皿を持ってはいって来たのである。彼女は注意深く彼を見回して、眠っていないのを見定めると、蝋燭をテーブルの上に置き、持ってきた物を並べ始めた――パンと、塩と、皿と、さじだ。

「おおかた昨日から何も食べなかったんだろうね。一日ほっつき歩いてさ、しかもおこりで体じゅうふるわしてるんだからね」

「ナスターシャ……どうしてかみさんはぶたれたんだい？」

彼女は穴のあくほど彼を見つめた。

「誰がかみさんをぶったの？」
「今しがた……三十分ばかり前に、イリヤー・ペトローヴィッチが、警察の副署長が、階段の上で……なぜあの男があんなにおかみさんを打ちのめしたんだい！　そして……なんのために来たんだい？」
　ナスターシャは黙って眉をひそめながら、じろじろ彼を見回した、いつまでも見つめているのであった。彼はこの長い凝視のために、不愉快でたまらなくなった、それどころか、恐ろしくさえなった。
「ナスターシャ、なんだって黙ってるんだい？」とうとう彼は弱々しい声で、おずおずと言った。
「それは血だよ」やがて彼女は小さな声で、ひとり言のように答えた。
「血！……なんの血だ！……」彼はさっと青くなって、壁の方へじりじりさがりながら、こうつぶやいた。
　ナスターシャは無言のまま彼をながめつづけた。
「誰もかみさんをぶちゃしないよ」彼女はまたもや、いかつい、きっぱりとした調子で言い切った。
　彼はほとんど息もしないで彼女を見つめていた。
「おれはこの耳で聞いたんだ……おれは寝てやしなかった……腰かけていたんだ」と彼は前よりさらにおずおずと言った。
「おれは長いこと耳を澄ましていたよ……副署長がやって来て……みんなが駆け出して、階段の方へ集まったじゃないか。どの住まいからも……」
「誰も来やしないよ。それはあんたの体の中で血が暴れているせいだよ。血の出所がなくなって、鬱して濃くなってくると、いろんなものが見えたり聞こえたりするのだよ……ご飯はどう、食べるかね？」
　彼は返事をしなかった。ナスターシャは彼の枕もとにたたずんだまま、じいっとその顔を見つめながら、出て行こうともしなかった。
「飲むものをくれ……ナスターシュシュカ」
　彼女は下へおりて行ったが、二分ばかり立って、安物の陶器の水飲みに、水を入れて引っ返した。が、彼はその先どうなったか、もう覚えていなかった。ただ覚えているのは、冷たい水を一口のんで、水飲みから胸へ水をこぼしたことだけである。それから人事不省になってしまったのである。

三

とはいえ彼は病気の間じゅう、まるまる人事不省だったわけでもない。それは夢魔と半意識の入りまじった、熱病的な状態だった。彼は後になっていろいろな事を思い起こした。どうかすると、まわりに大勢の人が集まって、彼をつかまえてどこかへ連れて行こうとする。そして、彼のことをそうぞうしく議論したり、争ったりしているような気がした。かと思うと、今度は急にみんな外へ出てしまって、彼一人きり部屋の中にいる、人々は彼を恐れて、時たまほんのぽっちりドアをあけて様子をうかがい、彼をおどすまねをしたり、自分たち同士で何やら打ち合わせをしたり、笑ったり、からかったりしている。ナスターシャがしょっちゅう傍にいたのも、彼はよく覚えている。それから、もう一人の男も見分けることができた。なんだか知合いらしくもあるが、はたして誰なのか――どうしても想像がつかないので、彼はそれがじれったくって泣いたくらいである。どうかすると、もう一月もふせっているような気もしたが、また時には、やはり同じ日が続いているようにも思われた。しかし、あの事は――あの事件はとんと忘れてしまっていた。その代わり、何かしら忘れてならない事を忘れている、ということを絶えず思い起こすのであった――そして、思い出してはもだえ苦しみ、うめき声を立て、もの狂おしい憤りか、さもなくば身も世もあらぬほど堪え難い恐怖にとらわれる。そのような時、彼は飛び上がって駆け出そうとしたが、いつも誰かが力ずくで引きとめる。で、彼はまたしても力がぬけ、人事不省に陥るのであった。やがてようよう全く正気に返った。

それは午前十時ごろのことだった。朝のこの時刻になると、晴れた日ならば、太陽はいつも長い条(しま)をなして、部屋の右手の壁にすべり抜け、戸口の片隅を照らした。ベッドのかたわらにはナスターシャと、いま一人一面識もない男が、物珍しそうに彼を見回しながら立っていた。それは長外套(カフタン)を着、あごひげをたくわえた若者で、見たところ組合の労働者らしかった。半ば開いた戸口からは、おかみが顔をのぞけていた。ラスコーリニコフは身を起こした。

「これは誰だい、ナスターシャ？」と彼は若者を指さしながらたずねた。

「ああら、気がついたよ！」と彼女は言った。

「気がついたね」組合労働者も応じた。

戸口からのぞいていたおかみは、彼が気のついたのを察すると、すぐにドアをしめて姿を隠した。彼女はいつも引っ込み思案のたちで、こみ入った話や掛合いがつらくてたまらない方だった。彼女は年ごろ四十格好、黒い目に黒い眉をした、ふとって脂ぎった女で、肥満と不精のために人が好かった。そして、器量もなかなか踏める方だったが、度外れにはにかみやなのであった。

「君は……誰です？」今度は当の組合労働者に向かって、彼はまた問いかけた。

けれど、この時ふたたびドアがさっとあけ放されて、背が高いので少しかがむようにしながら、ラズーミヒンがはいって来た。
「まるで船室だ」とはいって来ながら彼は叫んだ。「いつもおでこをぶっつけちまうんだ。これでもやはり住まいと称してるんだからなあ！　君、気がついたってね！
今パーシェンカ（主婦の名）から聞いたよ」
「たったいま気がついたんだよ」とナスターシャが言った。
「たったいま気がつかれたんで」と組合労働者も、微笑を浮かべながらあいづちを打った。
「ところで、そういう君はどなたでいらっしゃるんですね？」突然彼の方へ向き直りながら、ラズーミヒンは尋ねた。「僕はごらんの通り、ヴラズーミヒンです。皆さんはラズーミヒンとおっしゃるが、実はそうじゃなくてヴラズーミヒンです。大学生で、士族の倅です。そして、この男は僕の友人と。さてところで、君はいったいどなたですね？」
「わっしは労働組合の事務所にいるもんですが、商人のシェラパーエフの使いでこちらへ伺ったんで、用がありましてね」
「どうぞこの椅子にお掛けください」テーブルの反対側から、ほかの椅子に腰をおろしながら、ラズーミヒンは言った。「でも、君、気がついてくれてよかったなあ」と彼はラスコーリニコフの方へ向きながらことばを続ける。「もうこれで四日というもの、ほとんど飲まず食わずなんだからなあ、実際、お茶をさじで飲ませてたんだぜ。僕はここへゾシーモフを二度も引っ張ってきたよ。ゾシーモフを覚えてるかい？　先生、綿密に君を診察したが、すぐになんでもない、何かちょっと脳にさわったんだろう、とこう言ったよ。ごくつまらない神経症だそうだ。まかないの方が悪くって、ビールとわさびが足りなかったもんだから、それで病気も出たわけだが、なに大丈夫、今に自然となおるそうだよ。ゾシーモフのやつ、なかなかえらいぜ！　堂々たる治療ぶりを見せるようになったよ。いや、しかしもうお話の邪魔はいたしません」と彼は再び組合労働者の方へ振り向いた。「どういうご用ですか、一つ説明を願えませんでしょうかね？　注意しておくがね、ロージャ、このお方の事務所から使いがみえたのは、もうこれで二度目なんだぜ。もっとも、先はこの男じゃなくて、別なのだったよ。僕はその男と話していたんだ。あれはどなたでしたかね、あなたの前にみえたのは？」
「あれはきっと一昨日のことでございましたろう、確かにそうです。アレクセイ・セミョーヌイチがお伺いしたので。やはりわっしどもの事務所に勤めていますんで」
「ですが、あの人は君より多少ものわかりのいい方じゃないでしょうか、いかがお考えですな？」
「さよう、確かにずっとしっかりしております」
「これは感心な心がけだ。さあ、話の続きを願います」
「実は、アファナーシイ・イヴァーヌイチ・ヴァフルーシン、多分たびたびお聞き及びのことと思いますが、あ

の方の手を通して、あなたのおふくろさんの振り出しなさった為替が、わっしどもの事務所へ参っておりますので」と男は直接ラスコーリニコフに向かって言い出した。
「で、あなたが物のわきまえがつくようになられたら、三十五ルーブリお渡しするはずになっておりますので。つまり、おふくろさんが為替を振り出しなさったことにつきまして、セミョーン・セミョーヌイチがアファナーシイ・イヴァーヌイチの手から、前々どおりの方法で通知を受け取られたのでございます。ご承知でいらっしゃいますか？」
「そう……覚えてる……ヴァフルーシン……」とラスコーリニコフは考え深そうに言った。
「どうです、この男は商人のヴァフルーシンを知っていますよ！」とラズーミヒンは叫んだ。「これがどうして正気がないんだ？　もっとも今になって気がついたが、君もやはりものわかりのいい人間だ。いや、どうも！賢い人の話というものは聞いていても気持がいいですよ」
「つまりその方なんで、ヴァフルーシンさん、アファナーシイ・イヴァーヌイチなんでございます。この人があなたのおふくろさんご依頼で、前にも一度同じようなあんばい式で、こちらへ送金なさいましたが、今度もいなやをおっしゃらないで、一両日前あちらからセミョーン・セミョーヌイチのところへ、三十五ルーブリの金をあなたに渡してくれ、匆々頓首と、こういう通知があったのでございます」
「いや、『匆々頓首』は一番の傑作だ。『あなたのおふくろさん』云々も悪くなかった。ところで、君のご意見はどんなもんでしょう、この人はすっかり正気に返ってるでしょうか、それとも返っていないでしょうか――え？」
「わっしなんかどうでもかまいませんよ。ただ受取りさえきちんとしてればけっこうなんで」
「どうにかこうにか書くだろう！　君の方じゃなんですかね、帳簿にでもなってる？」
「帳簿なんで。この通り」
「こっちへもらいましょう。さあ、ロージャ、起きろよ。僕がささえてるから。奴さんに『ラスコーリニコフ』と一筆ふるってやれよ。ペンを持ちたまえ。だって、君、今のわれわれにゃ金は蜜以上だからね」
「いらない」とペンを押しのけながら、ラスコーリニコフは言った。
「いらないとは、そりゃまたどうしたことだ？」
「署名なんかしないよ」
「ちょっ、こんちくしょう、受取りを書かないでどうするんだ？」
「いらない……金なんか……」
「えっ、金がいらないって！　おい、君、そりゃでたらめだよ、僕が証人だ！――どうかご心配なく、こりゃ先生ただちょっくら……まだ夢の国をうろついているもんだから。もっとも、この先生はうつつでも、時々こういうことがあるんでね……ねえ、君は分別のある方だから、

一つ二人がかりで、この男を指導してやろうじゃありませんか。といって何も造作はない、この男の手を持って動かしてやる。すると、この男が署名したわけですよ。さあ、とっかかろうじゃありませんか……」
「ですが、わっしはまた出直して参りましょう」
「いやいや、そんなご心配にゃ及びませんよ。君は分別のある人だから……さ、ロージャ、あんまりお客さんをひっぱっとくもんじゃないよ……見たまえ、待っておられるじゃないか」こう言って、彼はまじめにラスコーリニコフの手を持ってやる身構えをした。
「いいよ、自分でする……」と言うなり、ラスコーリニコフはペンを取って、帳簿に署名した。組合の男は金を置いて、出て行った。
「しめた！　ところで、今度は何か食べたくないか？」
「食べたい」とラスコーリニコフは答えた。
「君んとこにスープあるかい？」
「昨日のだよ」さっきからずっとこの場に立っていたナスターシャが、そう答えた。
「じゃがいもとひきわり米のはいったのか？」
「じゃがいもとひきわりのはいったのよ」
「ちゃんとそらで知ってらあ。じゃ、スープをよこせよ。そして、お茶を持って来てくれ」
「もって来るよ」
　ラスコーリニコフは深い驚きと鈍い無気味な恐怖をいだきながら、始終の様子をながめていた。彼はいっさい沈黙を守って、このさき何があるか待つことに心を決めた。
『どうもおれは熱に浮かされているのじゃないらしい』と彼は考えた。『どうもこれは本当のことらしい……』
　二分ばかりたつと、ナスターシャがスープを持って引っ返した。そして、すぐに茶もくると告げた。スープにはさじが二本と皿が二枚、ほかに付属食器が全部――塩入れ、こしょう瓶、牛肉用のからし入れなどがついている。こんなにきちんとそろったことは、絶えて久しくないことである。テーブル・クロースも洗いたてだった。
「なあ、ナスターシュシュカ、おかみさんがビールを二本ばかりよこしてくれると、悪くないんだがな。一杯やりたいんでね」
「まあ、この長脛（ながすね）ったら！」とナスターシャはつぶやいて、命を果たすために出て行った。
　ラスコーリニコフはけうとい緊張した目つきで、凝視を続けていた。その間に、ラズーミヒンは長椅子に席を移して、彼と並んで腰をおろし、当人は一人で起きることもできたのに、熊よろしくの無骨な格好で、左手に彼の頭をかかえ、右手にスープのさじを持ち、病人が口を焼かないように、あらかじめ幾度も吹いてから、彼の口へ持っていってやった。けれど、スープはわずかに暖かいというだけであった。ラスコーリニコフはむさぼるように一さじのむと、つづいて二さじ、三さじと飲みほした。けれどもいくさじか口へ運んだのち、ラズーミヒンはふいに手を止めて、これ以上はゾシーモフに相談してからでなければと言った。

ナスターシャがビールを二本もってはいってきた。
「お茶はいらないかい？」
「ほしいよ」
「ナスターシャ、お茶も早く頼むぜ。お茶の方は、医科先生に相談しなくてもかまわんだろうからな。だが、いよいよビールがきた！」と彼は自分の椅子に席を移して、スープと牛肉を手もとへ引寄せると、まるで三日も食わなかったような勢いで、さもうまそうに食い始めた。
「僕はね、君、ロージャ、このごろ毎日君んところで、こういう食事をしてるんだぜ」牛肉をいっぱいつめこんだ口の許す範囲内で、彼はむにゃむにゃと言った。「これはみんなパーシェンカ、君んとこのおかみが賄(まかな)ってくれたんだよ。あの女、一生懸命に僕にちやほやしてくれるのさ。むろん、僕はかくべつ主張もしないが、拒絶もしないんだ。さあ、ナスターシャがお茶を持ってきた。どうも機敏な女だなあ！　ナスチェンカ、ビールはどうだね」
「ええ、ふざけるでないよ！」
「じゃ、お茶は？」
「お茶はもらってもいいけど」
「つぎたまえ。いや、待てよ。おれが手ずからついでやろう。テーブルの前にかけたまえ」
　彼はさっそく手順をつけて一杯ついだのち、また別の茶碗に一杯つぐと、朝飯をおっぽり出して、また長椅子に帰った。彼は前と同じように、左手で病人を抱いて、少し持ち上げるようにし、またぞろ一生懸命にひっきりなく吹きながら、茶さじから茶を飲ませ始めた。まるでこのさじを吹くという手順の中に、健康回復上もっとも重大な回生の要点が含まれている、とでもいうようなようすであった。ラスコーリニコフは誰の手を借りなくとも、長椅子の上に身を起こして、じっとすわっているだけの力は十分あるし、さじや茶わんを持つくらい手の自由がきくのみか、歩くことさえできるかもしれないと感じてはいたけれど、じっとおし黙って逆らおうともしなかった。一種不思議な、ほとんど野獣めくほど狡猾(こうかつ)な本能から、しばらくある時期まで自分の力を隠してじっと息をひそめ、必要に応じてあまりはっきり意識のないさまを装いながら、その間に周囲の情勢がどうなっているか、聞き耳を立てて探り出してやろうという考えが、とつぜん彼の頭にわいたのである。とはいえ、心内の嫌悪感を抑えることはできなかった。十さじばかりも茶をすると、彼はふいに頭を振り放して、気まぐれな様子でさじを突き戻すと、また枕の上へ身を倒した。彼の頭の下には、今では本物の枕が置いてあった――さっぱりとしたおおい布のかかった羽根枕である。彼はこれにもやはり気がついて、考慮に入れておいた。
「パーシェンカに今日さっそく木いちごのジャムをよこしてもらおう。この男の飲むものを作ってやらなくちゃ」ラズーミヒンは自分の席へ戻って、またスープやビールに取っかかりながら言い出した。
「おかみさんがなんでお前さんなんかに、木いちごを取ってくれるもんかね？」五本の指をひろげた上に受け皿

をのせ、口に含んだ砂糖で茶をこして飲みながら、ナスターシャはこう言った。
「木いちごはな、お前、店へ行ってとってきてくれるよ。ロージャ、実はこんど君の知らない間に、大した事件があったんだよ。君があんなかたり同然のやり口で、居所もいわずに僕のところから逃げ出したとき、僕はいまいましくっていまいましくってたまらなかったので、君をさがし出して制裁してやろうと決心したのさ。そして、すぐその日から着手して、歩いたわ歩いたわ、たずねたわ、たずねたわ！　今のこの住まいを僕は忘れてたのさ。もっとも初手から知らなかったんだから、覚えていないのがあたりまえよ。だがね、君の前の住まいは覚えていた――五辻（ピャーチウグロフ）でハルラーモフの家と、それだけ記憶に残っている。で、僕はこのハルラーモフの家をさんざんさがし回ったね――ところが、あとでわかったんだが、ハルラーモフの家じゃなくって、ブッフの家だったのさ――どうも音（おん）というやつは間違いやすいもんでね！　とうとう僕は癇癪（かんしゃく）を起こしちゃった。癇癪を起こしてさ、あくる日また、むだでもなんでもかまわん気で、警察の住所係へ出かけたんだ。ところが、まあどうだ、一分か二分の間に君の名を見つけてくれたんだ。君の名は警察にちゃんと書き留めてあるぜ」
「書き留めてある？」
「そうともさ。ところが、カベリョーフ将軍という人は、僕もそばで見ていたが、どうしても捜し出せなかったんだからな。いや、話せばずいぶん長いことだがね。僕はここへ乗り込むとすぐさま、君に関係した事件をすっかり聞かされちゃったよ。すっかりだぜ、君、僕はもうなんでも知ってるよ。この女も知ってるよ。僕はニコジーム・フォミッチとも知り合いになれば、イリヤー・ペトローヴィッチ（副署長）にも紹介してもらった。それから庭番とも、ザミョートフ氏――ほら、あのアレクサンドル・グリゴーリッチ、つまりここの警察の事務官とも、それから最後にパーシェンカとも知り合いになった――これなんかは全く僕の功労に対する月桂冠（げっけいかん）だね。現にこの女も知ってるが……」
「うんと砂糖をきかせたもんだでね」と狡猾そうににやにや笑いながら、ナスターシャがつぶやいた。
「じゃ、お茶に入れて召し上ったら、ナスターシャ・ニキーフォロヴナ」
「まあ、このおす犬め！」だしぬけにナスターシャはこう叫びながら、ぷっと吹き出した。「だって、わたしのお父さんはピョートルですもの、ニキーフォロヴナじゃないでないか」とまたふいに笑いやめて彼女はつけ足した。
「いや、おことば玩味（がんみ）いたしますでございます。そこで、君、むだは抜きにして、僕は初め、この土地におけるすべての偏見を根絶するために、いたるところへ電波を放とうかと思ったんだ。ところが、パーシェンカの説が勝ったもんだから。僕はね、君、あの女があれほど……味を持っていようとは……さらに思いがけなかったよ、え？　君はどう思う？」

ラスコーリニコフは不安らしい視線を、一刻も相手から放さなかったが、じっとおし黙っていた。そして、今もしゅうねく彼を見守り続けていた。

「むしろ非常にといっていいくらいさ」ラズーミヒンは彼の沈黙に根っから困る風もなく、相手から受け取った返事にあいづちを打つような調子でしゃべりつづけた。「むしろきわめてけっこうだよ、あらゆる点において」

「まあ、なんて野郎だろう！」とナスターシャがまたしても叫んだ。見たところこの会話は、ことばにつくし難い幸福感を彼女に与えるらしい。

「ただ困るのは、君が最初のそもそもから、この事件をうまくあしらう腕を持っていなかったことだ。あの女にはああいうやり方じゃいけなかったのさ。全くあの女は、なんというか、意想外千万な性格の所有者なんだからね！　まあ、性格のことなんかあとでいい……ただ君はどういうわけで、たとえばさ、あの女が君に食事もよこさないなんて、そんな生意気なことをするように仕向けたんだい？　またたとえばだ、あの手形はなんだい？　いったい君は気でも違ったのかい、手形に署名するなんて！　それからまた、娘のナタリヤ・エゴーロヴナが生きてた時分に、約束のできていた縁談さ……僕は何もかも知ってるぜ！　いや、もっとも、これはデリケートな胸の琴線に関することで、この方面については僕はろば同然らしい。僕はあやまるよ。だがついでに一つばかげた話だが、君はなんと思う？　実際プラスコーヴィヤ・パーヴロヴナ（おかみ）は、ちょっと見ほどばかじゃないだろう、え？」

「うん……」とラスコーリニコフはそっぽをながめながらも、この話をもう少し続けさせる方が有利だと悟ったので、ことばを歯の間から押し出すように言った。

「そうじゃないか？」と、返事をしてもらったのがいかにもうれしそうに、ラズーミヒンは叫んだ。「だが、全くりこうという方じゃないだろう、え？　実に、実に意想外な性格だ！　僕は正直のところ、いささかまごつかされてるんだよ……あいつ確か四十になるだろう。ところが、自分じゃ三十六と言ってるんだ。もっとも、そういうだけの資格は十分あるね。しかし、誓っていうが、僕あの女についてはむしろ知的に、ただ形而上学のみで判断してるんだ。今われわれの間には、君の代数学も手をくだしようのない、どえらい表徴が生じてるんだからね！　何がなんだかわけがわからないのさ！　いや！　こんなことはみんなくだらん話だ。ただあの女は、君がもう大学生でもなくなり、出稽古の口にも離れ、衣類までもなくしてしまった上にさ、娘が死んでしまったので、もう君を親類あつかいする必要もないと気がついて、急にどきっとしたわけだ。また君は君で隅っこへすっ込んで、一向に以前の約束を履行しない。そこであの女は、君をここから追い出そうという了見を起こしたのさ。もう以前からその計画をいだいていたのだが、手形が惜しくなってきたし、そのうえ君自身も、お袋が払ってくれるなんて言ったから……」

「それは僕が卑劣なために言ったことなんだ……僕の母

はほとんど自分で袖乞(そでご)いしないばかりの有様なんだもの……僕はこの下宿に置いてもらって……食わしてもらいたさに、嘘をついたんだ」とラスコーリニコフは大きな声で、はっきりと言った。

「そうだ、それは君、りこうなやりくちだったのさ。ただ問題は、七等官チェバーロフ氏という事件屋が、そこへひょっこり登場したことだ。この男がいなかったら、パーシェンカはおそらく、なんにも考えつきはしなかったろう。全く恐ろしいはにかみやだからね。ところが、事件屋はけっしてはにかみやじゃないから、まず第一番に、はたしてこの手形を生かす見込みがあるやいなや、という問題を提起した。ところでその答えは、確かにあると出た。なぜって見たまえ、君には母親というものがあって、たとい自分は食わないでも、可愛いいロージェンカだけは、百二十五ルーブリという年金の中からくめんして、救わずにはおかないし、また兄のためには身を売ってもかまわないというような、妹があるじゃないか。先生、ここに計算の土台をすえたわけだ……君、何をもぞもぞするんだい？　僕はね、君、今こそ君の内幕を知りぬいてるんだよ。君がパーシェンカとまだ親類づきあいをしていたころに、打明け話をしたのがたたったのさ。もっとも、いま僕は君を愛すればこそ言うんだがね……ねえ、つまりそこのとこなんだよ――正直で感じやすい人間は、何げなしに打明け話をするが、事件屋はそれを聞いて食い物にする。そして、最後には骨までしゃぶってしまうのさ。そこであの女は、金を払ってもらった体(てい)にして、チェバーロフに手形を譲渡したんだ。するとこっちは、正式の手続で金を請求したのさ。きまりなんか悪がりゃせんからね。僕はこのいきさつを知るや否や、ただちょっと、良心に対する義務をはたすくらいのつもりで、この男にもやはり電波を通じてやろうと思った。ところが、ちょうどそのころ、僕とパーシェンカとの間に一種のハーモニイが生じたので、僕は君が必ず払うからと保証して、この事件を大きくならない前に、きれいに中止しろとあの女に命じたんだ。おい、君、僕は君のことを保証したんだぜ、いいかい？　そこで、チェバーロフを呼んで、十ルーブリほおっぺたへたたきつけてさ、手形を取り戻したわけだ。さあ、この通りつつしんで君に捧呈する――もう口約だけで信用しとくよ――さ、受け取ってくれ。僕がちゃんと、しかるべく端を破いといたからね」

ラズーミヒンは借用証書をテーブルの上へのせた。ラスコーリニコフは、ちらとそれを見やったが、一言も口をきかないで、壁の方へくるりと向いてしまった。これにはさすがのラズーミヒンもむっとしたほどである。

「なるほどそうか」一分ばかりして彼は言った。「僕はまた馬鹿な役回りを勤めちゃったんだ。罪のないおしゃべりで君の気をまぎらして、慰めてやろうと思ったんだけど、ただ癇(かん)の虫を起こさせたばかりらしい」

「僕は熱に浮かされているとき、君の顔の見分けがつかなかったかね？」同様に一分間ばかり黙っていた後、ラスコーリニコフは顔を振り向けようともせずにたずね

た。
「つかなかったとも、そのために気ちがいみたいにおこり出したほどだよ。ことに僕が一度ザミョートフを連れて来た時など、そりゃ大変だったぜ」
「ザミョートフを？……事務官を？……なんのために？」
ラスコーリニコフは急に振り返って、きっとラズーミヒンに目を据えた。
「おい、何を君はそんなに……なんだってそう心配そうな顔をするんだい？　君と近づきになりたいと言い出したんだよ。あの男が自分から言い出したんだ。それってのがね、二人で君のことを色々話したからさ……でなくて、誰から君の事がこう詳しく知れると思う？　君、あれは実にいい男だよ、全くすてきな人間だ……もっとも、むろん、それもある意味においてだがね。で、今じゃ僕らは親友同士の間がらで、ほとんど毎日のように会ってるんだ。だって、僕はこの方面へ引っ越して来たくらいだもの。君はまだ知らないんだね？　つい最近引っ越したばかりなんだ。ラヴィーザの所へも、あの男と二度ばかり行って見たよ。ラヴィーザを覚えてるかね、ラヴィーザ・イヴァーノヴナを？」
「僕なにかうわ言を言ったかね？」
「言わなくってさ！　まるで君の体が君のものでなかったんだもの」
「どんなうわ言を言った？」
「へえ、これはこれは！　どんなうわ言を言ったかって？　どんなことかわかり切ってらあね……さあ、君、もうこの上時間をつぶさないように、用件にかかろうじゃないか」
　彼は椅子から立って、帽子に手を掛けた。
「どんなうわ言を言ったよう？」
「ええっ、一つ覚えみたいに何いってるんだ！　それとも何か秘密でもあって、それを心配してるのかい！　ご念にゃ及びません。伯爵夫人のことなんか、なんにもいやしなかったよ。ただどこかのブルドッグがどうとか、やれ耳輪がなんだとか、やれ鎖がどうのと言ってたっけ。それからクレストーフスキイ島のことだの、どこかの門番のことだの、ニコジーム・フォミッチのことだの、副署長のイリヤー・ペトローヴィッチのことだの、いろいろしゃべってたよ。ああ、そのほか君ご自身の靴下のことが、たいそう気がかりのご様子でしたよ、たいそうね！
　それこそほんとうに哀願するような調子で、靴下をくれ、靴下をくれと、ただその一点ばりさ。でも、ザミョートフが自分で隅々を隈なくさがして、やっとのことで見つけた上、オーデコロンで洗い上げて指輪をいくつもはめた手で、そのぼろを君に渡したんだ。その時はじめてご安心あそばして、まる一昼夜、そのぼろっ屑を両手に握りしめていらっしったっけ。もぎ放すこともできないくらいさ。きっとまだどこか毛布の下にころがってるだろう。かと思うと、今度はまたズボンの切れっ端をねだり出すんだが、ほんとうに涙を流さないばかりなのさ！　僕らはいろいろ頭をひねってみたが、いったいぜんたいどんな切れっ端やら、とんと見当がつかなかった

よ……さあ、そこでいよいよ用件に取りかかろう！　ここに三十五ルーブリあるから、このうち十ルーブリだけ持ってくよ。二時間もたったら、計算書をこしらえて君に提出する。その間に、ゾシーモフにも知らせてやろう。もっともそうしないでも、あの男もうとっくに来てなくちゃならんはずだがな。もう十一時過ぎだもの。ところで、君、ナスチェンカ、僕の留守中せいぜいのぞいてみてやってくれ、飲みものとか、そのほかなんでも欲しいというものをやるように。パーシェンカには僕が自分で必要な事は言っとくから。じゃ失敬！」

「おかみさんのことをパーシェンカだなんて！　なんて厚かましい男だろう」とナスターシャはうしろから追っかけるように言った。それからドアをあけて耳を澄まし始めたが、辛抱し切れなくなって、自分も下へ駆け出した。

彼女はラズーミヒンが下でかみさんと何を話してるか、知りたくてたまらなかったのである。それに全体からみて、彼女はどうやらラズーミヒンにぼうっとなっているらしかった。

彼女の出たあとのドアがしまるが早いか、病人は毛布をはね飛ばして、気ちがいのように寝床からおどり上がった。彼は焼けつくようなけいれんに近い焦燥の念をいだきながら、一刻も早く二人のものが出て行って、その留守に仕事にかかれる時が来るのを、今か今かと待ち設けていたのである。しかし、それはなんだろう、どんな仕事だろう？――彼はまるでわざとのように、それをど忘れしたのだ。

『おお神様、たった一言聞かせてください――みんなはもう何もかも知っているのか、それともまだ知らないのか？　もし知っていながら、僕の寝ている間だけ空っとぼけて、いい加減からかったあげく、いきなりここへやって来て、もう何もかもとっくに知れていたんだが、ただちょっと知らないような振りをしていただけだ……なんて言い出したら、どうだろう？　いったいこれからどうするんだったっけ？　ひょいと忘れてしまった、まるでわざとねらったように、急にど忘れしてしまった。つい今しがたまで覚えていたのに！』

彼は部屋のまんなかに突っ立って、悩ましい疑惑に包まれながら、あたりを見回した。やがて、戸口へ近寄ってドアをあけ、じっと耳を澄ましたが、これも見当ちがいだった。と、ふいに思い出したように、彼は例の壁紙に穴のあいている片隅へ飛んで行き、一生懸命に調べてみたり、手を突っ込んでかき回したりしたが、これもやっぱりそうではなかった。彼はストーブの方へ行って、その戸をあけ灰の中をかき回してみた。と、ズボンの裾の切れっ端や、引きちぎったポケットのぼろぼろになったのが、あのとき投げ込んだままでころがっていた。してみると、誰も見なかったわけだ！　その時ふと彼は、今しがたラズーミヒンの話した靴下のことを思い出した。実際それは長椅子の上に掛けた蒲団(ふとん)の下にはいっていたが、あのとき以来もうすっかりもみくたになって、汚れくさっていたので、ザミョートフもむろん、何ひと

つ見分けることができなかったに相違ない。
『やっ、ザミョートフ！……警察！……だがなんのためにおれを警察へ呼ぶんだ？　どこに出頭命令があるんだ？　やっ！……おれはごっちゃにしてた……あれはあのとき召喚されたんだっけ！　あの時もやっぱり靴下を調べていた。ところで、今は……今おれは病気なのだ。が、ザミョートフは何用でやって来たんだろう？　ラズーミヒンはなんのために、あんな男を連れて来たんだろう？……』再び長椅子に腰をおろしながら、彼は力なげにつぶやいた。『これはいったいどうしたんだろう？　やっぱりうわ言の続きかしら？　それとも本当なのか？　どうも本当らしい……ああ、思い出した、逃亡だ。早く逃げるんだ。ぜひ、ぜひとも逃げるんだ！　だが……どこへ！　おれの服はどこにある？　靴もない！　片づけちゃった！　隠しやがったんだ！　わかってらあ！　ああ、ここに外套（がいとう）がある――見落としやがったな！　ほい、金もテーブルの上にのっかってる、ありがたい！　ここに手形もある……おれはこの金を持って逃げ出そう。そして、ほかの住まいを借りよう。やつらに捜し出せるものか……だが、住所係は？　見つける。ラズーミヒンは見つけ出すに違いない。いっそ本当に逃げてしまおう……うんと遠方へ……アメリカへでも。そうすれば、あいつらなんかくそくらえだ！　手形も持って行こう……向こうで何かの役に立つかもしれない。それからほかに何を持って行くかな！　あいつらはおれを病気だと思っていやがる！　おれの歩けることを知らないんだ、へ、へ、へ！　おれはちゃんと目つきで読んだ、あいつらは何もかも知ってるんだ！　ただ階段をおりさえすりゃ！　だが、もし下に見張り巡査が立っていたら！　や、これはなんだ、茶か！　おや、ビールも残っている、びんに半分ほど、冷たいぞ！』
　彼はまだコップ一杯分ほど残っているビールのびんを取って、まるで胸の中の火を消そうとでもするように、さも心地よげに一息に飲みほした。けれど、一分もたたぬうちに、もうビールが頭へずきんときて、軽いむしろこころよい悪寒が背筋を流れた。彼は横になって蒲団を引っかぶった。それでなくても病的なとりとめのない彼の思想はしだいしだいにごっちゃになって行き、間もなく軽いこころよい眠りが彼を包んでしまった。彼は陶然たる気持で頭で枕当りのいい所をさがしあて、今までの破れ外套の代りに、いつの間にやら掛かっている柔らかい綿のはいった蒲団にしっかりくるまると、静かに吐息をついて、ぐっすりと深い眠りに落ちた。それは治癒の力を持った眠りである。
　誰かのはいってくる物音を聞いて、彼は眠りから覚めた。目をあけて見ると、ラズーミヒンがドアをさっとあけ放したまま、はいったものかどうかと思いまどうように、敷居の上に突っ立っていた。ラスコーリニコフはすばやく長椅子の上に起き直って、何やら思い起こそうと努めるもののように、じっとその顔を見つめていた。
「おや、寝てないんだね？　僕もう帰って来たよ！　ナスターシャ、包みをここへ持って来てくれ！」とラズー

ミヒンは下へ向かって呼んだ。「今すぐ計算書を渡すよ……」
「何時だい？」と不安げにあたりを見回しながら、ラスコーリニコフはたずねた。
「いや、すごく寝たもんだ。もう外は夕景だよ。かれこれ六時ごろだろうよ。六時間あまりも寝たわけだ」
「たいへんだ！　僕はなんだってそんなに！……」
「それがどうしたのさ！　ようこそお休みじゃないか！　どこへ急ぐんだい？　あいびきにでも行こうってのかい？　今こそ時間が完全に我々のものになった。僕はもう三時間ばかりも君を待ってたんだよ。二度も来てみたけれど、君が寝てるもんだから。ゾシーモフのところも二度ばかりのぞきに行ったが、留守、留守の一点ばりさ。だが、大丈夫、やがて来るよ！……やっぱり用事で家を明けたんだから。僕じつは今日引っ越したよ。すっかり引っ越しちゃったんだ、伯父と一緒にね。今僕んとこには伯父が来てるんだよ……いや、そんなことどうでもいいや、用件にかかろう！　包みをこっちへくれ、ナスチェンカ。さあ、これから二人で……ときに、君、気分はどうだね！」
「僕は健康だよ、病気じゃない……ラズーミヒン、君は前からここにいたのかい？」
「三時間待ち通したって、言ってるじゃないか」
「じゃない、その前のことさ」
「なんだ、前って？」
「いつごろからここへ通っているんだい？」
「だって、ついさっき君にすっかり話したじゃないか。それとも、もう覚えてないかい？」
　ラスコーリニコフは考え込んだ。さっきの事が夢のように彼の頭にひらめいた。が、一人では思い出せなかったので、彼は問いかけるようにラズーミヒンをながめた。
「ふむ！」とこっちは言った。「忘れたんだね。僕はどうもさっきから、君がまだ十分……その、なにになってない、というような気がしてたよ……だが、今は一寝入りしたおかげで、すっかりよくなった……実際、顔色がずっとはっきりしてきたよ。えらいぞ！　さて、いよいよ用件にかかろう！　なに、すぐ思い出せるよ。一つこっちを見たまえな、君」
　彼は気になってたまらなかったらしい包みを解きにかかった。
「これはね、君、全くのところ、とくべつ僕の気にかかってたんだよ。なぜって、君を人間らしくしなくちゃならないものね。さあ、着手しよう。上から始めるんだね。君ひとつこの帽子を見てくれ」と包みの中からかなり小ぎれいな、と同時にいたってありふれた、安物の学生帽を取出しながら、彼はしゃべり始めた。「ちょっと頭に合わさせてくれ」
「あとで、こんど」気むずかしそうにその手を払いのけながら、ラスコーリニコフは言った。
「いや、君、ロージャ、もう逆らわないでくれ。あとじゃ遅くなり過ぎるんだから。それに寸法を取らずに、当てずっぽうで買って来たんだから、ぼく今夜一晩じゅう

寝られないじゃないか。ちょうどかっきりだ！」と彼は頭に合わせてみて、勝ち誇ったように叫んだ。「ちょうどあつらえたようだ！　頭飾りというやつは、君、服装の中でも一番に位するもので、一種の看板みたいなもんだからね。僕の友人のトルスチャコーフなんか、いつも公開の席へ出るたびに、ほかの者は帽子をかぶっているのに、やっこさん必ずかぶり物を脱ぐんだ。みんなはね、奴隷根性のせいだと思っているが、あに図らんや、ただ鳥の巣同然な帽子が恥かしいからに過ぎんのさ。どうも恐ろしいはにかみやでね！　さてと、ナスチェンカ、ここに帽子が二つあるが、お前どっちがいいと思う――このパルメルストンか（と彼は片隅から、ラスコーリニコフの見る影もない丸い帽子を取り出した。彼はなぜか知らないが、これをパルメルストンと命名したので）、それともこの珠玉の如き絶品か！　ロージャ、一つ値を踏んでみたまえ、いくら出したと思う？　ナスターシュシュカは？」相手が黙っているのを見て、彼は女中の方へふり向いた。

「大方二十カペイカくらいなもんだろう」とナスターシャは答えた。

「二十カペイカ？　ばか！」と彼は憤慨してどなりつけた。「今どき二十カペイカそこいらじゃ、お前だって買えやしないよ――八十カペイカだよ！　それも、少し使ったものだからさ。もっとも、条件つきなんだ――これがかぶれなくなってしまったら、来年はまた一つ別なのをただでよこすってよ、ほんとうだよ！　さあ、今度はアメリカ合衆国にかかろう。ほら。中学時代にそういってたじゃないか。断っておくが、このズボンは僕の自慢なんだよ！」と彼は軽い夏地の毛織で作った鼠色のズボンを、ラスコーリニコフの前へひろげて見せた。「穴もなければ、しみ一つない。出物とは言い条、なかなか悪くないだろう……それから同じくチョッキ、流行の要求する通り共色だ。古物という点だが、これは実際のところ、かえっていいんだよ。柔かくってしなやかだからな……考えてもみたまえ、ロージャ、社会へ出て成功しようというにゃ、僕に言わせると、常にシーズンを守りさえすりゃたくさんなんだ。正月にアスパラガスを求めるようなことをしなけりゃ、金入れには何ルーブリかの金がしまっておけるわけだよ。この買物にしてもその通りで、今は夏のシーズンだから、僕も夏の買物をしたんだ。なぜって、秋に向かうと、シーズンがまだ暖かい生地を要求するから、こんなものは捨ててしまわなくちゃならなくなるからね……それに、ましてやそのころになれば、こんなものはひとりでに破けてしまうさ。奢侈（しゃし）の増加のためでなければ、内在的な不備のためにね。さあ、値を踏んでみたまえ！　君の目には幾らに見える？――二ルーブリ二十五カペイカよ！　そして、覚えときたまえ、これも同じ条件なんだから――こいつをはき破ったら、来年べつのをただでくれるんだ。フェジャーエフの店では、その方法でしきゃ商売しないんだよ――一度金を払っといたら、生涯それで済むのさ。なぜって、買手の方でも二度と出かけやしないからね。さあ、今度は靴の番

だ――どうだい？　一度はいたものってことはすぐわかるが、二月ぐらいのご用は勤めてくれるよ。だって外国製だもの、舶来ものだぜ。イギリス大使館の書記が、先週古着市場（トルクーチイ）へ出したんだよ。たった六日はいたきりでさ。急場の金に困ったもんだからね。値段は一ルーブリ五十カペイカ。うまいだろう？」

「でも、足に合わないかもしれないよ！」とナスターシャが注意した。

「合わない！　じゃ、これはなんだい！」と彼はポケットから、古い化けて出そうな、穴だらけの上にかわいた泥が一面にこびりついている、ラスコーリニコフの靴を片足取出した。「僕はちゃんと用意して出かけたんだ。この化物然たるやつで本当の寸法を調べてもらったのさ。僕は何もかも誠心誠意やったんだからね。シャツのことはかみさんと話し合いをつけた。ほら、第一ここにシャツが三枚ある、並み麻ものだが流行風の襟がついてる……さて、そこでと、帽子が八十カペイカ、二ルーブリ二十五カペイカが衣類いっさい、合わせて三ルーブリ五カペイカだ。それから一ルーブリ五十カペイカが靴――だって、全く上物だからな――しめて四ルーブリ五十五カペイカさ、それから五ルーブリが肌着いっさい――談判して卸し値にさせたんだよ――いっさいで合計九ルーブリ五十五カペイカさ。四十五カペイカのおつりだが、みんな五カペイカ玉だよ。さあ、お受け取りください――とまあ、こういったわけで、君もいよいよ衣裳（いしょう）がすっかりできあがった。だって君の外套（がいとう）は、僕の意見によると、まだ役に立つばかりか、特殊の風韻（ふういん）さえ帯びているからね――シャルメルの店なんかへ注文したら、たいへんなもんだぜ。靴下やその他の物に至っては、君に一任しておこう。金はまだ二十五ルーブリ残っているよ。パーシェンカのことや下宿料のことは心配無用、さっきもいった通り、無限の信用があるんだからね。ときに、君、シャツを一つかえさせてくれたまえ。でないと、病気のやつがちょうどシャツの中に隠れているかもしれないから……」

「よせ！　いやだ！」ラズーミヒンの衣類調達に関する緊張した、しかも冗談まじりの報告を、嫌悪の色を浮かべて聞いていたラスコーリニコフは、さもうるさそうに振り払った……

「君、そりゃだめだよ。じゃ僕、なんのために足をすりこぎにしたんだい！」とラズーミヒンは屈しなかった。「ナスターシュシュカ、何も恥かしがることはないから、手を貸してくれ――そうだそうだ！」

ラスコーリニコフが抵抗するのもかまわず、彼はとにかくシャツをとりかえてやった。こちらは枕の上にぶっ倒れて、二分間ばかりは一言も口をきかなかった。

『まだなかなか離れてくれそうにもないぞ』と彼は考えた。

「どういう金でこんなにいろんなものを買ったんだい！」と壁を見つめながら彼はたずねた。

「どういう金？　こいつああきれた！　君自身の金じゃないか、さっき労働組合のものが来たろう、ヴァフルー

シンの使いで、お母さんが送ってよこしたんじゃないか。それとも、こんなことまでも忘れたのかい？」
「やっと思い出した……」長い気むずかしげな物思いの後に、ラスコーリニコフはこう言った。
ラズーミヒンは眉をしかめて、不安げに彼をながめていた。
ドアが開いて、背の高いでっぷりした男がはいって来た。見たところ、どうやらラスコーリニコフにも多少見覚えがあるらしかった。
「ゾシーモフ！　やっとのことで！」ラズーミヒンは喜んでこう叫んだ。

四

ゾシーモフは背の高い脂肪質らしい男で、きれいにそり上げてはいるが、ややむくみのある色つやの悪い青白い顔をして、亜麻色の髪はすんなりとして癖がなかった。眼鏡をかけているほか、脂肪でふくれたように見える指に大きな金指輪をはめている。年ごろは二十七見当らしかった。彼はゆったりとしたハイカラな外套を着、薄色の夏ズボンをはいていた。概して彼の身についているものは、すべてゆったりしたハイカラな仕立おろしばかりだった。肌着も非の打ちどころのないもので、時計の鎖もどっしりとしている。身のこなしはゆっくりしていて、なんとなくのろくさく見えるが、同時にこしらえものの らいらくといったようなところがあった。しかし尊大な気取りが、つとめて隠してはいるものの、のべつちらち ら顔をのぞける。彼を知っているすべての人は、いやな付き合いにくい男のようにいっていたが、しかし自分の職務には明るいという評もあった。
「僕はね、君んとこへ二度も寄ったんだぜ……見たまえ、気がついたよ！」とラズーミヒンは言った。
「わかってるよ、わかってるよ。お気分はいかがですな、え？」と、じっとラスコーリニコフの顔に見入りながら、ゾシーモフは彼の方へふり向いた。そして、彼の長椅子に腰をおろし、病人の足の辺に尻を落ち着けると、すぐさまできるだけ体をくつろげた。

「始終ヒポコンデリイばかり起こしてるんだよ」とラズーミヒンはことばを続けた。「今シャツを取りかえてやったんだが、もう泣き出さないばかりさ」
「それは無理もないことだ。当人が望まなければ、シャツなんかあとでもよかったんだ……脈は上等。頭痛はまだいくらかしますか、え？」
「僕は健康です、僕は全く健康体です！」ふいに長椅子の上に身を起こして、目をぎらぎら光らせながら、強情ないらいらした調子でラスコーリニコフはそう言ったが、すぐに枕の上へどうと倒れ、壁の方へ向いてしまった。
　ゾシーモフはじっと彼を注視していた。
「たいへんけっこう……何もかも順調にいってます」と彼はだるそうに言った。「何かあがりましたかね？」
　ラズーミヒンは様子を話して、何をやったらいいか尋ねた。
「なに、もう何を食べさせてもいいさ……スープ、茶……きのこやきゅうりなんかはむろんいけないがね。それからと、牛肉もやっぱりいけない。そして……いや、この際なにもぐずぐず言うことはない！」彼はラズーミヒンと目くばせした。「水薬はいらない、なんにもいらない。あす僕が見るから……もっとも、今日だっていいんだが……いや、まあ……」
「明日の晩は、僕この男を散歩に連れて行くぜ！」とラズーミヒンは一人で決めてしまった。「ユスーポフ公園あたりへ。それから『水晶宮（パレー・ド・クリスタル）』へも寄るんだ」
「明日はまだ病人に身動きもさせない方がいいんだが、しかし……少々は……いや、まあも少したってみればわかるさ」
「そいつは残念だなあ。今日は僕の引っ越し祝いでね。ここからたった一足なんだ。この男も来てくれるといいんだが。せめて僕たちの間（ま）で、長椅子の上にでも寝ててくれるとなあ！　君はもちろん来るだろう？」と、ラズーミヒンは急にゾシーモフの方へ向いて言った。「忘れちゃいけないぜ、いいかい、約束したんだからな」
「行ってもいい、ちと遅くなるがね。いったいどんなしたくをしたんだい？」
「いや、別に何も。茶、ウォートカ、にしん。それに肉まんじゅうが出るはずだ。内輪の連中だけの集まりだから」
「といって、誰々だい？」
「なに、みんなこの近くのひとで、ほとんど新しい顔ばかりさ。もっとも――年とった伯父（おじ）だけは例外だがね。しかしこれだって、やはり新顔といっていいんだ。――昨日ちょっとした用向きで、ペテルブルグへやって来たばかりだからね、僕は五年に一度くらい会ってるのさ」
「どんな人だい？」
「一生地方の郵便局長をじみにやって……わずかな恩給をもらっている六十五の老爺（ろうや）で、問題にする価値はないよ……もっとも、僕は好きなんだ。それからポルフィーリイ・ペトローヴィッチも来る――ここの予審判事で……法律家さ。ねえ、君も知ってるはずじゃないか」

「あれも何か君の親戚かい？」
「ごく遠い何かに当たるんだよ。いったい、君、なんだってそんなしかめっ面をするんだい？　一度あの男と喧嘩したことがあるからね。じゃ、君はたぶん来てはくれまいね？」
「僕はあんなやつ屁とも思ってやしない……」
「そりゃ何よりだ。それからあとは――大学の連中に、教師と官吏が一人ずつ、音楽家が一人、警部、ザミョートフ……」
「君、一つきかしてもらうがね、君やこの人と」とゾシーモフはラスコーリニコフをあごでしゃくった。「それからあのザミョートフなんて男と、いったいどんな共通点があるんだね？」
「いやはや、どうもしちむずかしい男だなあ！　主義信条の一点ばりだ！……君はまるでぜんまいみたいにすっかり主義で固まってて、自分の意志じゃ体の向き一つ変えることもできないんだからな。僕に言わせると、人物さえよければ、それで理屈が通るのさ。それ以上なんにも知ろうとは思わない。ザミョートフは実にすばらしい男だよ」
「そして、内々ふところを暖めてる」
「内々ふところを暖めたって、我々の知ったことじゃないじゃないか！　いったいふところを暖めてりゃどうしたというんだい！」なんとなく不自然にいらいらしながら、ラズーミヒンは叫んだ。「あの男がふところを暖めているのを、僕が賛美したとでもいうのかい？　僕はただあの男のことを、ある意味においていい人間だと言ったまでだよ！　端的に言ったら、あらゆる点において完全に善良な人物なんて、どれだけも残りゃしないよ！　まあ、僕なんか確信してる――そうなれば、僕なんぞは臓腑ぐるみほうり出したって、焼いた玉ねぎ一つくらいにしか、値ぶみしてくれやしない。それも君をおまけにつけてさ！……」
「そりゃ安すぎる。僕なら君には二つくらい出すよ……」
「僕は君に一つきゃ出さない！　さあ、もっと洒落のめしてみたまえ！　ザミョートフはまだ小僧っ子だから、僕はやつを少々いじめてやるんだ。だがね、あの男は突っ放してしまわないで、ひきつけておく必要があるのさ。人間てものは、突き放すことによって、匡正できるもんじゃないからね。ことに小僧っ子においてはなおしかりさ。小僧っ子に対しては一倍の慎重さが必要だ。や、どうも君のような進歩的鈍物ときたら、何ひとつわからないんだからね！　他人を尊重しないで、しかも自分を侮辱してるんだもの……もし君が聞きたいというなら、話してもいいがね、実は僕らの間には、共通の一事件が始まりかかってるらしいのさ」
「聞きたいもんだね」
「といって、やっぱり例の塗り職人、つまりペンキ屋の一件さ……われわれはきっとあいつを救い出してみせる！　もっとも、今じゃもう少しも困ることはないんだ。事件はきわめて、きわめて明白なんだからね！　ただもう少し我々が尻押ししてやればいいんだ」

「いったいそのペンキ屋ってなんだい？」
「ええ、君に話さなかったかい？　そう、話さなかったっけなあ？　そうだ、今初めて君に話しかけたばかりじゃないか……ほら、官吏の後家で小金を貸してた婆さんの殺人事件さ……それに今度ペンキ屋が引っかかってるんだよ……」
「ああ、あの殺人事件なら、僕の方が君よりさきに聞いたんだ。そして、この事件に興味さえいだいてるくらいだよ……まあ、多少だがね……ある偶然の機会で新聞でも読んだよ！　それで……」
「リザヴェータまで殺してしまったんだからねえ！」ラスコーリニコフの方へ向きながら、ナスターシャが藪(やぶ)から棒にこう言った。
　彼女は始終ずっとそこに残って、ドアにぴったり身を寄せたまま、聞いていたのである。
「リザヴェータ？」やっと聞こえるほどの声で、ラスコーリニコフはつぶやいた。
「リザヴェータよ、あの古着屋の。お前さん知らないのかい？　下へもよく来てたよ。お前さんのシャツをつくろってくれたことがあるじゃないか」
　ラスコーリニコフはくるりと壁の方へ向いてしまった。そして白い花模様のついている汚れた黄色い壁紙の上に、何か茶色の線で飾られた不格好な白い花を一つ選び出し、それに弁が何枚あって、弁にぎざぎざがいくつあり、線が何本あるかをしさいに点検しはじめた。彼は手も足もしびれてしまって、まるでいうことをきかなくなったような気がしたが、身じろぎ一つしてみようとも せず、強情に花を見つめていた。
「で、そのペンキ屋がどうしたんだい？」何やらかくべつ不機嫌な様子で、ゾシーモフはナスターシャの饒舌(じょうぜつ)をさえぎった。
　こちらはほっと吐息をついて、口をつぐんだ。
「やっぱり犯人とにらまれたのさ！」とラズーミヒンは熱くなってことばを続けた。
「何か証拠でもあるのかい？」
「証拠なんかあってたまるもんか！　もっとも、つまり証拠があればこそなんだが、この証拠が証拠になっていないのだ。そこを証明しなくちゃならんわけさ！　それはね、最初警察があの連中……ええと、なんといったっけ……コッホとペストリャコフ、あの二人を引っ張っていって嫌疑をかけたのと、寸分たがわず同じ筆法さ。ペっ！　こういうことは実に愚劣きわまるやり口で、人ごとながら胸くそが悪くなるくらいだ！　ペストリャコフの方は、もしかすると、きょう僕んとこへ寄るかもしれない。時に、ロージャ、君はもうこの一件を知ってるだろうな。病気になる前の出来事だから。ちょうど君が警察で卒倒した前の晩さ。あの時あすこでその噂をしてたはずだ……」
　ゾシーモフは好奇の目を向けてラスコーリニコフを見やったが、こちらは身じろぎもしなかった。
「ねえ、ラズーミヒン！　こうしてみていると、君はずいぶんおせっかいだなあ」とゾシーモフが口をはさんだ。

「それだってかまわないさ。とにかく救い出してやらなくちゃ」とラズーミヒンは拳固でテーブルをたたいて叫んだ。「ねえ、やつらのすることでもっともしゃくにさわるのはなんだと思う？　それはあいつらがでたらめを言ってることじゃない。でたらめは許すことができる。でたらめは愛すべきものだ。なぜなら、それは真実へ導く一つの道程だからね。僕がいまいましくてたまらないのは、やつらがでたらめをいいながら、しかも自分のでたらめを跪拝していることなんだ。僕もポルフィーリイ（予審判事）は尊敬している。しかしだ……たとえば、警察のやつらをまずのっけからとまどいさせてしまったのは、いったいなんだと思う？　ほかでもない、初めドアがしまっていたのに、二人が庭番を連れて来てみると、ちゃんと開いていた、だからコッホとペストリャコフが殺したのだ！　これがやつらの論理なんだからなあ」

「まあ、そうむきになるなよ。あの二人はただちょっと拘留しただけなんだもの。それをしないわけにゃいかないよ……時に、僕はそのコッホに会ったよ。聞いてみると、どうだい、やつはあの婆さんのところで流れ質の買占めをやってたんだぜ！　え？」

「うん、何かそんな風のいんちき野郎さ！　やつは手形の買占めもやってるよ。抜け目のない男さ。だが、あんなやつなんか勝手にしやがれだ！　いったい僕が何を憤慨してるか、君わかるのかい？　警察の時代おくれな、俗悪な、古ぼけて干からびた、月並みなやり口を憤慨してるんだぜ……この事件については、ただこの事件一つだけでも、大した新しい道を開拓することもできるんだからね。ただ心理的材料だけでも、いかにして真の証跡を突きとめるべきかということを、証明することができるんだからね。『われわれの方には事実が上がっている！』なんて言ってるが、しかし事実は全部じゃないからね。少なくとも事件の半ばまでは、事実を取扱う腕にあるんだ！」

「じゃ、君にゃ事実を取扱う腕があるんだね？」

「だって、事件に一臂の力を貸すことができるのを感じながら、手さぐりにそれを感じてるのに、黙ってるわけにいかんじゃないか！　ただもし……ええ、くそっ！　君はこの事件をくわしく知ってるのかい？」

「だから、ペンキ屋の話を待ってるんじゃないか」

「あっ、そうだっけね！　じゃ、まあ事の顛末を聞きたまえ。凶行があってからちょうど三日目の朝、警察のやつらがコッホとペストリャコフを相手にさ、二人とも自分の行動の経路を証明して、無罪は一見して明白になっているのに、なおくどくどうるさくやってたと思いたまえ――そこへ突然意外千万な事実がわいて出た。というのは、例の家と向かい合せに居酒屋を出してる百姓出のドゥーシュキンという男が、警察へ出頭してさ、金の耳輪のはいった洒落たサックを差し出して、まるで一編の小説ともいうべき話を陳述したんだ。『実は手前どもへ一昨日の晩、かれこれ八時まわったころでもございましょうか』――この日日と時刻、よく聞いてるね、君？――『その日も昼間に一度やって来たペンキ職人のミコ

ライという男が、金の耳輪と宝石類のはいったこの箱を持って参りまして、それを抵当に二ルーブリ貸してくれと申します。手前がどこで手に入れた？　と尋ねますと、歩道で拾ったと申します。で、手前もそれ以上は根掘り葉掘りいたしませんでした』とドゥーシュキンが言うんだ。先生さらに曰くさ。『札を一枚出してやりやした』――つまり一ルーブリのことだね――『それというのは、手前どもで取らなけりゃ、わきへ持って行く、で、どのみち飲んじまうんだから、まあ品物は手もとへ置いておけ、よっくだいじにしまっといた方が、出す時に好都合だ、もし変な事でもあるとか、何か噂でも立つようだったら、さっそく、お届けすればいいとこう思いましたので』いや、もちろん口から出まかせの嘘八百で、まるで夢のような話なのさ。僕はこのドゥーシュキンをよく知ってるが、自分が小金貸しで、臓品なんか取って隠してるやつさ。今の話の三十ルーブリかの貴金属だって、うまくミコライからかたり取ったんで、けっして『お届けする』つもりなんかありゃしない。ただおじ気がついたので出頭しただけなんだよ。だが、まあ、そんなことはどうだっていいや、あとを聞きたまえ。ドゥーシュキンのやつ、つづけて曰くさ。『手前は、そのミコライ・デメンチエフを幼い時分から存じております、同県のザライスク郡の百姓でござります。実は手前どもリャザン生れでござりますので、ミコライは酒飲みと申すほどじゃござりませんが、ちょっくらやります方で。ところが、やつが例のあの家でミトレイと一緒にペンキ塗りの仕事をしておったことは、手前どもも承知しておりました。ミトレイというのも、やはり同じ村の出でござります。そこで、野郎は札を握ると、すぐにそいつをくずして、いっときにコップ二杯ひっかけて、つりをつかんで行ってしまいました。その時ミトレイは一緒じゃござりませんでした。さてところがそのあくる日、アリョーナ・イヴァーノヴナと、妹のリザヴェータ・イヴァーノヴナが、斧でやられたって話を聞きました。手前ども、あの二人を知っておりましたんで、すぐ例の耳輪のことを臭いぞと感づきました――と申しますのは、故人が品物を抵当に金を貸しておったのを、承知してたからでござります。手前はやつの働いておる家へ行って、そっとけどられぬようにかぎ出してやろうといたしました。まず第一に尋ねましたのは、ミコライが来ておるかどうかということなので。ところが、ミトレイの申しますには、ミコライのやつは夜遊びを始めて、夜明けごろに酔っぱらって宿へ帰って来たが、十分ばかりいたっきりで、またぞろ出てしまい、それからてんで姿を見せないもんだから、ミトレイが一人で仕事を片づけておるところだと、こういうわけでござります。仕事と申しますのは、人殺しのあった住まいと同じ階段つづきになっている、二階の部屋なんでござります。手前はそれだけ聞きまして、その時は誰にも何一つしゃべりませんでした』これはドゥーシュキンが言うことなんだよ。『それから人殺しのことにつきましては、いろいろできるだけのことを聞き込みまして、やはり初めと同じ疑念をもったままで、家へ帰っ

て参りました。ところが、今朝八時のことでございます』つまり三日目のことなんだよ、わかるね。『ミコライが、手前どもへはいって参りました。しらふでもございませんが、大して酩酊してもおりませず、話はわかるのでございます。床几に腰をおろしたまま、黙り込んでおります。ちょうどその時、店の中には、やつのほかによその男が一人と、別な床几の上でもう一人、馴染の客が寝ているだけで、あとは家の小僧二人きりでございました。――そこで「ミトレイに会ったかい？」と尋ねますと、「いや会わねえ」とこう申します。「家へも来なかったね？」「一昨日から来なかった」とこうなんで。「ゆうべどこで泊まった？」「ペスキイの荷足船の上さ」と申しやす。「ときにあの耳輪はどこから持って来たんだい？」といいますと、「歩道で拾ったんだ」と申しましたが、なんだかいかにもばつが悪そうで、人の顔を見ようともいたしません。で、手前は、「あの晩あの時刻に、あの階段つづきで、これこれのことがあったのを聞いたか？」と申しますと、「いんや、聞かねえ」とは言ったけれど、目を丸くして、人の話を聞きながら、みるみる死人のようにまっさおになりました。手前はそこでこれこれこうと話しながら、様子を見ておりますと、やつめ帽子をつかんで、腰を浮かすじゃございませんか。そのとき手前はやつを抑えようという気を起こしまして、「まあいいじゃねえか、ミコライ、一杯やらねえか？」と言いながら、小僧にドアを抑えてろと目くばせしておいて、帳場から出て行きますと、野郎はいきなり、手前どもから通りへ飛び出して、いちもくさんに横町へ駆け込んじまいました――あっという間もございません。そこで、手前の疑っておったことが、間違いないと決まりました。確かにやつの仕業に相違ございません……』

「そうでなくってさ！……」とゾシーモフは言った。

「まあ待ってくれ！　しまいまで聞くもんだ！　そこでもちろん全力をあげてミコライの捜索に取りかかった。ドゥーシュキンは拘留して、家宅捜索をやった。ミトレイも同様さ。それから、荷足船の連中もちょっとばかり引っ張られた。――こうしてやっとおとといあのミコライを拘引したんだ。見付け付近の旅籠屋で取り抑えたのさ。やつはその家へ行くと、銀の十字架をはずして、それで一合くれと言うんだ。そこで飲ませてやった。しばらくたって、女房が牛小屋へ行って、何げなく隣の納屋を隙間からのぞくと、やつは小屋の梁へ帯をかけて、輪さを作ってさ、丸太の切れ端に乗っかって、その輪さを首へかけようとしているじゃないか。女房はびっくりして、声を限りにわめき立てたので、たちまち大勢集まって来た。『お前はいったい何者だ！』と聞くと、『わっしをこれこれの警察へ連れてってくれ、残らず白状する』と言うんだ。そこで相当の手続をして、これこれの警察、つまりここの警察へ突き出したのさ。さあ、それから、姓名は、職業は、年齢は、『二十二歳』、云々、云々があって、さてそのあとで尋問だ。『お前は、ミトレイと仕事をしている時に、誰か階段を上って来たものを見かけなかったか、時刻はこれこれだ』答えて曰く、『それ

ゃきっと通って行ったに違いありますまいが、わっしたちは気がつきませんでした』『では、何か変わった物音のようなものを聞かなかったか？』『別に変わった物音も聞きませんでした』『では、ミコライ、お前はその当日、これこれの日の、これこれの時刻に、これこれの寡婦(やもめ)が妹と一緒に殺害されて、金品を強奪された事は知らなかったか？』『一向に存じません。夢にも知りません。わっしは三日目に初めてアファナーシイ・パーヴルイチの居酒屋で、亭主から聞いたばかりでございます』『ではどこで耳輪を取って来た？』『歩道で拾いましたので』『なぜあの翌朝ミトレイと一緒に仕事に出なかったか？』『実は、その、遊んだもんでございますから』『どこで遊んだ？』『これこれこういう所で』『なぜドゥーシュキンの所から逃げ出したか？』『あの時にゃなんだかやたらむしょうにおっかなかったもんで』『何がこわかったのか？』『裁判所へ引っ張られそうで』『もし自分で何も悪い事をした覚えがないのなら、何もこわがる筋はないじゃないか』……ところで、ゾシーモフ君は本当にするかどうか知らんが、こんな問いが提出されたんだぜ。この通りの言い回しでさ。僕は確かに知ってるんだ。正確に聞かしてもらったんだから！　まあどうだね、どうだね？」

「そう、だが、しかし、証拠にはなってるね」

「いや、僕が今いってるのは証拠の事じゃなくて、尋問そのもののことだ。彼らがその本質をいかに解釈しているか、それを論じてるんだ！　まあ、あんな連中なんかどうでもいいや！……彼らはミコライを責めて、責めて、ぎゅうぎゅういうほどしめつけたので、とうとう白状してしまった。『歩道で拾ったんじゃありません。実は、ミトレイと二人で壁を塗っていた、あのアパートで見つけましたんで』『どんな風にして見つけた？』『へえ、それはこんな風でございました。わっしはミトレイと二人で、いちんち八時ごろまで仕事をして、帰りじたくをしておりますと、ミトレイのやつがいきなりわっしの面へ、ペンキをさっと一刷毛(ひとはけ)なすりつけました。こんなあんばいに、わっしの面へペンキをべたっとつけて、逃げ出しやがったんで、わっしもそのあとを追っかけて行きました。追っかけながら、ありったけの大きな声でわめきました。ところが、階段から門へ出る口で――いきなりはずみで、庭番と旦那がたにぶっつかりましたんで。旦那がたがいくたりいられたか、覚えがございません。すると、庭番がわっしをどなりつけました。もう一人の庭番も同じようにどなりました。そこへまた庭番のかかあが出て来て、これもやっぱりわっしたちをどなりつけやがるんで、そんなところへ、奥さん連れの旦那が門の中へはいって来て、やはりわっしたちをお叱りになりました。わっしとミトレイが道幅いっぱいにころがってたからなんで。わっしがミトレイの髪の毛をつかんで、引きずり倒してぶんなぐると、ミトレイも下からわっしの髪の毛をつかんで、ぶんなぐるのでございます。もっとも、二人とも本気で怒ったんじゃなくって、つまり仲がいいもんだから、面白半分にやったんで。そのうちに、

ミトレイのやつが振りほどいて、通りの方へ逃げ出したので、わっしはまたあとを追っかけましたが、追いつけなかったので、一人でアパートへ戻って来ました――あと片づけをしなきゃなりませんからね。わっしは片づけながら、ミトレイが今くるかくるかと待っておるうちに、入り口の部屋のドアの傍で、小壁のかげの片隅に、ふいとこの箱を踏んづけましたんで。見ると、紙にくるんだものが落っこってる。紙をとって見ると、こんなちっぽけな鉤(かぎ)がついてるんで、その鉤をはずしてみたら、箱の中に耳輪が……』

「ドアの外かい？　ドアの外にあったのかい？　ドアの外に？」ふいにラスコーリニコフは、おびえたようなどんよりしたまなざしで、ラズーミヒンを見ながら叫んで、片手をつきながら、ぱっと長椅子の上に起き直った。

「うん……だが、どうしたんだい？　君はいったいどうしたんだい？　なんだって君はそんな？」

ラズーミヒンは同じく席から身を起こした。

「なんでもない！……」とラスコーリニコフはまた枕の上へ身を落として、再び壁の方へ向きながら、やっと聞こえるくらいの声で答えた。一同はしばらく黙っていた。

「きっと、うとうとしかけたところを、ねぼけて言ったんだよ」もの問いたげにゾシーモフの顔を見ながら、とうとうラズーミヒンはそう言った。

こちらは軽く頭を横に振った。

「まあ、話を続けたまえ」とゾシーモフは言った。「それから？」

「それからも何もあるものか！　やっこさんは耳輪を見ると、たちまちアパートのことも、ミトレイのことも忘れてしまって、帽子をひっつかむなり、ドゥーシュキンの所へ駆けつけたのさ。そして先刻ご承知の通り、歩道で拾ったと嘘をついて、一ルーブリ受け取ると、その足で遊びに出かけちゃったんだ。が、殺人事件については、前と同じように言い張ってるんだ。『いっこうに存じません、夢にも知りません、やっと三日目に聞いたばかりなんで』『じゃ、なぜ今まで出て来なかったか？』『こわかったからなんで』『なぜ首なんかくくろうとしたか？』『思案にくれたからで』『どんな思案に？』『裁判に引っ張り出されそうで』さあ、これが一部始終の顛末(てんまつ)だ。そこで、君はどう思う、彼らはこれからいかなる結論を引出したか？」

「何も考えるがものはありゃしない、罪跡はあるんじゃないか。よしそれがいかなるものにもせよさ。そうとも。君がいくら騒いだって、そのペンキ屋を無罪放免にするわけにいかないじゃないか？」

「だって、やつらはもう今じゃ頭から、真犯人にしてしまってるんだよ！　もうなんの疑念も持ってないんだぜ……」

「なに、そりゃ嘘だ。君はあまり熱し過ぎてるよ。じゃ、耳輪はどうしたというんだい？　君自身だって同意せずにいられないだろう――同じ日の同じ時刻に、婆さんのトランクの中の耳輪が、ミコライの手へはいったとすれば――ね、わかるだろう、何かの方法で手にはいったに

相違ないじゃないか？　こういう事件の審理に際して、この事実はけっして些細なものじゃないよ」
「どうして手にはいったかって！　どうして手にはいったかって？」とラズーミヒンは絶叫した。「ねえ、ドクトル、君は、君は第一に人間を研究すべき職務の人じゃないか、他の何人よりも、人間の性情を研究する機会を多く持ってる人じゃないか――その君がこれだけの材料を持ちながら、このミコライがどういう性情の人間か、全体それがわからないのかい？　彼の陳述が一見しただけで、神聖この上ない事実だってことがわからないのかい？　全く彼が申し立てた通り、間違いなくその通りの順序で手にはいったんだよ。箱を踏んづけて、拾い上げたのさ！」
「神聖この上ない事実だって！　しかし先生自身も、初めは嘘を言ったと白状してるじゃないか！」
「まあ、僕の言うことを聞きたまえ、よく耳をほじくって聞きたまえ――庭番も、コッホも、ペストリャコフも、もう一人の庭番も、第一の庭番の女房も、庭番小屋にいた女も、ちょうどその時辻馬車からおりて女と腕を組みながら門の下へはいって来た七等官のクリュコフも――誰も彼も、つまり八人ないし十人の証人が口をそろえて証言してるんだ。ミコライがミトレイを地べたへ押しつけて、その上へのしかかってぶんなぐってると、こっちもやつの髪を引っつかんで、同じように相手をなぐりつけていたそうだ。二人は道幅いっぱいにころがって、往来の邪魔をしているので、四方八方から二人をどなりつけるんだが、二人はまるで、『小さな子供みたいに』――これは証人のことばそのままだよ――上になり下になりして、きゃっきゃっわめいたりなぐり合ったり、われ劣らじと大声に笑ったりして、滑稽きわまる面つきをしてるじゃないか。そして、子供みたいに互いに追っかけっこをしながら、通りへ駆け出して行ったんだよ。いいかい？　そこで一つしっかり考えてみたまえ――四階の上にはまだ温もりの残った死体がころがってるんだぜ。発見された時には、まだ暖か味があったんだ！　もし彼らが、あるいはミコライ一人が、殺人犯をおかして、しかもその際トランクをこわして強盗を働いたとか、あるいは何かで強盗の幇助をしたとすれば、一つ、たった一つだけ君に質問さしてもらいたい――いったいぜんたい今いった心理状態が、つまりきゃっきゃっわめいたり、大声で笑ったり、門の下で子供らしいつかみ合いをするというようなことが、斧だの、血だの、凶暴無比な悪知恵だの、ああした細心の注意だの、強奪などというものと、はたして一致するものかどうか？　たったいま人を殺したばかりで、せいぜい五分か十分しかたたないのに――だってそういうことになるだろう、まだ死体が暖かいんだからね――急に死体もおっぽり出したうえ、部屋をあけっ放しにしといて、今そちらへ向けて人がぞろぞろ通って行ったのを承知しながら、獲物をほうり出したまま、道のまんなかで子供のようにころげ回ったり、げらげら笑ったり、みんなの注意をひいたりする。しかも、それには陳述の一致した証人が十人もいるんだから

ね！」
「もちろん、変だ。むろん不可能な話だ、がしかし……」
「いや、しかしじゃないよ。もし同じ日の同じ時刻にミコライの手にはいった耳輪が、実際かれにとって不利な、重大な物的証拠になるとすれば――もっともその証拠は、彼の陳述によっても釈明がつくんだから、したがってまだ争う余地のある証拠だが――もしそうとすれば、一方の弁護的事実をも、考慮に入れるべきじゃないか。ましてそれは拒み難い事実なんだからね。ところで、君はどう思う。わが国の法律学の性質上、そうした事実を――単に心理的不可能性とか、精神状態とかに基礎をおいている事実を――拒み難い事実として受け入れるだろうか？　よしんばいかなるものであろうとも、有罪を肯定するいっさいの物的証拠をくつがえしてしまうような事実として、受け入れてくれるだろうか、いや、受け入れるだけの雅量を持ってるだろうか？　なんの、受け入れるものか、こんりんざい受け入れやしない。箱は見つかったし、当人は縊死しようとしたんだもの、『自分に悪事をした覚えがなけりゃ、そんなことをするはずがない！』というわけさ。つまり、これが僕を熱くならせる重大問題なんだ！　少しはわかってくれよ！」
「うん、そりゃ君が熱くなってるのは、ちゃんとわかってるよ。だが待てよ、僕はきくのを忘れてたが、耳輪のはいった箱がほんとうに婆さんのトランクから出たものだってことは、なんで証明されたんだね？」
「それは証明されてるさ」とラズーミヒンは眉をひそめて、何やら進まぬ調子で答えた。「コッホがその代物に見覚えがあって、質入主を教えたのさ。すると、その男が確かに自分のだと、きっぱり証明したんだ」
「そりゃまずいな。じゃ、もう一つ――コッホとペストリャコフが上って行った時に、誰かミコライを見たものはなかったのか。その点を何かで証明できないのかい？」
「そこなんだよ、君、誰も見たものがないんだ」とラズーミヒンはいまいましそうに答えた。「そいつが全く困るんだ。コッホとペストリャコフですら、上へのぼって行くとき、二人に気がつかなかったんだからね。もっとも、彼らの証言は、この場合大した意義を持ち得ないんだがね。『あの住まいのあいているのは見ました、たしかその中で仕事をしていたのでしょう。が、通り過ぎる時、別に注意しなかったので、職人が中にいたかどうか、覚えがありません』とこう言うんだ」
「ふむ！……してみると、弁解の方法といっては、ただお互いになぐり合って、きゃっきゃっ笑っていたということだけだね。まあ、仮りにそれが有力な証拠だとしよう。しかし……じゃまたきくがね――君自身はこの事実全体をどう説明する？　耳輪を拾ったのをなんと説明するね？　全く彼が陳述どおり拾ったものとして」
「どう説明するって？　何も説明するがものはないじゃないか――わかりきった話だ！　少なくとも、事件を進捗さすべき経路は明瞭で、ちゃんと証明されてるよ。つまり、箱がそれを証明したのさ。ほかでもない、真犯人がその耳輪を落として行ったのだ。犯人は、コッホと

ペストリャコフがドアをたたいていた時には、四階のあの住まいにいて、栓をさして息をこらしてたんだ。ところが、コッホがあほうな真似をして下へおりて行ったので、そのとき犯人はいきなり飛び出して、同じく下へ駆けおりたんだ。だって、ほかに逃げ道がないものね。それからやつは階段の途中で、コッホとペストリャコフと庭番の目をさけて、空いたアパートに隠れたんだ。それはちょうど、ミトレイとミコライが駆け出して行った時なのさ。そこで犯人は、三人が上へ行ってしまう間、ドアの陰に立っていてさ、足音の消えるのを待って、悠々と下へおりて行った。それはちょうどミトレイとミコライが通りへ駆け出したあとで、居合せた人は散ってしまって門の下には誰もいなかった時なんだ。もっとも、見た人はあったかもしれないが、かくべつ気にもとめなかったろう。人が通るのは珍しいことじゃないんだからね。箱は、そいつがドアのかげに立っているうちにポケットから落としたんだが、落としたのは気がつかなかったんだ。それどころじゃないんだからな。つまりその箱こそ、犯人がそこに立ってたことを、明白に証明してるじゃないか。そこが手品の種なのさ！」

「うまい！　いや、君、実にうまい。だが、それはあまりうま過ぎるね！」

「どうして、え、どうしてだい？」

「だってさ、何もかもあんまり平仄（ひょうそく）が合い過ぎる……あんまりしっくり過ぎる……まるで芝居のようじゃないか」

「ちょっ、君は！」とラズーミヒンは一声叫んだが、ちょうどこの時ドアが開いて、そこに居合わせたものが誰一人知らない、新顔の男がはいって来た。

五

それはもうさして若くない、鼻もちのならないほど澄まし返った紳士で、用心深い気むずかしそうな顔をしていた。彼はまず隠し切れない不快な驚きを示しながら、あたりを見回して『これはいったいなんという所へ飛び込んだものだ？』と目顔できくような表情をしながら、戸口のところに立ち止まった。彼は本当にならないような一種の驚き、というより憤慨の色をわざわざ見せつけながら、天井の低い狭苦しいラスコーリニコフの『船室』をじろじろ見回した。それから同じ驚きの表情で、着物もろくすっぽ身につけず、髪をおどろに振り乱し、顔も洗わないで、みすぼらしいよごれた長椅子の上に横になったまま、やはりじっと彼を見回している当のラスコーリニコフに目を移し、そのままひたと見つめていた。それから、座を立とうともせず、同じくうさん臭そうな人を食った態度で、まともに彼の目を見すえているラズーミヒンの、ひげも剃ってなければ、髪もとかしてないぼうぼう姿を、ゆっくりじろじろながめ始めた。緊張した沈黙が一分ばかり続いたが、やがて当然予期された通り、場面に小さな変化が生じた。あれやこれやの徴候によって、（もっとも、それはかなりはっきりした徴候だったが）、くだんの紳士はこの『船室』の中では、誇張したいかめしい態度をとったところで、なんの効果もないと気がついたのだろう、いくらか気色を柔らげて、多少しかつめらしい調子がないでもなかったが、いんぎんにゾシーモフの方へ向いて、一言一言はっきり区切りながら問いかけた。

「大学生の、いや、もと大学生だったロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ氏は、こちらでしょうか？」

ゾシーモフはやおら身を動かした。そして、おそらくその返事をしたはずだったろうに、まるで問いかけられもしないラズーミヒンが、やにわに先を越してしまった。

「そらあすこに、長椅子の上に寝ていますよ！　いったいあなた何用です？」

このなれなれしげな『あなた何用です？』が、気取り紳士の出鼻をくじいた。彼は危くラズーミヒンの方へふり向こうとしたが、どうやらうまく自制して、また大急ぎでゾシーモフの方へ向き直った。

「あれがラスコーリニコフです！」ゾシーモフは病人の方を顎でしゃくって、口の中でむしゃむしゃと言った。そして、やたらに大きく口をあけてあくびをすると、やたらに長くそのまま口をあけていた、それからのろのろとチョッキのポケットへ手を伸して、胴のふくらんだ恐ろしく大きな両蓋の金時計を引っ張り出し、蓋をあけてちょっと見ると、また同じく大儀そうにのろのろと、もとの所へしまい込んだ。

当のラスコーリニコフは、しじゅう黙って仰向きにねたまま、いっさいなんという考えもなく、はいって来た紳士をじっと見つめていた。今しも壁紙の興味津々たる花模様からふり向けられた彼の顔は、すごいほど真っ青

で、たったいま苦しい手術を受け終わったか、それとも拷問から放されて来たばかりとでもいったような、なみなみならぬ苦痛の色を現わしていた。けれども、はいって来た紳士はしだいに彼の注意を喚起して、それがやがて疑惑となり、不信となり、遂には危惧の念とさえなった。ゾシーモフが彼を指さして、『あれがラスコーリニコフです』と言った時、彼はやにわにおどり上がらんばかりの勢いですばやく身を起こし、ベッドの上にすわった。そして、まるでいどみかかるような、とはいえきれぎれな、弱々しい声でこう言った。

「そうです！　僕がラスコーリニコフ！　何ご用です？」

客は注意深く目を据えて、おしつけるような調子で言った。

「わたしはピョートル・ペトローヴィッチ・ルージンです。わたしの名前はあなたにとって、まんざら初耳ではないと信じますが」

けれども、全然べつの事を期待していたラスコーリニコフは、鈍いもの思わしげな目つきで、じっと相手を見つめるのみで、そんな姓名は全く初耳だというように、なんの答えもしなかった。

「え！　いったいあなたはまだ今日が日まで、なんの知らせもお受け取りにならなかったのですかね？」いささかむっとした体で、ルージンは尋ねた。

ラスコーリニコフは、その返事がわりに悠々と枕の上に身を横たえ、両手を頭の下にかって、じっと天井をながめにかかった。ルージンの顔には、悩ましげな色が現われてきた。ゾシーモフとラズーミヒンは一そう好奇心をそそられたらしく、彼の様子を見回し始めた。とうとう彼はてれてしまった。

「わたしは当てにしていたのです、そのつもりでおったのです」と彼は口の中でもぐもぐ言い出した。「もう十日あまりも前に、いや、かれこれ二週間も前に出した手紙だから……」

「ねえ、あなた、どうもそんなに、戸口に突っ立ってばかりもいられますまい？」とふいにラズーミヒンがさえぎった。「もし何かお話があるんなら、お掛けになったらいいじゃありませんか。そこはナスターシャと二人じゃ狭いでしょうに。ナスターシュシュカ、ちょっとわきへ寄って、通り道をあけてあげるんだ！　どうぞこちらへ、さあ、これが椅子です。ここまで！　ずっと割り込んでください！」

彼は自分の椅子をテーブルから少し片寄せて、テーブルと自分の膝との間にわずかな余地を作り、やや緊張した姿勢で、客がこの隙間へ『割り込む』のを待っていた。あまりうまい瞬間をねらってつかまえられたので、客はどうしても断わり切れなくなり、急いだりつまずいたりしながら、その狭い隙間をすりぬけた。そして、やっと椅子にたどり着くと、それに腰をおろして、うさん臭そうにラズーミヒンを見やった。

「ですが、何も当惑なさることはありません」とラズーミヒンはいきなりまっこうから言ってのけた。

「ロージャはもう五日も病気で寝ていましてね、三日ば

かりうわ言ばかり言ってたんです。しかし、今ではやっと正気に返って、食欲も出てきましてね、喜んで食事をしたくらいです。ここにいるのはドクトルで、今ちょうど診察してくれたばかりなんです。僕はロージャの友人で、やはり前の大学生、今はこの通り先生のお守りをしてるわけです。だから、どうぞわれわれには御斟酌なく、かまわずお続けください。いったいなんのご用です」

「いや、ありがとう。しかし、わたしがここにすわって話をしたんじゃ、ご病人にさわりゃしますまいかね？」とルージンはゾシーモフの方へふり向いた。

「い、いや」とゾシーモフは口の中でもぐもぐ言った。

「かえって気晴らしになるかもしれませんよ」こう言ってからまたあくびをした。

「なに、先生はもうずっと正気でいるんですよ、朝っから！」とラズーミヒンは続けた。この男のなれなれしさには、偽りならぬ純朴さが見えたので、ルージンはちょっと考えて、だんだん元気づいてきた。それはこの厚かましいぼろ書生が、自分でいち早く大学生と名乗ったことも、一部の原因だったかもしれない。

「あなたのお母さまは……」とルージンは切り出した。

「ふむ！」ラズーミヒンは大きな声でこうやった。

ルージンはけげんそうにその顔を見た。

「いや、なんでもありません。僕はただちょっと。どうかお続けください……」

ルージンはひょいと肩をすくめた。

「……あなたのお母さんは、わたしがあちらでご一緒にいた間に、あなた宛の手紙を書きかけておられたのです。で、わたしはこっちへ着いてからも、わざと四、五日訪問を遅らしたのです。万事あなたのお耳へはいったのが十分まちがいなしという時に、お伺いしようと思ったものですからね。ところが、いま伺えば、意外にも……」

「知ってます、知ってます！」ふいにラスコーリニコフはなんとも言えないじりじりした、いまいましそうな表情で口を切った。「じゃ、あなたがそうなんですか？花婿なんですね？　知ってます！……だからもうたくさん！……」

ルージンはすっかり腹を立てたらしかったが、押し黙っていた。彼はこれらいっさいの事が何を意味するのか、少しも早く思い合わそうと一生懸命にあせった。一分ばかり沈黙が続いた。

その間にラスコーリニコフは、返事をする時、ちょっと彼の方へ体を向けたままでいたが、急にまた目を凝らして、何かしら特殊な好奇の色を浮かべながら、じっと相手の観察にかかった。それは先ほどよく見定める暇がなかったか、それとも何かはっとするような新しいものを発見したのか、その点は明瞭でなかったけれど、とにかく彼はそのためにわざわざ枕から身を起こしさえした。実際ルージンの風采には全体として、どことなく一風変わったところが目についた。それはつまり、たったいま無遠慮に与えられた『花婿』という名称を裏書するような、一種のあるものだった。第一、ルージンが首都におけるこの数日を懸命に利用して、花嫁を待つ間にお

洒落(しゃれ)をし、男振りを上げようとあせったのは、見えすいているというより、むしろ目だち過ぎるくらいだった。もっとも、こんなのはきわめて罪のない話で許されうべきことである。それどころか、自分は前より美しくなったという、その快い変化を思うあまりにうぬぼれ過ぎた自意識すら、こうした場合には許さるべきものかもしれない。何しろルージンは、目下許婿(いいなずけ)という身分なのである。彼の服装はすべていま仕立屋から届いたばかりで、何から何まで立派なものずくめだった。ただしいていえば、何もかもあまりに新し過ぎて、あまりに一定の目的を暴露し過ぎている、まあ、それくらいなものだろう。ハイカラなま新しい丸形帽子も、その目的を証明していた。ルージンはそれをさもうやうやしげに扱って、さも大事そうに両手で捧げていた。本物のジュネーブできらしい、見事なライラック色の手袋まで、それをはめようとせず、ただ飾りのために手に持っている。ただその事一つだけでも、やはり同じ目的を証明しているのであった。ルージンの服装には明るい、若ごのみな色が勝っていた。彼が身につけていたのは、薄茶色の気取った夏の背広と、薄色の軽快なズボンと共色のチョッキと、買いたての細地のシャツと、ばら色の条(すじ)のはいったごく軽い上麻のネクタイである。しかし何よりなことには、これらがすべてルージンに似合うのだった。彼の顔はまだいたって水々しく、美しいといってもいいくらいで、そのままにしておいても、四十五という年よりははるかに若く見えた。まっ黒な頬ひげが、カツレツを二つ並べたように、両側からこころよく顔をくまどって、きれいに剃(そ)り上げたなめらかな顎のあたりで、一段と美しく深い影をつけていた。ほんの心持白いものの交った髪の毛も、理髪師の手ですき上げられ、カールまでしてあったけれど、それがためになんとなく間がぬけて滑稽(こっけい)に見えるようなことはなかった。というのは、普通カールをした髪というものは、いやでもおうでも、結婚式に臨むドイツ人めいた類似を、その顔に与えるものだからである。もしこの美しい立派な容貌の中に、何か不愉快な反感をそそるものがあるとすれば、それはたしかに別な原因によるものだった。ラスコーリニコフはルージン氏を無遠慮に観察し終わると、毒々しい冷笑を浮かべて、またもや枕の上に身を横たえ、前のように天井をにらみ始めた。けれどルージン氏はじっと我慢した。そして、すべてこうした奇怪な態度も、ある時期までは気にとめまいと覚悟をきめたらしい。

「あなたがこうした状態でいられるのを、深く深く残念に思います」彼は努めて沈黙を破ろうとしながら、改めて口を切った。「ご病気と知っていたら、もっと早く伺うところでした。しかし、どうも多忙なもんで……それに、弁護事務の方も、大審院にきわめて重大な事件をかかえているものですから。その上、ご賢察の取り込みについては、あらためて、申し上げるまでもありません。ご家族の方、といって、つまりご母堂とご令妹のおいでを、今か今かとお待ちしているわけで……」

ラスコーリニコフはやや身を動かして、何か言いだそ

うとした、その顔はなんとなく興奮の色を現わした。ルージンはことばを休めて待っていたが、一向なにも出そうにないので、また先を続けた。
「……今か今かとね。で、まずさし向きの用意として、宿所を捜しておきました……」
「どこに？」と弱々しい声でラスコーリニコフは尋ねた。
「ここからごく近くです。バカレーエフの持家なんで……」
「ああそれはヴォズネセンスキイ通りだ」とラズーミヒンがさえぎった。「貸間専門の二階建で、ユーシンという商人が経営してるのさ。ちょくちょく行ったことがあるよ」
「さよう、貸間ですよ……」
「とてもひどい所さ――きたなくって、臭くって、それに怪しげな家なんだ。ときどき変な騒ぎが持ち上がるよ。およそどんな連中だって、あそこに巣を食っていないやつはないぜ！……僕も一度ある騒動で引っ張り出されたことがある。もっとも、安いにゃ安いよ」
「わたしは、自分からして土地不案内なものですから、それほど詳しい事情を調べ上げるわけにはいきませんでしたが」とルージンは尻くすぐったそうに言い返した。
「しかし、ごくごくきれいな部屋を二間とっときましたよ。何しろほんの短期間ですからね……わたしはもう本当の、つまりわれわれの今後の住まいも、ちゃんと見つけておいたんですよ」と彼はラスコーリニコフの方へふり向いた。
「で、今その方を修繕中なんで。わたしもその間、貸間できゅうくつな目をしているわけなんです。ここからほんの一足、リッペヴェフゼル夫人の家でしてな、わたしの若い友人アンドレイ・セミョーヌイチ・レベジャートニコフの住まいに同居しているのです。バカレーエフの家もこの男が教えてくれたので……」
「レベジャートニコフ？」何やら思い出したらしく、ラスコーリニコフはゆっくりと言った。
「さよう、アンドレイ・セミョーヌイチ・レベジャートニコフ、ある省に勤めている、ご存じですか？」
「ええ……いや……」とラスコーリニコフは答えた。「これは失礼、わたしはあなたが問い返された口ぶりで、そんな気がしたものですから。わたしはいつかその男の後見をやったことがありましてな……きわめて愛すべき青年です……いつも新しい思想に留意してる男で……いったいわたしは若い人に接するのが好きなんですよ――若い人からは、新しい思想がどんなものか、知ることができますからね」
ルージンはある希望を抱きながら、一座の人々をひとわたり見渡した。
「それはどういう意味です！」とラズーミヒンが尋ねた。
「もっともまじめな意味です。いわば、事の本質そのものといったところです」とルージンは、質問されたのがさもうれしそうに、すぐこう受けた。「わたしなどは、なんですよ、ペテルブルグへはもう十年も来なかったです。いろいろな新しい傾向とか、改革とか、新思想とか、

すべてそうしたものは、田舎住まいの我々には触れないことはないが、それを確実に見るためには、いっさいを残りなく見ようとするには、やっぱりペテルブルグにいなければいけません。まあ、わたしの意見はこうです――いろいろと多くの事を認識するのには、何よりもわが新しき世代を観察するのが一番ですて。で、わたしは実のところ、大いにうれしかったです……」

「何がです？」

「あなたの質問はあまり範囲が広すぎますね。あるいは、わたしの考えが違っているかもしれませんが、若い人にはより明晰な見解、つまり、なんと言いますか、より多くの批判精神があるように思えるのです。より多くの実際的精神……」

「それは本当ですよ」とゾシーモフが歯と歯の間から押し出すように言った。

「でたらめだ。実際的精神なんかありゃしないよ」とラズーミヒンが割り込んだ。「実際的精神なんてものは、そうやすやすと得られやしないよ。天から降って来やしまいしさ。われわれロシヤ人はいっさいの活動から遠ざかって、仕事を忘れてしまってから、もうかれこれ二百年もたつんだからね……もっとも、思想は醗酵しているかもしれません」と彼はルージンの方へふり向いた。「それから、子供らしいものではあるけれど、善に対する願望もあります。また山師に類した連中がうようよぞろぞろ出ては来たけれど、それでもまだ潔白な精神さえも見出すことができましょう。しかし、実際的精神は依然としてありません！　実際的精神はざらにその辺にころがっちゃいない」

「あなたのご意見にはどうも同意しかねますなあ」といかにもうれしそうな様子で、ルージンは弁駁した。「もちろん、一時の気紛れから出た軽薄な熱中もあれば、間違ったこともあります。しかし、多少は大目に見てやらなくちゃいかんです。夢中になるということは、つまり仕事に対する熱意と、仕事を取巻いている外的状況の不正を証明するものです。もしまだいくらも仕事ができていないとすれば、それはつまり時間も少なかったというわけです。方法に関しては今なにも申しますまい。わたし一個の見解に従えば、すでに多少の成果が上げられている、とこういうことさえできるくらいです。まず新しい有益な思想が普及しています。以前の空想的な、ロマンチックなものの代わりに、いろいろ新しい有益な著述が普及されています。文学はより成熟した陰影を帯びてきましたし、多くの有害な偏見が除かれ、完全に嘲笑されてしまいました……一言にして尽せば、われわれは完全に過去と絶縁してしまったのですな。このことは、わたしに言わせると、すでに一つの事業ですて……」

「ばかの一つ覚えだ！　自己推賛をやってやがる」とふいにラスコーリニコフが言った。

「なんですと？」とルージンは、よく聞こえなかったので問い返したが、返事はなかった。

「お説ごもっともですな」とゾシーモフが急いで口をはさんだ。

「そうでしょう？」いい気持そうにゾシーモフに視線を投げながら、ルージンはことばを続けた。「あなたもご同意のことと思いますが」今度はラズーミヒンの方を向いてそう言ったが、もう多少勝ち誇ったような優越の色を見せて、あぶなく『え、お若いの』とでも言いそうだった。「現代は長足の進歩、今のことばでいうと、プログレスを遂げておりますよ。少なくとも、科学や、経済上の真理の名においても……」

「月並みですよ！」

「いや、月並みじゃありません！　たとえば、今日まで『隣人を愛せよ』と言われておりましたが、もしわたしがやたらに他人を愛したとすれば、その結果はどうなったでしょう？」とルージンはことばを続けた。あるいは、少々せきこみ過ぎたかもしれない。「その結果は、わたしが上着を二つに裂いて隣人に分けてやる、そして二人とも裸になってしまうのです。つまりロシアのことわざでいう『二兎を逐うものは一兎をも得ず』というあれですな。ところが科学はこういいます――まず第一におのれ一人のみを愛せよ、なんとなれば、この世のいっさいは個人的利益に基づけばなり。おのれ一人のみを愛すれば、おのが業務をも適宜に処理するを得、かつ上着も無事なるを得ん、とこうです。しかも経済上の真理は更にこう付言しています――この世の中というものは整頓した個人的事業、すなわち無事な上着が多ければ多いほど、ますます強固な社会的基礎が築かれ、同時に一般の福祉もますます完備されるわけだとね。かようなわけで、ただただ自分一個のために利益を獲得しながら、それによって万人のためにも獲得してやることになる。そして、隣人だってちぎれた上着よりは、多少ましなものを得ることができるようにと、心掛けております。しかも、それはもはや単なる個人的慈善のためじゃなくて、社会全般の進歩によるのですからな。この思想はきわめて単純なものですが、不幸にも、感激性と空想癖におおわれて、あまりにも長くわれわれを訪れなかったのです。これを語るには大して機智もいらなさそうなものですが……」

「失礼ですが、僕もやはり機智に富んだ方じゃないから」とことば鋭くラズーミヒンはさえぎった。「もう打ち止めにしようじゃありませんか。実のところ僕は目的があって口を切ったんだが、そんなひとりよがりの、いつ終わるともしれぬはてしのない陳腐なおしゃべりは、もう三年の間に、いやになるほど聞き飽きちゃった。自分で口にするのは愚か、自分のいる所で人が言い出すのですら、全く顔が赤くなるくらいだ。あなたはむろん一刻も早く、自分の知識をひけらかしたかったんでしょう。それは大いに酌量すべきことで、僕も別にとがめ立てしません。ただ僕は今あなたがどんな人か、ちょっと知りたかっただけなんですよ。なぜといってね、おわかりでしょう。近ごろは一般の福祉なるものに、いろいろ様々な事業家がからみついて、手を触れるものをなんでもかでも、利得のためにゆがめ傷つけたので、まるで何もかも打ち壊しになってしまったから。だが、もうたくさんだ！」

「あなた！」なみなみならぬ威厳を見せて、ぐっとそり返りながら、ルージンは言いかけた。「あなたがそう無遠慮な口のきき方をされるとすれば、わたしも……」
「いや、とんでもない、とんでもない……僕にそんな失礼なことができますか！……が、とにかくもうたくさんです！」とラズーミヒンは断ち切るように言って、さっきの話を続けるために、くるりとゾシーモフの方へ向いてしまった。
　ルージンはこの釈明を信じるだけの聡明さを持っていた。もっとも、彼はもう二分もたったら、帰ろうと決心したので。
「さて、今日の初対面のお近づきが」と彼はラスコーリニコフに話しかけた。「ご全快の後は、ご存じの通りの関係ですから、ますます深くなるように期待しております……特にご自愛を祈ります……」
　ラスコーリニコフは頭もふり向けなかった。ルージンは椅子から腰を持ち上げにかかった。
「確かに質を置きに行ったやつが殺したんだよ！」と断定的な調子でゾシーモフが言った。
「確かに質を置きに行ったやつだ！」とラズーミヒンもあいづちを打った。「ポルフィーリイは自分の考えを漏らさないが、それでも入質人を尋問してるよ……」
「入質人を尋問してる？」とラスコーリニコフは大きな声で尋ねた。
「ああ、それがどうしたんだい？」
「いや、なんでもない」
「先生どこからそんな者を見つけ出すんだろう？」とゾシーモフはきいた。
「コッホが教えたのもあれば、質物の上包みに名を書いてあったのもあるし、話を聞きつけて自分からやって来たものもある……」
「いや、どうも巧妙な慣れきった悪党に違いないね！　なんて大胆な！　なんて思い切ったやり口だ！」
「ところがどっこい、そうでもないんだ！」とラズーミヒンはさえぎった。「つまり、そこがみんなをまごつかすんだよ。僕に言わせると――巧妙でもない、慣れてもいない。あれは確かに初めての仕事だ！　考えぬいた予定の行動、巧妙な悪党という想像をすると、つじつまが合わない。ところが、不慣れなやつとして見れば、単なる偶然がやつを災厄から救い出した、とこう平仄が合ってくる。偶然てやつは、何をしでかすかわかりゃしないよ！　考えてもみたまえ、やつは邪魔がはいるなんてことは、てんで予想もしていなかったらしいじゃないか！　しかも、そのやり口はどうだ！　わずか十ルーブリか二十ルーブリくらいの品を取り出して、それをポケットへねじ込んでさ、女物のはいった長持の中でぼろっきれを引っかき回しただけなんだ。ところが箪笥の上の引出しには、手箱の中にしまった金が、証券類をのけて現金ばかりでも、千五百ルーブリから出てきたんだからね！　だから、盗むすべも知らないで、ただ殺すことだけはうまく仕おおせたのさ！　初めての仕事だよ、君、初めての、まるで動顛しちゃったんだもの！　予定の行

動じゃなくて、偶然のお蔭でうまく逃げたんだよ！」
「それは、どうやらこのごろやかましい、官吏未亡人の老婆殺しの話らしいですな」とルージンはゾシーモフの方へ向きながら口をはさんだ。もう帽子と手袋を手にして立っていたが、帰る前に少しばかり気のきいたことを言いたかったのである。
　見かけたところ、彼は有利な印象を与えようと腐心して、見栄ぼうの本性が分別を圧倒したらしい。
「そう。お聞きになりましたか？」
「そりゃもう、ほとんど隣のことですから……」
「詳しいことをご承知ですか？」
「そうまでは申しかねますが、しかしこの事件については別な事情が、つまり一つの大きな問題が、わたしの興味をそそるんですよ。最近五年間に、下層社会に犯罪が増加したことや、またいたるところにひんぴんとして起こる強盗や放火については、今さらいうまでもないとして、何より奇怪千万なのは、上流社会でも同様に、いわば平行的に、犯罪が増加して行くことです。どこそこでは大学生あがりが大道で郵便物を掠奪したという噂があるかと思えば、またどこそこでは社会的地位からいっても第一線に立っている人々が贋造紙幣を作っている。かと思えばモスクワでは、最近発行の割増つき債券を贋造する連中の一団が検挙されたが――その首謀者の中には、万国史の講師が一人いたとか。それからまた海外駐在の書記官が、何か金のことらしいけれど、謎のような原因のために暗殺されています……で、もし今この金貸しの老婆殺しの犯人が、より高級な社会から出ていると したら（なぜなら、百姓は金属品など質に入れませんからね）、社会の文化的階級のかかる腐敗堕落をなんと説明したらいいでしょう？」
「経済上の変化が激烈ですからね……」とゾシーモフは応じた。
「どう説明したらですって？」ラズーミヒンがからみついてきた。「つまり、病い膏肓に入った非実際性のため、と言えば説明がつくでしょうね」
「というと、つまり？」
「ほかでもない、モスクワで万国史の講師が言ったことですよ。なぜ債券贋造をしたかという尋問に対して、『みんないろいろの方法で金持になっているから、わたしも手っとり早く金持になりたかったのです』と答えた。正確なことばは覚えていないが、要はたしか、骨を折らないで手っとり早く濡れ手で粟の儲けがしたいというんです！　みんな据え膳目当ての生活をしたり、人のふんどしで相撲を取ったり、噛んでもらったものを食うといったようなことに慣れてしまったんですね。ところで、いま偉大なる時が訪れたので、一人一人がその正体を暴露してしまった……」
「しかし、なんといっても、道徳というものがあるでしょう？　その、なんというか、戒律が……」
「いったいあなたは何を気をもんでるんです？」と思いがけなくラスコーリニコフが割ってはいった。「あなたの理論通りになってるじゃありませんか！」

「どうしてわたしの理論通りに？」
「あなたがさっき主張したことを、極端まで押しつめると、人を斬り殺してもいい、ということになりますよ……」
「とんでもない！」とルージンは叫んだ。
「いや、それはそうじゃない！」とゾシーモフが応じた。
ラスコーリニコフは上唇をぴくぴく震わせながら、まっさおな顔をして横になったまま、苦しそうに息をついていた。
「物にはすべて程度というものがあります」とルージンは尊大な調子でことばを続けた。「経済上の思想は、まだ殺人の勧誘にはなりませんよ。だから、もし仮りに……」
「それから、あれはほんとうですか、君が」ふいにまたラスコーリニコフは、憤怒に震える声でさえぎった。その声には一種侮辱の喜びとでもいうものが響いていた。
「君が婚約の花嫁に向かって……しかも彼女が君に承諾の返事をしたその時に……あれが貧乏人なのが……何よりもうれしいと言ったのは、ほんとうですか……貧乏人の娘を細君にもらうのは得だ。結婚後細君に権威をふるうのに好都合だから……自分の恩を鼻にかけて、じりじり締めつけるのに都合がいいからって、そうですか？……」
「もし！」ルージンはかっとなって、少なからずまごつき気味ながら、毒のあるいらいらした声で叫んだ。「あなたが……そうまで意味を曲解するなんて！　失礼ながら、こちらも言わせてもらいましょう。あなたのお耳へはいった――いや、あるいは吹き込まれたといった方がいいかもしれない――その噂は、毫も確実な根拠を持っちゃおりません……で、わたしは……誰の仕業か……一口に言えば……この毒矢は一口に言えばご母堂が……それでなくてもあの方は――もっとも、実に立派なご気質を備えてはいらっしゃるが、考え方に多少うわついた、ロマンチックな陰影を持っておられる……ような気がしておったです……しかし、それにしてもあの方が、そんな空想で歪曲された形でもってこのことを解釈したり、考えたりしておられようとは、重々意外千万でしたよ……しかも、その上……その上……」
「よく聞きたまえ！」枕の上に身を持ち上げ、刺すようにぎらぎら光る目でじっと相手をにらみつけながら、ラスコーリニコフはこう叫んだ。「よく聞きたまえ！」
「なんです？」
ルージンはことばを止めて、腹立たしいいどむような顔つきで、じっと待っていた。幾秒かの間、沈黙が続いた。
「ほかでもない、もし君がもう一度……たった一口でも……母をあしざまに言ったら……僕は君を階段から突き落とすぞ！」
「君どうしたんだ！」とラズーミヒンは叫んだ。
「ははあ、そうなのか！」とルージンは青くなって唇を噛んだ。「実はね、君」と彼は一生懸命に腹の虫を抑えながら、ゆっくり間を置いて言い出したが、それでも息

ははずませていた。「わたしはもう先刻から、一歩踏み込んだ瞬間から、君がわたしに敵意を持っておられることは察していました。しかし、もっとよく知っておきたいと思って、わざとここに残っておったのです。病人ではあり、親戚ではあるしするから、たいていのことは我慢する気だったが、もう今は……断じて……」

「僕は病気じゃない！」とラスコーリニコフは叫んだ。

「ではなおさら！」

「とっとと出て行け！」

けれどルージンは言うべきことも言い終わらないで、またテーブルと椅子の狭い間をすり抜けながら、もう自分の方から出かけていた。ラズーミヒンも、今度は彼を通してやるために席を立った。ルージンは誰にも目をくれず、もうだいぶ前から、病人にかまわないでくれと、かぶりを振って合図をしているゾシーモフにも、会釈のしるしにうなずこうともしないで、用心ぶかく肩の辺まで帽子を持ち上げながら出て行った。戸口を出る時には、ちょっと背をかがめさえした。その背のかがめ具合にまで、恐ろしい凌辱を背負っている、とでもいうような感じが現われていた。

「あんな法ってあるかい、あんな法って？」ラズーミヒンは頭を振りながら度胆を抜かれたように言った。

「うっちゃっといてくれ、みんな僕をかまわないでくれ！」とラスコーリニコフは、前後を忘れたようにどなった。「全く、いつになったらうっちゃってくれるんだい？　まるで拷問役人だ！　僕は君らなんか恐れやしない！　もう今は誰一人、誰一人こわくない！　僕のそばを離れてくれ！　僕は一人でいたいんだ、一人で、一人で！」

「行こうじゃないか！」ラズーミヒンに顎をしゃくって見せながら、ゾシーモフは言った。

「とんでもない、これを一人うっちゃっといていいものかね」

「行こうってば！」とゾシーモフはがんこにくり返して、さっさと出てしまった。

ラズーミヒンはちょっと考えたが、すぐあとを追って駆け出した。

「病人の言うことを聞かなかったら、どんなことになったか知れやしない」もう階段まで出てから、ゾシーモフはこう言った。「いらいらさしちゃいけないんだ……」

「あの男いったいどうしたんだろう？」

「何かちょっとした、いい具合の衝動がありさえすればいいんだがなあ！　さっきなんか、あんなに元気だったんだもの……ねえ、君、あの男なんだか心に屈託があるんだよ！　何かしらじっと凝って動かない重苦しいようなものが……僕はこいつを非常に恐れてるんだ！　きっとそうに違いない！」

「ねえ、ひょっとしたらあの紳士、ほら、ルージン氏のためじゃなかろうか！　話の模様で見ると、先生あの男の妹と結婚するんだよ。そのことについて、ロージャは病気の直前に手紙を受け取っているらしい……」

「そう。折の悪い時に来やがったもんだよ。全く、あの

やっこさんが何もかも打ち壊してしまったのかもしれないな。ところで、君は気がついたかい――ラスコーリニコフはほかの事にはいっさい無頓着で、何を言っても黙っているが、ただ一つ興奮して夢中になることがある。それは例の殺人事件だ……」

「そうだ、そうだ！」とラズーミヒンはあいづちを打った。「気がついたとも！　ばかに興味を持って、びくびくしているんだ。あれは病気の起こった当日、警察署長のところで初めて聞いてびっくりしたからさ。卒倒までしたんだからね」

「君、その話は晩にもっとくわしく聞かしてくれないか。その上で僕も話すことがあるから。この病人は実に興味があるよ！　三十分もしたらまた寄ってみる……ただし、炎症などは起こるまいがね」

「ありがとう！　じゃ、僕はその間パーシェンカのとこで待っていながら、時々ナスターシャにのぞかせて、視察するとしよう……」

ラスコーリニコフは一人きりになると、じれったそうな悩ましげな目つきでナスターシャを見やった。こちらはまだ出て行くのをためらっていた。

「もうお茶ほしくない？」と彼女は尋ねた。

「あとで！　おれは眠いんだ！　うっちゃっといてくれ……」

彼はけいれん的な身ぶりで壁の方へくるりと向いてしまった。ナスターシャは出て行った。

六

けれど、彼女が出て行くが早いか、彼は起き上がってドアに鉤をかけた。そして、先ほどラズーミヒンが持って来て、さらに包み直した服の包みを解いて、着がえを始めた。不思議なことに、彼はすっかり平静になったような気がした。さっきの気ちがいじみたうわ言もなければ、このごろじゅうのようにいても立ってもいられぬほどの恐怖もなかった。それは一種不可思議な思いがけない平静の、最初の瞬間だった。彼の動作は正確明晰で、その中には固い意図がのぞいていた。『今日だ、いよいよ今日だ！……』と彼はつぶやいた。もっとも、まだ衰弱しているとは、自分でも知っていた。しかし平静の域にまで、固定観念の域にまで達した強い心の緊張が、彼に力と自信を与えた。まさか往来で倒れるようなことはあるまいと、それを彼は心だのみにしていた。すっかり新しいものに着替えてから、テーブルの上にのっている金を見て、ちょっと考えたのち、それをポケットへ入れた。金は二十五ルーブリあった。それから、ラズーミヒンが衣類代に払って来た十ルーブリの釣銭、幾つかの五カペイカ玉もつかんだ。やがて、そっと鉤をはずして部屋を出ると階段をおり、あけ放してある台所をのぞいてみた――ナスターシャは彼の方へ尻を向けて、かがみ込みながら、おかみのサモワールをふうふう吹いている。彼女はなんにも聞きつけなかった。それに誰にもせよ、

彼が出て行こうなどと、どうして想像ができよう！　一分の後には、彼はすでに往来へ出ていた。

それは八時ごろで、日は沈みかかっていた。依然たるむし暑さだったが、彼はこの悪ぐさい埃（ほこり）だらけな都会に毒された空気をむさぼるように吸い込んだ。彼は微（かす）かにめまいを覚えた。ふいに何かしら野性的なエネルギーが、その燃えるような両眼とやせ衰えた青黄色い顔に輝き出した。彼はどこへ行くのか、それさえ知らなかった。また考えようともしなかった。彼の頭にはたった一つのことしかなかった。ほかでもない、『こんな事は今日すっかり一ぺんに、これからすぐ片づけてしまわなければならぬ。さもなくば家へは帰るまい。こんな風で生きていくのは厭（いや）だ』だが、どんな風に片づけるのだ？　何をして片づけるのだ？　彼はそれについてなんの考えも持っていず、また考えようともしなかった。彼は一つの想念を追いのけていた。その想念が彼を責めさいなむのであった。彼はただいっさいのことが、どんな風にもあれ、とにかく転換してしまわねばならぬということだけを、感じもし悟ってもいた。『たといどんな変わりようだってかまうもんか』と彼は自暴自棄的な、凝り固まった自信と決心をもって、そうくり返した。

古くからの習慣でいつもの散歩の道筋をたどり、彼はまっすぐに乾草広場（センナヤ）へ方向をとった。広場の少し手前にある一軒の小店の前の車道で、髪の黒い若い手回し風琴（ふうきん）がやが立って、何やらひどく感傷的な小唄（ロマンス）を鳴らしていた。それは、前の人道に立っている十五ばかりの少女の歌につける伴奏であった。少女はお嬢さま然と大きく張ったペチコートをはき、婦人外套（マンチリヤ）を着て、手には手袋をはめ、火のような色をした羽飾りつきの麦わら帽子をかぶっていたが、それらはみな古ぼけて、くたびれ切っていた。彼女は大道芸人特有のかん高い、とはいえかなり感じのいい力のある声で、小店のなかから二カペイカ投げてくれるのを待ちながら、小唄（ロマンス）をうたっていた。ラスコーリニコフは、二、三人の聞き手と並んで立ち止まり、しばらく耳を傾けたのち、五カペイカ玉を取り出して少女の手に握らせた。こちらは急に一ばん調子の高いかんじんなところで、断ち切るように歌をやめて、風琴回しに大きな声でずかりと言った。『もうたくさん！』そして、二人はのろのろと次の店へ移って行った。

「君は大道芸人の歌が好きですか？」とラスコーリニコフは、一緒に並んで手回し風琴のそばに立っている浮浪人風の、あまり若くもない男をつかまえて、だしぬけに話しかけた。こちらはきょとんとした目つきで彼を見つめながら、びっくりしたような顔をした。「僕は好きですよ」とラスコーリニコフは続けたが、それはまるで大道芸人の事を話してるのではないような調子だった。「僕はね、寒くて暗い湿っぽい秋の晩――それはどうしても湿っぽい晩でなくちゃいけない――通行人の顔がみんな青白く病的に見えるような時、手回し風琴に合わして歌っているのが大好きですよ。でなければ、いっそぼた雪が風もなくまっすぐに降っている時でもいい、わかるでしょう？　雪を通してガス灯が光ってる……」

「わかりませんな……ごめん……」質問も質問だが、ラスコーリニコフの奇妙な風体にぎょっとした男は、口の中でもぐもぐ言うと、往来の向こう側へ行ってしまった。
ラスコーリニコフはまっすぐに歩いて行って、あの時リザヴェータと話していた町人夫婦がいつも屋台店を出している、乾草広場（センナヤ）の例の一隅へ出た。が、今度は夫婦ものはいなかった。その場所を見分けると、彼は立ち止まりあたりを見回した。そして、粉倉の入り口でぽかんとしている赤シャツの若者に声をかけた。
「ここの隅で、町人風の夫婦づれが商売してるだろう、え？」
「みな商売してまさあ」若者は高慢ちきな様子でラスコーリニコフをじろじろ見回しながら、こう答えた。
「その男の名はなんというのだろう？」
「洗礼を受けた通りの名でさあ」
「君はザライスクの人間じゃないかね？　いったい何県から来たい？」
若者はもう一度ラスコーリニコフを見つめた。
「わっしらの方は、お前さま、県じゃなくって区といいます。兄貴は方々旅をしましたがね、わっしゃ家にばかりいたもんで、なんにも存じませんよ……まあ、お前さま、もうこれくらいでかんべんしていただきたいもんで」
「あれはめし屋かね、二階の方のは？」
「ありゃ飲み屋ですよ。玉突きもあります。それに姫ごぜ達もいますぜ……にぎやかなもんでさあ！」
ラスコーリニコフは広場を横切って行った。向こうのとある片隅に、黒山のような人だかりがしている。百姓ばかりである。彼は人々の顔をのぞき込みながら、一番こみ合っているまんなかへ割り込んだ。彼はなぜかしら、誰とでも話がしたくてたまらなかった。が、百姓たちは彼などには目もくれず、幾つかの小さいかたまりにわかれながら、てんでに何かしらがやがや言っていた。彼はしばらく立っていたが、ちょっと考えてから、右へ方角をとり、歩道づたいにV通へ足を向けた。広場を通りぬけると、ある横町へはいり込んだ。
彼は前にも、広場からサドーヴァヤ通へ通ずる鉤の手になったこの短い横町を、よく通ったものである。ことに最近は、いやでたまらなくなった時など、『もっと厭な気持になりやがれ』といったような反抗心から、わざわざこの付近をぶらついたくらいである。しかし今はなんにも考えないではいって行った。そこには、建物全体が酒場その他の飲食店で塞（ふさ）がっている、一軒の大きな家があった。それらの店からは、帽子もかぶらず着物を一枚ひっかけたきりで、『ちょっと近所を』往来するような身なりをした女どもが、ひっきりなしに駆け出していた。女たちは歩道の上に二、三か所、ことに地下室へおりる口の所に、群をなして集まっていた。そこから二段ばかりおりると、いろいろ面白い所へ行かれるのだった。そういった場所の一つから、この時がたがたいう音と騒々しい人声が往来いっぱいに流れ出して、ギターが響き、歌が聞こえて、恐ろしくにぎやかだった。入り口には女が黒山のようにたかっている。あるものは階段に腰をか

け、あるものは歩道にすわり、またあるものは立ったまましゃべっている。そのかたわらの車道では、酔っぱらった一人の兵隊が何やら大声に罵(ののし)りながら、巻煙草をくわえてふらふらしていた。見たところ、どこかへはいろうと思いながら、それがどこだったか忘れたような風である。一人のぼろ男が、もう一人のぼろ男と何やら罵り合っていると、その傍では死人のように酔いつぶれた男が、往来のまんなかにごろごろしている。ラスコーリニコフは、女たちの大勢あつまっている傍に立ち止まった。みんな嗄(しゃが)れ声でしゃべっていた。誰も彼もサラサの服に、山羊皮(ヤンピー)の靴をはき、帽子なしの素頭だった。中には四十を越したのもいたが、また十七くらいのもい、みんなほとんど目の縁に打身をこしらえていた。

彼はなぜか下の方の歌声や、がたがたいう物音や、騒々しい人声に心をひかれた……そこからは、くずれるような笑い声と叫びの合い間に、細い裏声の恐ろしくいなせな歌と、ギターに合わせて誰かが踵(かかと)で拍子をとりながら、やけに踊っているのが聞こえた。彼は入り口にかがんで、もの珍らしげに歩道から玄関をのぞき込みながら、陰鬱(いんうつ)な物思わしげな表情で、じっとそれに聞き入った。

『そさまはわたしの大事な殿ご

『あだにわたしを打たんすな！――

こういう歌い手の細い声が流れてきた。ラスコーリニコフは、まるでいっさいがそれにかかっているかのように、いま歌っていることが聞きたくなった。

『はいってみようかな？』と彼は考えた。『笑ってやがる！　酔ってるんだ。ええっ、一つへべれけになるまで飲んでやろうか？』

「ちょいと寄ってらっしゃらなくって、かわいい旦那(だんな)？」と女の一人がかなり響きのいい、まだそんなに嗄れていない声で言った。

それはまだ若くて、いやらしくない女だった――群れの中の一人である。

「よう、べっぴんだね！」彼はわずかに身を起こして、女を見ながらそう言った。

女はにっこりした、彼のお世辞がひどく気に入ったので。

「ご自分だってずいぶんいい男だわ」と女は言った。

「まあ、やせてらっしゃること！」もう一人がバスで言った。

「病院からでも出なすったばかりかしら！」

「ちょっと見は将軍様の令嬢だが、鼻が皆ぺちゃんこだあ！」そばへやって来た百姓が、ふいに一杯機嫌で横槍(よこやり)を入れた。粗ラシャの外套(がいとう)をあけっぴろげにして、醜い顔にずるそうな笑いを浮かべている。

「なんと面白そうだなあ！」

「おはいりよ、来たくらいなら！」

「はいるよ！　さあ、うめえぞ」

こう言って、男はころがるように下へおりた。

ラスコーリニコフは先へ歩き出した。
「ちょいと、旦那？」と娘がうしろから声をかけた。
「なんだい？」
女はちょっとてれた。
「ねえ、かわいい旦那、わたしあんたとなら、いつでも喜んで一緒に遊ぶわ。だけど、今はなんだか気がさして駄目なの。ねえ、いい男、一杯飲むんだから、六カペイカばかしちょうだいな？」
ラスコーリニコフは手に当たるだけつかみ出した。五カペイカ玉が三つだった。
「あら、まあ、なんて気前のいい旦那でしょう！」
「お前なんていうんだい？」
「ドゥクリーダとたずねてちょうだい」
「だめよ、まあなんてえこったろう」と、ふいに群れの中の一人の女が、ドゥクリーダに向かって頭を振りながら口を出した。「そんな風にねだったりしてさ、なんてったらいいかわかりゃしないわ！　わたしなんか恥かしくて、穴へでもはいりたいぐらいだわ……」
ラスコーリニコフは、しゃべっている女を珍らしそうにながめた。それは三十がらみのあばた面の女で、打ち身だらけになっており、上唇を少しはらしていた。女は落ち着いたまじめな口調で、さかんに非難するのだった。『なんだっけかなあ』とラスコーリニコフはまた歩き出しながら考えた。『あれはなんで読んだのだったかなあ。一人の死刑を宣告された男が、処刑される一時間前にこんなことを言うか、考えるかしたって話だ――もし自分がどこか高い山のてっぺんの岩の上で、やっと二本の足を置くに足るだけの狭い場所に生きるような羽目になったら、どうだろう？　まわりは底知れぬ深淵、大洋、永久の闇、そして永久の孤独と永久の嵐、この方尺の地に百年も千年も、永劫立っていなければならぬとしても、今すぐ死ぬよりは、こうして生きている方がましだ。ただ生きたい、生きたい、生きていきたい！　どんな生き方にしろ、ただ生きてさえいられればいい！……この感想はなんという真実だろう！　ああ、全く真実の声だ！　人間は卑劣漢にできている！……またそう言った男を卑劣漢よばわりするやつも、やっぱり卑劣漢なのだ』一分ばかりたってから、彼は更にこうつけ加えた。
彼は次の通りへ出た。『やっ！　これは「水晶宮」だ！　さっきラズーミヒンが「水晶宮」の話をしていたっけ！　だが、ええと、おれはなんのつもりだったのかな？　そうだ、新聞を読むことだ！……ゾシーモフが新聞で読んだと言ったんだ……』
「新聞あるかい？」かなり広々とした、小ざっぱりした酒場にはいりながら、彼は尋ねた。部屋はいくつかあったが、あまり客はなかった。二、三人の客が茶を飲んでいて、そのほか遠く離れた一間に、四人ばかりの一団が陣どって、シャンペンを飲んでいた。ラスコーリニコフの目には、その中にザミョートフがいるように思われた。もっとも、遠いのでよくは見分けられなかったが。
『なに、かまうもんか！』と彼は考えた。
「ウォートカを差し上げますか？」と給仕が尋ねた。

「いや、お茶をもらおう。それから、新聞を持って来てくれ、古いのを。そうだな、五日ばかり前からそろえて。君には祝儀をあげるからね」
「かしこまりました。これが今日の分でございます。それから、ウォートカを召しあがりますか？」
古い新聞とお茶が来た。ラスコーリニコフは、すわり具合のいいように腰を落ち着けて、捜しにかかった。『イーズレル――イーズレル――アツテーキ――アツテーキ――イーズレル――バルトーラ――マッシーモ――アツテーキ――イーズレル――……ちょっ、畜生！　あっ、ここに雑報がある――女が階段から落っこちた――町人が一人酔っぱらって死んだ――ペスキイの火事――ペテルブルグ区の火事――も一つペテルブルグ区の火事――またぞろペテルブルグ区の火事――イーズレル――イーズレル――マッシーモ――あっ、これだ……』
彼はついに捜し当てて読みにかかった。活字は目の中でおどったが、それでも彼は『報道』をすっかり読み終わると、むさぼるように次の号をめくり、新しい追加記事を捜し始めた。頁をくって行く彼の手はけいれんするようなもどかしさに震えた。ふいに誰やら彼の傍へ来て、テーブルの向こうに腰をかけた。ふと見ると、――ザミョートフだった。ポマードをつけた黒い巻き毛に分け目をくっきりと見せ、ハイカラなチョッキに、いくらかすれたフロックをまとい、あまり真っ白でないシャツを着込み、金鎖をたらして、金指輪をいくつもはめた、いつもに変わらぬザミョートフである。彼は愉快そうだった。少なくとも、大いに愉快らしく、人のよさそうな微笑をたたえていた。その浅黒い顔は、一杯やったシャンペンのために、ほんのりと赤くなっている。「えっ！　あなたはこんなところへ？」彼はさも百年の知己といった調子で、けげんそうに口を切った。「つい昨日ラズーミヒンが、あなたは引続き正気でないって話してたのに。どうも変ですね！　僕もあなたのとこへ行ったんですよ……」
ラスコーリニコフは、彼がそばへ来るのを覚悟していた。彼は新聞をわきへ押しやって、ザミョートフの方へふり向いた。彼の唇には冷笑が浮かんだ。その冷笑の中には何かしら新しい、いらだたしげな焦燥がのぞくのであった。
「知ってますよ、おいでになったことは」と彼は答えた。「聞きましたよ。靴下を捜してくれたそうですね……ときに、ラズーミヒンは君に夢中ですよ。君はあの男と一緒に、ラヴィーザ・イヴァーノヴナの所へ行ったそうですね。ほら、あの時君が気をもんで、火薬中尉に目くばせしても、先生いっこう気がつかなかった、覚えてるでしょう――あの女のところへ？　こりゃもうわからないはずはないんだがなあ――はっきりした話だのに……え？」
「どうもあの男も暴れんぼだな！」
「火薬がですか？」
「いや、君の友人ですよ、ラズーミヒンですよ……」
「君の生活は結構なもんですね、ザミョートフさん。あ

あいう愉快この上ない所へ木戸御免なんて！　いま君にシャンペンをご馳走したのは、ありゃ誰です？」
「あれはみんなで……飲んだんですよ……で、まあ、ご馳走したんですな！」
「報酬ってやつですな！　なんでも利用しますね！」とラスコーリニコフはからからと笑い出した。
「いや、なんでもないさ、わが愛すべき少年よ、なんでもないさ！」ザミョートフの肩をぽんとたたいて、彼は言い足した。「僕は何も当てつけて言ってるんじゃない。『つまり仲がいいもんだから、面白半分に』言ってるんですよ。これは、ほら、例のペンキ屋の職人が、ミトレイをなぐった時に言った事ですよ。例の老婆殺しの件で」
「君はどうして知ってるんです？」
「そりゃ僕だって、君より詳しいかもしれませんよ」
「君はなんだかちと変ですね……きっとまだよっぽど悪いんですぜ。外出なんかしたのは乱暴でしたね……」
「君の目には僕がへんに見えますか？」
「見えますね。ときに、君それはなんです、新聞を読んでるんですか？」
「新聞です」
「やたらに火事のことが出ていますね」
「いや、僕が読んだのは、火事のことなんかじゃありませんよ」こう言って、彼は謎めいた表情でザミョートフを見やった。嘲るような薄笑いがまたもや彼の唇をゆがませた。「いや、火事のことじゃありません」と、意味ありげにまばたきしながら、彼はくり返した。「さあ、白状したまえ、わが愛すべき青年、君は僕がなんの記事を読んだか、それが知りたくてたまらないんでしょう」
「ちっとも知りたかない、ただ、ちょっときいてみただけですよ。いったいきいちゃいけないんですか？　なんだって君はのべつ……」
「ねえ、君は立派な教養のある、文学的な人ですね、え？」
「僕は中学を六年までやったきりです」ある威厳を見せながら、ザミョートフは答えた。
「六年まで！　いや、君は実にかわいい小雀さんだ！髪をきちんと分けて、指輪なんかいっぱいはめて――金持は違ったものだ！　へっ、なんと愛すべき少年なるかなだ！」
　こう言ってラスコーリニコフは、神経的な笑いをザミョートフの顔へまともに浴びせかけた。ザミョートフは思わず一足たじたじと後ろへしさった。これは腹を立てたというよりも、すっかり面くらった形である。
「ちょっ、なんという変な人だ！」とザミョートフはまじめにくり返した。「どうやら君はまだ熱に浮かされているようですね」
「熱に浮かされてる？　ばかを言っちゃいけない、小雀君！……じゃ、僕は変ですかね？　ふむ、それで僕は君にとって興味があるでしょう、え？　興味があるでしょう？」
「ありますね」
「というのは、つまり僕が新聞で何を読んだか、何を捜

したかってことでしょう？　だって、こんなに古い分をしこたま持って来させたんだからね？　うさん臭いでしょう、え？」
「まあ、言ってごらんください」
「喉から手が出るというやつですね？」
「何がいったい喉から手なんです？」
「何が喉だか、あとで言いますよ。ところで今はね、わが愛すべき好青年、こう声明しよう……いや、いっそ『白状しよう』だ……いや、これもぴったりしない。『陳述するから、お書きとりください』――そう、これだ！　そこで陳述すると、僕が読み、興味を持ち、捜し……かつ詮索したのは……」ラスコーリニコフは目を細めて、ちょっと待った。「詮索して――そのためにわざわざここへ寄ったのは――官吏未亡人の老婆殺しの件ですよ」自分の顔を思い切りザミョートフの顔に近よせて、彼はついにほとんどささやくようにそう言った。
　ザミョートフも、自分の顔を相手の顔から引こうとしないで、身動きもせずに、ひたと彼を見た。あとでザミョートフが何より不思議に感じたのは、このときちょうどまる一分間、二人のあいだに沈黙が続いて、ちょうどまる一分間、たがいににらみ合っていたことである。
「ちょっ、それがどうしたんです、その記事を読んだのが？」ふいに彼はけげんと焦燥の念にかられて叫んだ。
「いったいそれが僕になんの関係があるんです！　それがどうしたというんです？」
「ほらあの例の婆さんですよ」とラスコーリニコフは、ザミョートフの叫び声に身動きもせず、同じくささやくようにことばを続けた。「覚えてるでしょう、あの時警察で話が出て、僕が卒倒した、あの婆さんですよ。どうです、もうわかったでしょう？」
「いったいなんのことです？　何が……『わかったでしょう』です？」とザミョートフはほとんど不安そうな様子で言った。
　ラスコーリニコフのじっと据わって動かぬまじめな顔つきは、一瞬の間にがらりと変わってしまった。突如彼は、まるで自分で自分を制する力がないように、またもや先ほどと同じ神経的な哄笑を爆発させた。その瞬間、斧を手にしてドアの陰に立っていたあの数日前の一刹那が、恐ろしいほどはっきりした実感として記憶によみがえった。栓ががたがたおどって、表では二人の男が罵ったり、ドアを押したりしている。と、ふいに彼は二人をどなりつけて、悪態を浴びせかけ、舌をぺろりと出して彼らを嘲笑したあげく、ありったけの声で笑って、笑って、笑いぬいてやりたくなったあの刹那！
「君は気がちがったのか、それとも……」とザミョートフは言いかけて――ことばを止めた。とつぜん心にひらめいた想念に打たれたかのように。
「それとも？　何が『それとも』です？　さあ、なんです？　さあ、言ってごらんなさい！」
「なんでもありません！」ザミョートフはむっとして答えた。
「みんなくだらない事です！」

二人とも黙ってしまった。思いがけない発作的な笑いの爆発が終わると、ラスコーリニコフはまた急にもとの物思わしげな沈んだ様子になった。彼はテーブルに肘づきし、手に頭をのせた。ザミョートフの事などきれいに忘れてしまったような風だった。沈黙はかなり長く続いた。

「なぜお茶を飲まないんです？　さめてしまうじゃありませんか」とザミョートフが言った。

「え？　なに？　お茶……それもそうだな……」

ラスコーリニコフは、コップの茶を一口がぶりと飲んで、パンを一切れ口へ入れた。それから、ザミョートフの顔をちょっと見ると、ふいにいっさいを思い出したらしく、おもわずぴくりと身震いするような格好をした。彼の顔はその瞬間、はじめと同じ嘲笑的な表情を浮かべた。彼は茶を飲み続けた。

「近ごろは実にあぁした凶行がふえてきましたね」とザミョートフは言った。「ついこの間も、『モスクワ報知』で読みましたが、大規模の紙幣贋造団が検挙されましたね。まるで一会社くらいの人数だったそうです。紙幣を贋造してたんですよ」

「ああ、それはもうずっと前の事でしょう！　僕一月も前に読みましたよ」とラスコーリニコフは落ち着いて答えた。「じゃ、あなたにいわせれば、あんなのが悪党なんですかね？」と彼は薄笑いしながら言い足した。

「悪党でなくってどうします？」

「あれが？　あれは子供ですよ、青二才ですよ、悪党なんかじゃありません！　あんな仕事をするのに五十人からの人間が寄り合うなんて！　そんなのってありますか。三人でも多いくらいだ。それも、お互い同士を自分以上に信用してる場合に限りますよ！　さもなければ、中の一人が酔っぱらってうっかりしゃべったら、それでもう万事がらがらといってしまうんですからね！　青二才ですよ！　札を銀行で両替させるのに、あてにもならない男を雇うなんて――これほどの仕事を、行き当たりばったりの人間に任せるって法がありますか？　まあ、仮りに青二才連中でもうまくいったとしましょう。そして、てんでに百万ルーブリずつも両替したとする、ね、ところで、それからあとはどうなるんです？　一生涯のあいだ？　それこそ一人一人が一生涯、お互い同士制肘を受けるわけじゃありませんか！　それなら、いっそ首をくくった方がましなくらいだ！　しかも、やつらは両替することもできなかったんですからね。銀行へ行って両替を頼み、五千ルーブリの金を受け取ると、手がぶるぶる震え出した。四千ルーブリまでは数えたけれど、五千ルーブリ目は数えもしないで受け取って、そのままポケットへねじ込むと、あたふた逃げ出してしまった。そこで、嫌疑を招くことになり、たった一人のばか者のお蔭で、万事がらがらといってしまった！　え、いったいこんな話ってあるもんですか？」

「手が震えたのがなんです？」とザミョートフは引きとった。「なに、それはありがちの事ですよ。いや、僕は全然ありうると信じますね。どうかすると、持ちこたえ

られませんよ」
「それしきのことが？」
「そりゃ君なら、あるいは持ちこたえられるかもしれませんね？　いや、僕だったら持ちこたえられない！　百ルーブリやそこいらの礼金で、そんな恐ろしいことをするなんて！　贋造紙幣を持って――しかも所もあろうに――それで苦労をしぬいて銀行へ行くなんて――いや、僕なんかてれてしまいますよ、君は平気ですか？」
　ラスコーリニコフは急にまた、『舌をぺろりと出して』やりたくなった。悪寒（おかん）がときどき瞬間的に彼の背筋を走って流れた。
「僕ならそんなやり方はしませんね」と彼は遠まわしに始めた。「僕ならこんな風に両替しますよ。まず最初の千ルーブリは、一枚一枚にあらためながら、あっちからもこっちからも四度くらい数えて、それから次の千ルーブリにかかる。数え始めて、半分どころまでくると、どれか五十ルーブリ紙幣を一枚抜き出して、明りに透かしながら引っくりかえしてみて、もう一度――にせじゃないかと明りにすかしてみる。そして『僕は気になるんですよ。このあいだも親戚の女が、この手で二十五ルーブリしてやられましたのでね』てなことを言って、そこでさっそくその一部始終を物語るんです。それから三千ルーブリ目の勘定にかかったとき、『いや失礼、僕さっき二千ルーブリ目を勘定するとき、七百ルーブリの所を数えそこなったようだ、どうもそんな気がする』といって、三千ルーブリ目の勘定をやめ、もう一度二千ルーブリ目の勘定にかかる――まあ、こんな風にして、五千ルーブリみんな数えてしまうんですよ。そしてぜんぶ数え終わると、また五束目と二束目から一枚ずつ抜き出して、また明りに透かしながら、またいかにも気がかりらしい顔をして、『どうかこれを取り換えてくださいませんか』――こんな調子で銀行員がへとへとになって、悲鳴を上げるまでやるんです。もうどうしたら僕をやっかいばらいができるか、途方にくれてしまうまでね！　で、やっと片づけて出て行く段になって、戸をあけると――『いや、いけない、ちょっと失礼』と、もう一度ひっ返すんです。そして何か問いを持ちかけて説明を求める――とまあ、僕ならこんな風にやりますね？」
「へえ、君はなんて恐ろしいことを言う人でしょう！」とザミョートフは笑いながら言った。「しかし、それは口先ばかりで、実行となったら、きっとつまずきますよ。そんな場合には、僕に言わせれば、君や僕ばかりでなく、どんな海千山千の向こう見ずでも、自分で自分がどうなるか、けっして保証できるもんじゃありませんよ。何も回りくどい話をするまでもない、現にこういう例があります。僕らの管内で老婆が一人殺されましたが、あれこそ白昼あんな冒険をやってのけて、ほんの奇跡で助かったというだけの不敵きわまる凶漢らしいが、それでもやっぱり手が震えたんですよ。その証拠には、盗む方の仕事はまるでできなかったんですからね。持ちこたえられなかったんですな。仕事のやり口で見え透いてますよ……」

ラスコーリニコフはむっとしたような表情になった。
「見え透いてる？　じゃ一つつかまえてごらんなさい、今すぐ」と彼は意地わるい喜びの声で、ザミョートフを扇動するように叫んだ。
「そりゃもうつかまえますとも」
「誰が？　君が？　君につかまりますか？　くたびれもうけですよ！　君がたの、一ばん奥の手は、金づかいが荒いかどうか、くらいのもんでしょう？　今まで一文なしでいたやつが、急に金をつかい出すと――それこそ犯人だとくる。そんなことじゃ、子供でもその気にさえなれば、君がたをだますのはわけありませんぜ」
「ところがね、やつらはみんなそれをやるんですよ」とザミョートフは答えた。「殺す方は狡猾にやっつけて、命を的の冒険をしながら、その後ではもうすぐに、居酒屋へとび込んで引っかかってしまう。つまり、金づかいで皆やられるんですよ。みながみな君のように、狡猾なのばかりじゃありませんからね。君なら、もちろん、居酒屋なんかへ行かないでしょうね？」
　ラスコーリニコフは眉をひそめて、じっとザミョートフを見つめた。
「君はどうやら味をしめて、その場合に僕がどう立ち回るか、知りたくてたまらないようですね？」と彼は不満げな調子で尋ねた。
「知りたいもんですね」こちらはきっぱりと、まじめに答えた。彼はなんとなくあまりまじめすぎるくらいに口をきき、まじめすぎるくらいの顔つきになった。
「非常に？」
「非常に！」
「よろしい。僕ならこんな風に立ち回りますね」またもや自分の顔を、やにわにザミョートフの顔へ近づけて、じっと穴のあくほど相手を見つめながら、ラスコーリニコフはささやくような声で言い出した。今度はザミョートフも思わずぴくりと身震いした。「僕ならこんな風にしますね。まず金と品物を取って、そこを出たら、すぐその足でどこへも寄らずに、どこか淋しい塀ばかりで、人っ子一人いないような場所――野菜畑か何か、そいった風なところへ行く。そこにはもう前からちゃんと何かの石を見つけておくんです。目方一プード（約十五キログラム）か一プード半もあるやつで、どこか隅っこの塀の傍にでもころがっている、建築用の残りとでもいった石をね。その石を起こすと――下にはくぼみがあるに違いない――そのくぼみへ金も品物も、何もかも入れてしまう。入れてしまってから、もとの通りに石をのっけて、足で踏んづけておき、悠々とそこを立ち去るのです。こうして、一年か二年、あるいは三年くらいも、手をつけないでおくんですよ――さあ、これで一つ捜してごらんなさい！　これで捜し当てたらえらいもんだ！」
「君は気ちがいです」ザミョートフもなぜか同様ささやくように言った。そして、なぜか急にラスコーリニコフから身を引いた。
　こちらは目をぎらぎら光らせた。顔色が恐ろしいほど青くなって、上唇がぴくりとしたと思うとそのままひく

ひくおどり出した。彼はできるだけ近くザミョートフの方へかがみこんで、少しも声を出さずに唇を動かし始めた。それは三十秒ばかり続いた。彼は自分のしている事を意識しながら自制ができなかった。ちょうどあの時のドアの栓のように、恐ろしい一言が彼の唇でおどって、今にも飛び出しそうだった。ただもう一息、それを口から出しさえすれば！　ただもう音に発しさえしたら！

「ねえどうです、もし僕があの婆さんとリザヴェータを殺したのだったら？」と彼はだしぬけに口を切って――はっとわれに返った。

ザミョートフはけうとい目つきで彼の顔を見ると、布きれにまがうばかり真っ青になった。その顔は微笑でゆがんだ。

「いったいそんな事があっていいもんか？」彼はやっと聞こえるくらいの声でこう言った。

ラスコーリニコフは毒々しい目つきで、じろりと彼を見やった。

「白状なさい、君ならそれを信じたでしょう？……」とついに彼は冷やかな嘲(あざけ)るような調子で言った。「そうでしょう？　ね、そうでしょう？」

「まるっきり違います！　今という今こそ、今までよりもっと信じませんよ！」とザミョートフはあわてて叫んだ。

「とうとう引っかかった！　小雀君を捕まえたぞ。してみると『今までよりもっと信じない』と言われる以上、以前は信じてたんでしょう？」

「ええ、けっしてそんな事はないというのに！」とザミョートフはいかにも狼狽(ろうばい)したらしく言った。「じゃ君はつまりここへ引っ張って来るために、僕をおどかしたんですね？」

「それじゃ信じないんですね？　では、あの時僕が警察を出たあとで、君らはなんの話を始めたんです。なぜ火薬中尉は、卒倒した後まで僕を尋問したんです？　おい、君！」と彼は立ち上がりながら、帽子をつかんで給仕を呼んだ。「勘定はいくらだい？」

「みんなで三十カペイカいただきます」と給仕は駆けよりながら答えた。

「さあ、二十カペイカは君にチップだ。どうだ、大した金じゃありませんか！」と彼は札(さつ)を持った震える手をザミョートフの前へ差し伸べた。「赤札青札で二十ルーブリ、どこから出てきたと思います？　この新しい服はどこから出てきたんでしょう？　だって君は、僕が一文なしだったのを知ってるでしょう！　もう恐らくかみさんを尋問したでしょう……いや、もうたくさん！　こんな事はたくさん(ファッセー・コーセー)だ！　さようなら、またそのうち……」

彼は一種野性的な、ヒステリイじみた、しかもたまらないほどの快感を交えた感触に、全身震えおののきつつ外へ出た。――けれども陰鬱(いんうつ)な、恐ろしく疲れはてたような表情をしていた。彼の顔は、何かの発作のあとみたいにゆがんでいた。疲労感がみるみるうちに大きくなっていった。気力は妙に興奮して、ちょっとした衝動、ち

ょっとしたいら立たしい感情に会っても、すぐ波のように高まったが、その感情の弱まるにつれ、またすぐ弱まっていくのである。

ザミョートフは一人になると、同じ所に腰かけたまま、長い間もの思いに沈んでいた。ラスコーリニコフは突如として、例の件に関する彼の考えをすっかり顛倒させ、いよいよ意見を固めさせたのである。

『イリヤー・ペトローヴィッチは、まぬけだ！』と彼はきっぱり決めてしまった。

ラスコーリニコフが表のドアをあけると、外からはいって来るラズーミヒンに、思いがけなく入り口の階段でぶっつかった。二人はつい一足手前まで互いに気がつかなかったので、ほとんど危く鉢合せするところだった。しばらくの間、二人は互いに相手をじろじろ見回していた。ラズーミヒンは、非常な驚きに打たれた様子であったが、ふいに憤怒の色が――それこそもうほんとうの憤怒の色が、すさまじく彼の目に燃えはじめた。

「貴様はこんなところへ来ていたのか！」と、彼はのども裂けよと叫んだ。「寝床から抜け出しやがって？　僕は長椅子の下まで捜したぞ！　屋根裏まで捜しに行ったぞ！　君のお蔭で、ナスターシャまで引っぱたかないばかりだったぞ……それだのに、ご当人はこんな所へ来てやがる！　ロージャ！　いったいこれはどうしたわけだ、すっかりありのままを話せ！　白状しろ、おい！」

「そのわけはほかでもない、君たちがうるさくてやり切れなくなったから、一人きりになりたかったのさ」とラスコーリニコフは落ち着き払って答えた。

「一人きりで？　歩くこともできないくせに、まだ布のような青い面をして、息を切らせているくせに。ばか！　いったい君は『水晶宮』なんかで何をしていたんだ？　白状しなきゃ承知しないぞ！」

「放せ！」ラスコーリニコフは言って、そのまま通り抜けようとした。

これでいよいよラズーミヒンは我を忘れてしまった。彼はぐっと相手の肩をつかんだ。

「放せだ？　『放せ』なんてよくも言えたな！　僕が君をこれからどうしようと思ってるか、わかるか？　羽がいじめにして、ふん縛ってよ、小脇にかかえて連れて帰るんだ、錠をおろして閉じ込めてやるんだ！」

「なあ、ラズーミヒン！」とラスコーリニコフは静かに、落ち着き払って言い出した。「僕が君の親切をいやがってるのが、君はいったいわからないのかね？　せっかくの親切に唾をひっかけるような人間に親切ぶりを見せるなんて、ずいぶん物好きな話じゃないか？　しかも、相手は苦しい思いをしながら、それを我慢してるんだぜ！……どうして君は病気の初めに僕を捜し出したんだい？　僕は事によったら、大いに死ぬのを喜んでたかもしれないんだよ？　君は僕を苦しめてる、僕は君が……うるさいんだと、今日もずいぶん言ったはずだが、あれでもまだ足りないのかい？　実際、人を苦しめるなんて！　いいもの好きじゃないか！　全くのところ、こうしたいろいろの事が、ひどく僕の回復を邪魔してるんだよ。だ

って、ひっきりなしに僕をいらいらさせるからさ。見たまえ、ゾシーモフだって、僕をいらいらさせないために、さっき帰って行ったじゃないか！　後生だから、君も僕をかまわないでくれ！　君はいったいどんな権利があって、僕を力づくで止めたりなんかするのだ？　君はわからないのかい――完全に正気で言ってるんだぜ。君一つ教えてくれ――いったいなんといって頼んだら、どういう風に哀願したら、君は僕につきまとったり、親切を尽くしたりするのを、よしてくれるんだろう？　僕は恩知らずだってかまわない、卑劣漢だってかまわない。ただ後生だから、僕にかまわないでくれ！　かまわないでくれ！　かまわないでくれ！」彼は初めのうちこそ、これから吐き出そうとしている癇癪に、前から喜びを感じながら、落ち着き払って言い出したが、結局、先ほどルージンに対した時と同様激昂してしまい、息を切らせながらことばを結んだ。

　ラズーミヒンは突っ立ったまま、しばらく考えていたが、やがて彼の手を放した。

「じゃ、勝手にどこなとうせやがれ！」と彼は低い声で、ほとんどもの思わしげに言った。「待て」ラスコーリニコフがその場を動こうとしたとき、彼はだしぬけにこうどなった。「まあ、僕の言うことを聞け。僕は宣言するが、君たちは一人のこらず、やくざなおしゃべりか、ほら吹きばかりだ！　君たちはほんのちょっと苦しい事ができると、まるでめんどりが卵をかかえ込んだように、そいつを背負い回るんだ！　しかも、そんな時にまで、他人の作品を剽窃するんだからな。じっさい君たちには、独立した生活なんてものは、これっから先もないんだ！

　君たちはまるで鯨油でできた人間だ。血の代わりにチーズを絞った残りの汁が流れてるんだ！　僕は君たちの仲間を一人も信用しやしない！　君たちの第一の仕事は、どんな場合でも、どうかして人間らしくなるまいという苦心なんだ！　おうい、待て！」ラスコーリニコフがまたもや逃げ出しそうに動くのを見て、彼は前に倍した憤怒のていで叫んだ。「しまいまで聞けといったら！

　君も知ってるだろう、僕のところではきょう引っ越し祝いに人が集まるんだ。もうそろそろ来てるかもしれない。それに伯父をおいてきぼりにしてるんだ――さっき駆けつけてくれたのさ――お客の接待に。そこで、もし君が馬鹿でないなら、俗物の阿呆でないなら、箸にも棒にもかからない大たわけでないなら、外国種の翻訳でないならばだ……いや実はね、白状するが、君は愛すべき聡明な男だ。が、それでも馬鹿なんだよ――そこでだ、もし君が馬鹿でないなら、むだに靴をはきつぶすより、僕のところへ来て、一晩いっしょに過ごしたらどうだい。もういったん外へ出たのなら、まあ仕方がないさ！　僕は一つ君にすてきな、柔かい安楽椅子を持って来てやろう、家主の所にあるんだ……まあ、茶話会だな……それがいやなら、ちゃんと円榻に寝かしてやるよ――とにかく、われわれの間に寝てなきゃいけない……ゾシーモフも来るよ。承知かい、え？」

「いやだ！」

「嘘をつけえーえ！」ラズーミヒンはじれったそうにわめいた。「どうして貴様にそれがわかるもんか？　自分で自分の行為に責任の持てない男じゃないか！　それに、君にゃこの間の消息はわからないんだ……僕は千べんもこんな風に人と喧嘩わかれをしたが、いつもすぐ仲直りをしたもんだ……きまりが悪くなってきて、また相手のところへのこのこ帰って行くんだ！　じゃ、覚えておいてくれ、ポチンコフの家の三階だよ……」

「そんな風だと、なんですね、ラズーミヒン氏、おそらくあなたは親切を尽くしたいという満足感のために、他人に自分を打つことさえ許しておやりになるでしょうね」

「誰を？　僕を？　そんなことを考えただけでも、そいつの鼻柱をひん曲げてやるよ！　ポチンコフの持家だよ、四十七号で、バーブシキンという官吏の住まいだ……」

「僕は行かないよ、ラズーミヒン！」とラスコーリニコフはくびすを転じて、さっさと歩き出した。

「僕は賭でもする、きっと来ずにはいないから！」とラズーミヒンはあとから追っかけるように叫んだ。「でなければ、貴様……でなければもう絶交だ！　おうい、待て！　ザミョートフはあすこにいるか？」

「あすこだ」

「会ったかい？」

「会った」

「話をしたかい？」

「した」

「なんの話を？　いや、君なんか勝手にしろだ、言わなくてもいいや。ポチンコフの持家、四十七号のバーブシキンだ。覚えておけよ」

ラスコーリニコフはサドーヴァヤ通りまで行きつくと、町角を曲ってしまった。ラズーミヒンはその後をもの思わしげに見送っていた。とうとう諦めたように手を振って、家の中へはいりかけたが、また階段の途中で立ち止まった。

『ええ、くそ、いまいましい！』と彼はほとんど声に出して言った。『しゃべることは筋道が通っている。だがまるで……しかし、おれも馬鹿だな！　気ちがいだって、筋道の通った話をしないとも限らないじゃないか？　どうやらゾシーモフも、これを多少恐れているらしかった！』と彼は指で額をこつんとたたいた。『だが、どうしたもんだろう、もし……あいつを一人で勝手にさせる法はない！　身投げくらいするかもしれん……ああ、こりゃしまったぞ！　いけない！』こう考えて、彼はまたあとへ引っ返し、ラスコーリニコフのあとを追って駆け出した。けれど、もう影も形も見えなかった。彼はぺっと唾を吐いて、一時も早くザミョートフに様子をきこうと、急ぎ足で『水晶宮』へ引っ返した。

ラスコーリニコフは真っ直ぐに橋まで行って、そのまんなかの欄干近くたたずんだ。そして両肘をその上にもたせ、遠くかなたをながめ始めた。ラズーミヒンと別れると、彼ははなはだしい衰弱感を覚えて、ここまでた

どりつくのもやっとであった。往来でもかまわない、どこかへすわるか、横になるかしたかった。彼は水の上へかがみ込んで、ばら色をした夕日の最後の反映や、じりじりと濃くなっていく黄昏(たそがれ)の中に黒ずんで見える家並みや、左側の河岸通にある屋根部屋らしいものの中で、たった一瞬間なげつけられた太陽の最後の光線を反映して、さながら火焔(かえん)に包まれたように輝いている遠い小窓や、さてはくろずんできた運河の水を、機械的にながめていたが、とりわけこの水を注意深く、じっと見入っているようであった。ついにそのうち、目の中で赤い輪みたいなものがぐるぐる回り始め、家々が左右に動き出し、通行人も、河岸通も、馬車も……すべてがぐるぐる回転し、踊り始めた。ふいに彼はぶるっと身震いした。それはある一つの奇怪な見苦しい光景のおかげで、再度の卒倒から救われたのかもしれない。彼は何者か自分の右手へ来て、並んで立ったような気がした。目を上げて見ると、黄色いやせた面長な顔と、どす赤くくぼんだ目をした、背の高い、頭に布片(きれ)をかぶった女の姿が映じた。彼女はまともにひたと彼を見つめていたが、その実なにも目に止まらず、誰一人見分けなかったらしい。ふいに彼女は右手の欄干にもたれ、右足を持ち上げて、格子の外へさっと出したかと思うと、続いて左足も同様にして、やにわに濠(ほり)の中へ身をおどらせた。きたない水がさっと開いて、瞬間にその犠牲を飲んだが、一分ばかりすると、身投げ女は浮き上がり、静かに下の方へと流れて行った。頭と足は水に隠れ、背中だけを上に見せながら、ずれたスカートを枕のように、ふわりと水面へふくらましている。

「身投げだ！　身投げだ！」と幾十人かの声が叫んだ。人だかりがして来て、両側の河岸通は見物人が垣のように続いた。橋の上のラスコーリニコフのまわりにも、群衆がうしろから押したり突いたりしながら、黒山のようにたかってきた。

「あれえ、まあ、あれは隣りのアフロシーニュシカじゃないか！」どこかその辺で泣くような女の叫び声が聞こえた。「皆さん、助けてくださいよう！　誰か引き揚げてくださいよう！」

「ボートだ！　ボートだ！」と群衆の中でわめく声がした。

けれど、もうボートはいらなかった。一人の巡査が河岸の石段を駆けおりて、外套(がいとう)と長靴をぬぎ捨てると、いきなり水の中へ飛び込んだ。仕事はまるで造作なかったもの――身投げ女は石段から二歩ばかりのところを流れていたので、彼は右手で女の着物をつかみ、左手で同僚の差し出す竿(さお)をすばやくつかんだ。こうして女はすぐ引き上げられ、石段の花崗(みかげ)の舗石(ほせき)の上に置かれた。彼女は間もなく正気に返って身を起こし、べったりすわって、両手で無意味にぬれた着物をこすりながら、くしゃみをしたり、鼻をふんふん鳴らしたりし始めた。彼女はなんにも口をきかなかった。

「酒が過ぎてこんなことになったんですよ、皆さん、酒が過ぎて」今度はもうアフロシーニュシカの傍で、例の

女の声がこういった。「こないだも首をくくろうとしたのを、やっと縄からおろしたんですよ。わたしはいま店へ買物に行ってたもんですから、娘っ子をそばへつけて見張らせといたんだけど――もうこんな間違いをしでかしちまって！　町内の人なんですよ、すぐこの近所に住んでおります、端から二軒目の、ほらあそこんとこ……」

群衆は散じ始めた。巡査らはまだ身投げ女の世話をやいていた。誰やら警察がどうとかわめいた。……ラスコーリニコフはすべての事を妙に冷淡な、無関心な感じでながめていた。彼は忌まわしくなってきた。『いや、そんな事は汚らわしい……水は……いけない』と彼は心の中でつぶやいた。『何事もありゃしない』と彼は言い足した。『何も待つことはない。警察がどうとかいったが、あれはなんだろう……ザミョートフはなぜ警察にいないんだ？　警察は九時過ぎから開いているのに……』彼は欄干の方へ背を向けて、あたりを見回した。

『ふん、それがどうしたというんだ！　それもいいじゃないか！』彼は断固たる調子でこう言うと、橋から離れ、警察の方角をさして歩き出した。彼の心はうつろで、がらんとしていた。何を考える気もしなかった。憂愁までも消えうせて、『何もかも片づけてしまう』ために家を出た、あの先ほどの意気込みも跡かたすらなかった。そして、深い無関心な気持がそれに代わった。

『なに、これだってやはり結末だ！』濠端の通りを歩きながら、彼は静かにものうく考えた。『とにかく片づけてしまう、そうしたいんだから……だがしかし、ほんとうに結末かな？　いや、どうだって同じことだ！　方尺の空間はあるだろう――へっ！　しかし、いったいなんの終末なんだろう！　いったいほんとうの終末だろうか？　おれはやつらに言ってしまうだろうか、どうだろう？　ええ……くそっ！　第一、それにおれは疲れてるんだ。どこでもいいから、少しも早く横になるか、すわるかしたいんだ！　何よりも恥かしいのは、すべてがあまりばかばかしすぎるってことだ。だが、それもくそくらえだ。ええっ、なんてくだらない事がよくも頭へ浮かんでくるもんだ……』

警察署へはどこまでも真っ直ぐに行って、二つ目の曲がり角を左へ取らなければならなかった――警察はそこから一足だった。けれど、最初の曲がり角まで来ると、彼は立ち止まってちょっと考えた後、横町へそれてしまった。そして、通りを二つ越して、まわり道をしながら先へ進んだ――これは何も当てなしだったのかもしれないが、あるいはほんの一分でも先へ延ばして、余裕を作ろうとしたのかもしれない。彼は地面ばかり見て歩いた。ふと誰か耳もとで何やらささやいたような気がした。彼は頭を持ち上げてみると、いつの間にかあの家のそば、しかも門のすぐ前に立っていた。あの晩からこっち、彼は、ここへ来たこともないし、傍を通ったこともなかったのだ。

ことばであらわせない欲求が、彼をいやおうなしにぐんぐん引っ張って行った。彼は家の中へはいって、門の下を通りぬけ、それから右手にある最初の入り口をくぐ

って、馴染(なじみ)の階段を四階へと上り始めた。狭い急な階段はひどく暗かった。彼は一つ一つの踊り場に立ち止まって、もの珍しげにあたりを見回した。一階目の踊り場では、窓框(まどわく)がすっかり取りはずしてあった。『あの時はこんな事はなかった』と彼は考えた。と、間もなく、ミコライとミトレイが仕事をしていた、例の二階のアパートがあらわれた。『しまってるな。そして戸も新しく塗りあがってる。つまり、いよいよ貸しに出したんだな』やがてもう三階……それから四階になった……『ここだ！』と、けげんの念が彼を捕えた。中へ通ずるドアがいっぱいにあけ放されて、中には人がいるらしく、話し声が聞こえていた。これは彼のぜんぜん予期しないことだった。しばらく躊躇(ちゅうちょ)した後、彼は最後の幾段かを上って、住まいの中へはいって行った。

この住まいもやはり新しく修繕されていた。中には職人がはいっていたが、それがまた彼をぎょっとさせたような形だった。彼はなぜかこの住まいが、あのとき見捨てて行った状態とそっくりそのままで、死骸(しがい)すら床の上で同じ位置にころがっているに相違ないような気がしていた。ところが今はいってみると、壁はま裸で、家具は一つもない。なんだか変な感じだ！　彼は窓の方へ行き、窓じきりに腰をかけた。

職人はみなで二人きり、どちらも揃って若い者で、一方は少し年かさ、一方はずっと若かった。彼らは以前の黄色いぼろぼろのよごれた壁紙の代わりに、薄紫色の花模様のついた新しい白い紙で壁を貼っていた。ラスコーリニコフはなぜかそれがひどく気に入らなかった。こんなに何もかも変えられてしまうのを惜しむように、彼は敵意を持った目でその新しい壁紙をにらんでいた。

職人たちは大分ぐずぐずしていたとみえて、いま急いで紙を巻き収め、帰りじたくをしているらしかった。ラスコーリニコフが現われたのも、彼らの注意をひかなかった。二人は何か話し合っていた。ラスコーリニコフは腕組みをして、耳を傾け始めた。

「あの女がな、ある朝おれんとこへやって来たんだ」と年かさの方が若い方に言った。「べらぼうに早く、大めかしにめかし込んでよ。『なんだってお前、人の前でそうでれでれしやがるんだい。なんだってそうべたべたしやがるんだい？』とおれが言うと、やつめ『あのね、チート・ヴァシーリッチ、わたしこれから先ずっとお前さんの自由になりたいと思うのよ』ときやがった。まあ、こういうわけなのよ！　ところで、そのめかしようといったら、雑誌だ、なんのこたあない雑誌だよ！」

「そりゃなんの事だい、おっさん、その雑誌って？」と若い方が聞いた。彼は見たところ、『おっさん』にいろいろな事を習っているらしかった。

「雑誌てえのはな、お前、つまり色を塗ったきれいな絵のことさ。ここの仕立屋へ土曜ごとに、外国から郵便で来るんだ。つまりな、男でも女でも誰がどんな服を着たら似合うかってんだ。つまり、見本絵さ。男の方はたいてい外套を着てるが、女の方になるてえと、手前がありだけのものをほうり出しても、まだ足りないくれえどえ

らい衣裳だぜ！」
「このペテルにゃ、なんだってないものはないのだねえ！」と若い方は夢中になって言った。「お袋と親父のほかにゃなんだってあらあ！」
「それだけをのけたら、なあ兄弟、どんなもんでもあらあな！」と年かさの方は教訓めいた調子で言った。
ラスコーリニコフは立ち上がって、もと長持、寝台、箪笥などの置いてあった、次の間へはいって行った。家具を取り払った部屋は、恐ろしく小さく見えた。壁紙はすっかりもとのままで、その片隅には聖像龕の据えてあった場所がくっきり痕を残している。彼は一わたり見回してから、もとの窓へ引っ返した。年かさの方の職人が、横目でちらと彼を見た。
「なんのご用ですね？」ラスコーリニコフの方へふり向きながら、彼はいきなりこう尋ねた。
返事をする代わりに、彼は立ちあがって控室へ出て行き、呼鈴の紐をぐいと引いた。あの時の呼鈴、あの時と同じブリキのような響き！　彼は再び三たびそれを引いた。彼は耳をすまして、追憶をたぐり出した。以前の悩ましく恐ろしく醜悪な感覚が、だんだん明らかに生々と、記憶によみがえってきた。彼はひと引きごとにぴくり、ぴくりと震え上がった。しかもそれと同時に、だんだんいい気持になってきた。
「いったいなんの用なんだい？　お前は何者なんだ？」彼の傍へ出て来ながら、職人はきめつけた。
ラスコーリニコフは再びドアの中へはいった。
「家を借りようと思って」と彼は言った。「見てるんだよ」
「夜家を借りに来る人はありませんや。おまけにそれなら、庭番と一緒に来なくちゃ駄目ですよ」
「床も洗っちまったな。ペンキを塗るのかい？」とラスコーリニコフは続けた。「血はもうないかい？」
「血ってなんですね？」
「ほら、ここで婆さんが妹と一緒に殺されたじゃないか。ここはまるで血の海だったのさ」
「お前はいったいなにものだい？」と職人は不安げに叫んだ。
「僕かい？」
「そうさ」
「お前それが知りたいのか？……じゃ一緒に警察へ行こう、そこで聞かしてやるから」職人たちはけげんそうに、しばらく彼を見つめていた。
「もう帰らなくちゃならねえ。すっかり手間どっちゃった。行こうよ。アリョーシカ。戸じまりをしなくちゃ」と年かさの職人が言った。
「うん、行こう！」とラスコーリニコフは無関心な調子で答えて、先に立って部屋を出ると、ゆるゆる階段をおり始めた。
「おい、庭番！」門の所まで来ると、彼は声高に呼んだ。
五、六人のものが入り口のすぐそばで、ぼんやり往来の人を見ながら立っていた。それは二人の庭番と、一人の女と、部屋着をきた町人と、その他一、二のものだっ

た。ラスコーリニコフはいきなりそのそばへよった。
「何ご用で？」と庭番の一人が応じた。
「警察へ行って来たかい？」
「いま行って来ました。あなた何ご用で？」
「向こうには皆いるかい？」
「いますよ」
「副署長もいたかい？」
「ちょっと来ていました。あなた何ご用で？」
ラスコーリニコフはそれには答えず、考え込みながら、一同と並んでたたずんだ。
「住まいを見に来たんだとよ」と年かさの方の職人が傍へ来ながら言った。
「どの住まいを？」
「おれたちが仕事している所さ。『なんだって血を洗ってしまったのだ？　ここじゃ人殺しがあったじゃないか。ところで、おれは借りに来たんだ』なんてよ。それから、呼鈴を鳴らして、まるで綱を引きちぎらないばかりだったよ。それから警察へ行こう、そこで何もかも話してやる、とかなんとかいって、うるさくからんできたのさ」
庭番は合点の行かぬ顔をして、眉をしかめながら、ラスコーリニコフをじろじろ見回した。
「あなたはいったいどなたですね？」と彼はやや声を励まして問いかけた。
「僕はもと大学生だった、ロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフというもので、ここからあまり遠くない横町にある、シールの持家の十四号にいるんだよ。庭番に尋ねてくれ……知ってるから」ラスコーリニコフは相手の方を見向きもせず、薄暗くなった通りをじっと見つめながら、大儀そうな物思わしげな調子で、これだけの事を言った。
「が、なんだってあなたは部屋の中へはいったんです？」
「見るためにさ」
「何を見るものがあります？」
「いっそふんづかまえて、警察へ突き出しちまえ！」とふいに町人が口を出したが、すぐ黙ってしまった。
ラスコーリニコフは肩ごしに町人を尻目にかけて、注意ぶかくじっと見つめていたが、ものうげな低い調子で言った。
「じゃ、行こう！」
「そうだ、突き出しちまえ！」と町人は元気づいて、相手のことばを引取った。「なんだってこの男はあの事を言い出したんだ？　いったいなにを腹に隠してるんだ、うん？」
「酔ってるか、酔ってねえか、わかったもんじゃねえ」と職人はつぶやいた。
「本当になんの用なんですね？」そろそろ本気に腹を立てながら、庭番はまたもやどなりつけた。「何をいつまでもへばりついてるんだ？」
「警察へ行くのがこわくなったのかい？」とラスコーリニコフは冷笑を浮かべながら言った。
「何がこわいんだい？　手前こそ何を人にからんできや

がるんだ？」
「かたりめ！」と女がどなった。
「何もこんな野郎を相手にぐずぐずいう事あねえ」と、もう一人の庭番が口を出した。粗ラシャの外套の前をはだけて、帯に鍵をぶらさげた大男である。「出てうせろ！……本当にかたり野郎め……うせろ！」
　こう言うなり、ラスコーリニコフの肩をつかんで、往来へ突き飛ばした。こっちは危くもんどり打ちそうになったが、どうにか踏みこたえて倒れなかった。身づくろいして、無言のまま見物一同を見やったが、やがてまた先の方へ歩き出した。
「梃妙来なやつだな」と職人が言った。
「近ごろは梃妙来なやつが多くなったのさ」と女が言った。
「やっぱり警察へ突き出しゃよかったんだ」と町人は言い足した。
「何もかかり合いになる事あねえよ」と大男の庭番が言った。「全くのかたりさ！　あの通り、自分から行きたがってるんだから、いいじゃねえか。うっかりかかり合ってみろ！　それこそ抜けられやしねえから……ちゃんと知ってらあな！」
『さて、行ったものか、やめたものか？』ラスコーリニコフは四辻の車道のまんなかに立ち止まって、誰かから最後の言葉でも待つように、あたりを見回しながら考えた。が、どこからも何一つ応じてくるものはなかった。すべては、彼の踏んでいる石のように、がらんとして死んでいた。彼にとって、ただ彼だけにとって、死んでいるのであった……ふとはるかかなた、二百歩ばかり隔てた通りのはずれ、深くなりまさる闇の中に、彼は一かたまりの群衆を見分け、がやがやという話し声や叫び声を聞き分けた……群衆のまんなかには一台の馬車が立っていた……通りの中ほどで、小さな火が一つちらちらし始めた。『何ごとだろう？』とラスコーリニコフは右へ取って、群衆の方へ歩いて行った。なんにでもかかり合ってみようとしているような風だ、そう思って、自分で冷たい微笑を漏らした。警察行きを固く決心したので、すぐに万事片づくと確信していたからである。

七

通りのまんなかには、二頭立の葦毛の逸物をつけた紳士用のぜいたくな四輪馬車が立っていたが、乗り手はいなかった。御者は御者台からおりて傍に立っているし、馬はくつわを取って抑えられている……まわりには大勢の人がひしひしとつめかけ、一ばん前にはいくたりかの巡査が立っていた。中の一人は角灯を手にかがみ込んで、車輪のすぐ傍の舗道の上にある何ものかを照らしていた。人々はがやがや言ったり、わめいたり、嘆息したりしていた。御者は合点のいかぬような顔をして、時々こうくり返していた。

「なんという災難だろう！　ああ、どうもとんだ災難だ！」

ラスコーリニコフはできるだけ前へ割り込んで、この騒ぎと人だかりの原因をやっとのことで見定めた。地面には今しがた馬に踏まれたばかりの男が、全身血まみれになって倒れていた。見たところ、いかにもみすぼらしいが、『旦那らしい』服装をしている。顔からも血が流れ、額は一面に傷だらけで、皮ははげ、目も当てられぬ相好をしていた。並みたいていの踏まれ方でないことが、一見して明瞭だった。

「皆さん！」と御者はくどくどと訴えた。「どうしてこれがよけられましょう！　そりゃもうわっしが馬を追い立てたとか、声をかけなかったとかいうなら格別だが、けっして急いだんじゃなくて、並み足でやって来たんでございますからな。皆さん方も見てござりましたが――人間は粗相をしやすいもので、わっしもその一人でございますよ。酔っ払いはご承知の通り、蝋燭を立てたりなんかしやしませんからね！……見るとこの人が、ひょろひょろぶっ倒れそうな格好で、通りを突っ切ろうとしている……わっしは一度、二度、三度まで声をかけて、おまけに手綱を締めましたが、この人は真っ直ぐに馬の足もとへ倒れたんで！　いったいわざとそうしたのか、それともうんと酔っ払っていたのかしりませんがね……馬が若くて驚きやすいときてるから、一つがんとやったところ、この人がきゃっと大きな声を立てたので、馬のやつはなおのこと……それでとうとうこんなことになっちまって」

「全くそれに違いない！」と誰かの証明する声が群衆の中で響いた。

「声をかけた、そりゃ本当だ、三度も声をかけたんだ」ともう一人の声が応じた。

「かっきり三度だ、みんな聞いてた！」と第三の声が叫んだ。

もっとも、御者はさほどしょげても、びくびくしてもいなかった。見うけたところ、馬車の持主は富裕な名士で、今はどこかで馬車の来るのを待っているらしい。巡査はいうまでもなく、この点がうまくいくようにと、少なからず気をもんでいた。とにかく、怪我人を分署なり、病院なりへ収容しなければならなかった。が、誰一人彼

の名を知っているものがない。
その間にラスコーリニコフは人ごみを押し分けて、なおも近く身をかがめた。ふと角灯の光りがこの不幸な男の顔をはっきり照らし出した。彼はその男を見分けた。「これは僕が知ってる、知ってる！」と彼はすっかり前へ出て行きながら叫んだ。「これは官吏です。退職の九等官で、マルメラードフという！　すぐ近所のコーゼルの持家に住んでいます……医者を早く！　費用は僕が払います、この通り！」
彼はポケットから金を取り出して、巡査に見せた。彼はむやみに興奮していた。
巡査たちは怪我人の身もとがわかったので満足した。ラスコーリニコフは自分の姓名と住所を告げ、まるで生みの父親の事かなんぞのように一生懸命になり、人事不省のマルメラードフを一刻も早くその住まいへ運ぶように主張した。
「ほら、あすこです、この三軒さき」と彼は一人でやきもきした。「コーゼルの持家です。金持のドイツ人の……この人はきっと酔っ払って、家へとぼとぼ帰るところだったんです。僕はこの人を知っていますが……大酒飲みなんでね……家には家族がある。細君に、子供に、それから娘が一人いるんです。病院へつれて行くまでに応急手当てを、あの家にもきっと医者が住まっているから！　払いは僕がします、僕がします！……なんといっても肉親の看護だから、早く手当てができる。でなかったら病院へ行くまでに死んでしまう……」
彼は巡査の手にこっそりとなにがしかの金を握らせさえもした。それに、事件はわかり切った当然のことである。いずれにしても、その方が手当ては早いに決まっていた。怪我人はかつぎ上げられ、運んで行かれた。手伝い人もいくたりか出て来た。コーゼルの家までは三十歩ばかりしかなかった。ラスコーリニコフはそっと大事に頭をささえながら、あとからついて行き、道案内をした。
「こっちだ、こっちだ！　階段をのぼるときは、頭を上にしなくちゃいけない。ぐるっと回った……そうだ、そうだ。僕が駄賃を払うから、礼をするから」と彼は言った。
カチェリーナ・イヴァーノヴナはいつものくせで、ちょっとでも暇があればすぐに両手をしっかり胸に組み合わせて、何かひとりごとを言っては、ごほんごほん咳をしながら、小さな部屋の中を窓から暖炉へ、暖炉から窓へと歩き続けるのであった。近ごろ彼女は、十になる姉娘のポーレンカを相手に、よくいつまでも話しこむようになった。娘はまだたくさんわからない事があったけれど、自分が母親にとって必要なものだという事だけは、十分によく飲み込んでいたので、いつもその大きなりこうそうな目で、母親のあとを追いながら、なんでもわかっているような顔をしようと、一生懸命に苦心していた。が、ちょうどこの時ポーレンカは、一日気分のすぐれなかった弟を寝かせつけようと、着物を脱がせているところだった。今夜のうちに洗っておかねばならぬシャツを、取り替えてくれるのを待つ間、子供はしかつめらしい顔

をして、踵をつけて爪先だけ開き、ぴったりそろえた両脚を前へ突き出しながら、黙って身動きもせずに、しゃんと椅子の上にすわっていた。彼は唇をとがらせ目をみはったまま、すべて一般にりこうな子供が、寝に行く前に着物を脱がせてもらう時、きまってする事になっている型どおり寸分たがわず、身動きもせずに母と姉の話を聞いていた。その下の女の子は、それこそ全くのぼろぼろ着物を着て、衝立の傍に立ちながら、自分の番を待っていた。階段へ向かった戸はあけ放しになっていた。それは奥の部屋部屋から煙草の煙の波が絶えず流れ込んで、不幸な肺病やみの女をいつまでも悩ましげに咳き入らせるので、それを少しでも防ぐためだった。カチェリーナはこの一週間に、いっそうやせが目立ってきたようで、頬の赤いしみは、前よりずっとあざやかに燃えていた。

「お前はとてもほんとうにできないだろう、考えてみることもできないだろう。ねえ、ポーレンカ」と彼女は部屋を歩きながら言った。「おじいさまのおうちにいるころ、わたしたちはどんなに面白く華やかに暮していたか。それを、あの酔っ払いがわたしを破滅さしてしまった上に、お前たちまで破滅させようとしているんだよ！　おじいさまは五等官だから、軍人なら大佐で、まあいわば知事様みたいだったんだよ。もうほんの一息で知事様というところだったのよ。だから、みんながおじいさまのところへ来ては、『わたしどもはあなたを知事さま同様に思っているのでございます、イヴァン・ミハイルイチ』なんていったものさ。わたしがね……ごほん！　わたしが……ごほん、ごほん……ああ、つくづくいやになってしまう！」と彼女はたんを吐き出して胸を抑えながら、叫ぶように言った。「わたしがね……ああ一番おしまいの舞踏会の時……貴族会長さんのお宅の舞踏会の時……ベズゼメーリナヤ公爵夫人がね――これはあとでわたしがお前のお父さんと結婚した時に、祝福してくだすった方だよ、ポーレンカ――この方がね、わたしを見るとすぐ『卒業式の時にショールをもって踊ったかわいいお嬢さんは、あの人じゃなかったかしら？』とおききになったんだよ。（ああ、ほころびを縫わなくちゃ。さ、早く針を持って来て、わたしが教えた通りにつくろってごらん。でないと、明日は……ごほん！　明日は……ごほん、ごほん、ごほん！　もっとひどく裂けてしまうから）」と苦しげに身もだえしながら、彼女は叫んだ。「そのときね、ペテルブルグからいらっしたばかりのシチェゴリスコイ公爵という侍従武官が……わたしとマズルカをお踊りになって、その翌日わたしに結婚の申し込みをなすったんだよ。その時、わたしは自分でごく丁寧にお礼を申し上げて、わたしの心はもうほかの人にささげているからと、お断わりしたの。そのほかの人というのが、つまり、お前のお父さんだったのよ、ポーリャ。するとおじいさまがたいへん腹をお立てになってね……あ、お湯はできたかえ？　さあ、肌着をおよこし、そして靴下は？……リーダや」と彼女は下の娘を呼びかけた、「お前今夜は仕方がないから、肌着なしでおやすみよ。どんなに

かしてね……靴下は傍へ出しておおき……一緒に洗うんだから……なんだってあの飲んだくれは帰らないんだろうね！　肌着を雑巾みたいになるまで着て、ぼろぼろに破いてしまった……二晩も立て続けに骨を折らされるのはたまらないから、みんなひとまとめに片付けたいんだけどねえ！　ああ！　ごほん、ごほん、ごほん、ごほん！

また！　あれはなんだね？」と彼女は、入り口の控室でがやがやしている群衆と、何か荷物をかついで部屋へ押し込んで来た人に気がついて、彼女は思わず叫んだ。

「何ごとですの？　いったいなにを持ってきたんです？

まあ、どうしよう！」

「いったいこりゃどこへ置いたもんだろう？」血塗れになって正気を失っているマルメラードフが部屋の中へかつぎ込まれたとき、巡査の一人はあたりを見廻しながら、こう尋ねた。

「長椅子！　長椅子へじかに置いてくれたまえ、ほら、こっちを頭にして」とラスコーリニコフが指図した。

「往来でひかれたんだよ！　酔っ払ってるところを！」と控室から誰やらが叫んだ。

カチェリーナは真っ青になって突っ立ったまま、さも苦しげに息をしていた。子供たちは仰天してしまった。小さいリードチカはきゃっと叫んで、ポーレンカにとびかかり、姉にひしとしがみついて、全身をわなわな震わした。

マルメラードフを寝かすと、ラスコーリニコフはカチェリーナのそばへ駆け寄った。

「どうか後生ですから、落ち着いてください、びっくりしないでください！」と彼は早口に言った。「ご主人は往来を横切ろうとして、馬車にひかれなすったんですが――心配はいりません。今に気がつきますから。僕がここへかついで来るようにいいつけたんです……僕一度伺ったことがあります、覚えていらっしゃるでしょう……大丈夫、気がつきますよ。金は僕が払います！」

「ああ、とうとう本望を達したんだ！」カチェリーナは絶望的な叫びを一声たてると、夫のそばへ駆け寄った。

ラスコーリニコフは、彼女が気絶して倒れるような女でないことを、やがて間もなく見てとった。不幸な老人の頭の下には、今まで誰一人気のつかなかった枕が当てがわれた。カチェリーナは夫の服を脱がせ、傷をあらためにかかった。自分のことは忘れてしまって、震える唇をきっとかみしめ、今にも胸からほとばしり出ようとする叫びを抑えながら、一生懸命にまめまめしく働いて、取り乱した風もなかった。

ラスコーリニコフはその間に、医者へ人を走らせた。医者は一軒おいて隣りに住んでいることがわかった。

「ぼく医者を呼びにやりました」と彼はくり返しくり返し、カチェリーナに言った。「ご心配はいりません、僕が払いますから。水はありませんか？……そしてナプキンでもタオルでも、なんでもいいから早くください。怪我はどんなだかまだわからないんですから……ご主人は怪我をしただけで、死んでるんじゃありません、本当です……ああ、医者はなんというかしらん！」

カチェリーナは窓の方へ飛んで行った。その片隅のぺちゃんこになった椅子の上に、子供や夫の肌着を夜中に洗濯するために用意された、大きなたらいが据えてあった。カチェリーナはこうした夜中の洗濯を、少なくとも週に二度、時にはそれ以上、自分の手でするのであった。家の者の肌着が一人に一枚ずつしかなく、着がえすらもないほどの落ちぶれ方ではあったが、彼女は不潔なことが大嫌いなので、家の中によごれ物をほうって置くよりは、力にあまる無理な仕事でわが身を苦しめても、夜みんなが寝ている間に洗濯して、それを張り渡した縄にかけて朝までに干しあげ、皆にさっぱりしたものを着せようとするからであった。彼女はラスコーリニコフの求めに応じて、たらいを持って行こうと手をかけたが、危うくその重荷と一緒に倒れそうになった。けれどラスコーリニコフはその間にもうタオルを見つけて、それを水に浸し、血まみれになったマルメラードフの顔をふき始めた。カチェリーナは痛みをこらえるように息をつぎながら、両手で胸を抑えてその場に突っ立っていた。彼女自身にも手当てが必要なくらいであった。ラスコーリニコフは、ここへ怪我人をかつぎ込むようにすすめたのは、自分の失策だったかもしれぬということが、だんだんわかってきた。巡査もやはり思い惑うような顔つきで立っていた。

「ポーリャ！」とカチェリーナは叫んだ。「ソーニャのところへ駆け出しておいで、大急ぎで。もし家にいなくっても、やっぱりそう言っておきなさい――お父さんが馬車にひかれたから、帰ってきたら、すぐお家へ来るようにって……早く、ポーリャ！　ほら、この頭巾をかぶって！」

「いっちょ懸命に駆け出しといでよ！」と弟がふいに椅子の上から叫んだ。けれどこれだけ言うと、すぐまた前のように目をまんまるく見張り、踵を前に爪先を開いたまま、黙り込んで椅子の上にちんとすわり続けていた。

その間に部屋は人で埋まりつくして、りんご一つ落とす隙間もなくなってしまった。巡査は引き揚げたが、だ一人だけ残って、階段からわいわい押しかけてくる群衆を、また階段へ追い返すのに骨折っていた。その代わり奥の方の部屋部屋から、リッペヴェフゼル夫人の借間人どもが、ほとんど総出でばらばら飛んで来た。初めのうちこそ、ただ入り口で押し合っているばかりだったが、やがてどやどやと部屋の中までなだれ込んできた。カチェリーナは前後を忘れてしまった。

「せめて死ぬだけでも、静かに死なしてやってくれたらよさそうなもんだ！」と彼女は群衆に向かってどなった。「見世物じゃあるまいし！　煙草なんかくわえてさ！　ごほん、ごほん、ごほん！　いっそ帽子もかぶってくるがいい……まあ、本当にひとり帽子をかぶったのがいるよ！……出て行け！　死んだ者にくらい礼儀を守りなさい！」

咳が彼女の息をつまらせた。しかし、おどかしは効を奏した。見うけたところ、みんなカチェリーナをいささか恐れているらしかった。借間人たちは、近親知友に突

然の不幸が起こった時、もっとも親しい間柄でさえいつも認められるかの奇怪な心内の満足感をいだきながら、一人一人戸口の方へじりじりと引っ返した。実際、誰しもこういう場合、それこそ真剣な憐愍(れんびん)や同情を持っているにもかかわらず、このような感情が忍び込むのを、どうしてものがれ得ないものである。

戸の向こうでは、病院へやったらとか、ここでむだに騒いでも仕方がない、とかいうような声が聞こえた。

「ここで死んじゃいけないというの！」とカチェリーナは叫んだ。そして、みんなに大雷を破裂さしてやろうと、戸をあけに飛び出しかけたが、あたかも戸口のところで、今しがた不幸を聞きつけるなり処置をつけにかけつけたリッペヴェフゼル夫人にぶっつかった。

これはいたって物のわからない、やっかい千万なドイツ女だった。

「どうも、まあまあ！」と彼女は両手を打鳴らした。「旦那(だんな)さんが酔っ払って、馬に踏まれたってね。病院へやんなさい！　わたしはおかみですよ」

「アマリヤ・リュドヴィーゴヴナ！　どうか考えてものを言ってください」とカチェリーナは高飛車に切り出した。（彼女はおかみに向かうと必ず、相手が『身のほどを知る』ように高飛車な調子で口をきくのであった。で、今のような場合にも、やっぱりその快感を味わずにいられなかったのである）「アマリヤ・リュドヴィーゴヴナ……」

「わたしはもう前に、ちゃんと断わっておいたじゃありませんか――けっしてわたしの事をアマリヤ・リュドヴィーゴヴナなどと言っちゃいけませんて、わたしはアマリ・イヴァンですよ！」

「あなたはアマリ・イヴァンじゃありません、アマリヤ・リュドヴィーゴヴナです。わたしはね、いま現に戸の向こうで笑っているレベジャートニコフみたいな、汚らわしいおべっか使いの仲間じゃありませんから（戸の向こうでは実際どっと笑う声と、『さあ、取っ組んだぞ！』という叫びが響き渡った）、いつでもあなたのことを、アマリヤ・リュドヴィーゴヴナと呼びますよ。もっとも、こう呼ぶのがなぜあなたのお気に入らないのか、わたし一向にわかりませんがね。あなたもご自分で見ておわかりでしょう――セミョーン・ザハールイチはどんなことになりました？　あの人は死にかかっているんですよ。どうかお願いですから、今すぐその戸を閉めて、誰もここへ入れないようにしてください。せめて死ぬだけでも静かに死なしてやってください！　でないと明日にもあなたの仕打ちが、総督さまのお耳にはいりますよ。公爵はわたしの娘時分からご存じで、主人にもたびたびお目をかけてくださいましたので、ようっく覚えていらっしゃいます。主人に大勢のお友達や保護者があったことは、誰でもみんな知っています。ただあの人があまり潔白で誇りが強いものだから、自分の因果な癖をつくづく感じたので、自分からその人たちを捨ててしまったんです。けれど今度は（と彼女はラスコーリニコフを指さした）、お金もご身分もあるこの親切な方が――主人がお小さい

時から存じ上げている方が、わたしたちを助けてくださるんですよ。本当ですとも、アマリヤ・リュドヴィーゴヴナ……」

彼女はこれだけの事を恐ろしく早口に弁じ立てた。しかも、先へ進めば進むほど、それが一そう早くなるのであった。けれど、咳が彼女の雄弁を一時に断ち切ってしまった。と、ちょうどその時、瀕死の怪我人が意識を回復して、うめき声を立てたので、彼女はその方へ駆け戻った。怪我人は目を見開いて、まだなんにもわからず、なんにも見分けられない様子で、枕もとに立っているラスコーリニコフの顔をじっと見入った。彼はさも苦しそうに、深く間遠に息をしていた。唇の両端には血がにじみ出し、額には汗が浮いている。彼はラスコーリニコフが見分けられなかったので、不安げにあたりを見回し始めた。カチェリーナはうれわしげな、とはいえ厳つい目つきで夫を見つめていたが、その目からは涙が流れるのであった。

「ああ、どうしよう！　胸がすっかりつぶれてる！　まあ、この血、なんて血だろう！」と彼女は絶望したように言った。「上着をすっかりとってしまわなくちゃ！少し横になってちょうだい。セミョーン・ザハールイチ、もし無理でなかったら」と彼女は大きな声で言った。

マルメラードフは妻の顔を見分けた。

「坊さんを！」と彼はしゃがれ声で言った。

カチェリーナは窓の方へ身を引き、窓枠に額を押し当てながら、絶望の叫びを発した。

「ああ、情ない世の中だ！」

「坊さんを！」瀕死の病人は一分ばかり無言ののち再びこう言った。

「もう迎えに行きましたよう！」とカチェリーナはどなりつけるように答えた。彼はその叫びに服して口をつぐんだ。そして、おどおどした悩ましげな目つきで、妻を捜し求めた。彼女はまた夫の方へ帰って、その枕もとに立った。彼は少し落ち着いたが、それも長くはなかった。

やがて彼の視線は、片隅で発作でも起こしたように震えながら、子供らしく見張ったびっくりしたような目でじっと父を見つめている小さいリードチカ（彼の秘蔵っ子）の上に止まった。

「あ……あ……」と彼は気づかわしげに彼女の方を目で教えた。

彼は何か言いたかったのである。

「それからまだ何ですの？」カチェリーナが叫んだ。

「はだしだ！　はだしだ！」と彼はうつけのようなまなざしで、娘の素足をさしながらつぶやいた。

「だまんなさい！……」と癇性らしい声でカチェリーナはどなりつけた。「なぜはだしでいるか、自分で知っているくせに」

「ありがたい、医者だ！」とラスコーリニコフはうれしそうに叫んだ。

几帳面らしい年とったドイツ人の医者が、うさん臭そうな顔つきで、きょろきょろあたりを見回しながらはいって来た。病人の傍へ寄って脈をとり、注意ぶかく頭を

いじって見た後、カチェリーナの手をかりて、血ですっかりねとねとになっているシャツのボタンをはずし、病人の胸をはだけた。胸は一面に目も当てられぬほどめちゃめちゃに砕けていた。右の方の肋骨が二、三枚折れていて、左の方は心臓の真上に、黄味がかった黒い斑点が、大きく無気味に広がっていた。むざんな蹄のあとである。医者は眉をひそめた。巡査は医者に向かって、怪我人は車輪に引っかかったまま、舗石道を三十歩ばかり引きずられて行った、と話して聞かせた。

「こりゃもう一度正気に返ったのが、不思議なくらいですよ」と医者はそっとラスコーリニコフにささやいた。

「で、いったいどうなんでしょう？」とこちらは問い返した。

「もうほんのちょっとです」

「まるで望みがないんですか？」

「全然ありません！　もう息をしているというだけですよ……それに、頭の方もなかなかの重傷ですからな……さよう……放血をやってみてもいいが……しかし……それも無駄でしょう。五分か、せいぜい十分で最期ですな」

「じゃとにかく、放血をやっていただこうじゃありませんか！」

「そう……しかし、前もってお断わりしておきますが、それはぜんぜん徒労ですよ」

この時また足音が聞えて、控室の群衆が左右にわかれた。と、敷居の上に、用意の聖餐を捧げた僧が現われた。小がらな白髪の老人である。そのうしろから、巡査がついてきた。通りから一緒なのである。医者はすぐ僧に席をゆずり、意味ありげに目と目を見合わした。

ラスコーリニコフは医者に向かって、せめて今少し残っていてくれと、むりやりに頼んだ。医者はひょいと肩をすくめて、居残ることにした。

皆は後ろへ引きさがった。式はごく簡単に終わった。死に行く人はほとんど何一つわからなかったらしい。彼はただとぎれとぎれに、不明瞭な音を発することができたばかりである。カチェリーナはリードチカの手を取り、男の子を椅子からおろして、片隅の暖炉の方へ引っ込み、そこにうやうやしく膝をついた。それから、子供をも自分の前にひざまずかせた。女の子はただ震えるばかりだったが、男の子はむき出しの膝を突いて、規則ただしく小さな手をあげては、大きく胸に十字を切り、床に額をこつんこつんと当てながら礼拝した。見たところ、それがかくべつ面白いらしかった。カチェリーナは唇をかみしめ涙をのんでいた。彼女も同じように祈った。時々幼いもののシャツを直してやったり、祈祷を続けながら、ひざまずいたまま立ちもしないで、箪笥から小さな肩掛けを取出し、あまりむき出しになっている娘の肩へかけてやったりした。その間にまた奥の部屋部屋へ通ずる戸が、時々物見高い連中の手であけられた。入り口の控室では、見物に来た各階の店子たちが、あとからあとからひしひしとつめかけたが、部屋の敷居をまたぐものはない。わずか一本の蝋燭の燃えさしが、こうしたすべての情景を照らすのであった。

ちょうどこのとき、姉を迎えに行ったポーレンカが、群衆を押し分けながらすばやくはいってきた。あまり急いで走ったので、はあはあ息を切らしていたが、はいるといきなり頭巾をぬいで、目で母を捜し出すとその傍へ近づき、「そこに来ててよ！　途中であったの！」と言った。母親は彼女をも抑えつけて、自分のそばに膝をつかせた。と群衆の中から年ごろの娘が、おずおずと音もなく前へ進み出た。貧苦と、襤褸と、死と、絶望の満ちたこの部屋の中に、彼女が突然姿を現わしたのは、不思議な思いがするほどであった。彼女もやはり貧しい衣裳を身にまとって、安っぽい服装をしてはいたが、ある特殊の社会に自然とできあがっている趣味と法則に合したもので、いやにけばけばしく下品な色をして、卑しい目的をむき出しにしていた。ソーニャは控室の敷居ぎわに立ち止まったが、敷居はまたがなかった。途方に暮れてしまって、何一つ意識しないようなようすである。この場合には不似合いな、長い滑稽な尾のついた、幾人の手をくぐったかしれない華美な絹服のことも、戸口を一ぱいふさいでしまった途方もない大きさの腰張りも、薄いろの靴のことも、夜は不用なパラソルを持っていることも、燃え立つような緋の羽毛飾りをつけた滑稽な丸い麦わら帽子のことも、何もかも忘れ果てたようである。子供らしくあみだにかぶったこの帽子の下からは、恐怖のあまり口をあけて、目をじっとすえた、やせて青白い、おびえたような顔がのぞいていた。ソーニャは年ごろ十八ばかり、やせて背丈は小さいけれど、すばらしい青い目をした、かなり美しい明髪女であった。彼女は寝台と僧をじいっと見つめた。やはり急いで来たので息をきらせていた。やがてようやく、群衆のひそひそ話や二、三のことばが耳へはいったらしく、彼女は目を伏せて敷居を一足またいだが、やはり戸口で止まってしまった。

懺悔と聖餐式は終わった。カチェリーナはまた夫の床へ近づいた。僧が帰りしなに、告別と慰安のことばを述べようとして、カチェリーナの方へ向いたとたん、

「この子供たちをどうしたらいいのでしょう？」と彼女は鋭いいらいらした調子で、幼いものたちを指さしながら言った。

「神様はお慈悲ぶかい、主のお恵みにすがりなさい」と僧は言いかけた。

「ええ！　お慈悲ぶかくっても、それはわたしたちにゃ届きません！」

「そのような事をいうのは罪です。奥さん、罪ですよ！」と僧は頭を振りながら注意した。

「じゃ、これは罪じゃないんですの？」と臨終の夫を指さしながら、カチェリーナは叫んだ。

「それは思わぬ惨事の原因となった人が、あなたに賠償をしてくれるでしょう。収入を失ったという点だけでもな……」

「あなたはわたしの言うことがおわかりにならないんです！」とカチェリーナは片手を一振りして、いら立たしげにさえぎった。「なんのために賠償なんかしてもらうんです？　だってあの人が自分で酔っ払って、馬の足も

とへ倒れ込んだんじゃありませんか！　それに、収入とはなんですの？　あの人は収入どころか、ただ苦労の種を作ってくれたばかりです。あの飲んだくれったら、何もかもお酒にしてしまったんです。わたし達のものを盗み出しちゃ、居酒屋へ持って行ったんです、子供たちやわたしの生涯を、居酒屋でめちゃめちゃにしてしまったんです！　死んでくれてありがたいくらいだ！　かえって損が少なくなるくらいです！」

「臨終の時には許してあげにゃなりませんて。そんなことは罪ですぞ、奥さん、そんな気持は大きな罪ですぞ！」

カチェリーナは夫の傍で小まめに何くれと世話をした。水を飲ませたり、頭の汗や血をふいてやったり、枕を直してやったりしながら、ときどき仕事の合間に僧の方へふり向いては、何かと話をしていたのであるが、この時は急に前後を忘れたようになって、彼に食ってかかった。

「ええ、神父さん！　それはただのことばです。ことばだけです！　許すなんて！　今日だってもしひかれなかったら、ぐでんぐでんになって帰って来るんです。一枚看板の着古したシャツの上にぼろを重ねて、そのまま正体なく寝倒れてしまうんですよ。ところが、わたしは夜明けまでも水をじゃぶじゃぶやって、あの人や子供たちの着古しを洗ったり、それを窓の外へ干したりして、さて夜が白みかけると、今度はすわり込んでほころびをつくろわなければならない。これがわたしの夜なんです！……これでも許すなんて事がいえますか！　もういい加減わたしは許してきましたよ！」

と、恐ろしいほど激しい咳が、彼女のことばを断ち切った。彼女は片手で苦しげに胸を抑えながら、一方の手でハンカチへたんを受け、それを僧の前へ突き出して見せた。ハンカチは一面に血だらけであった。

僧は頭をたれて、一口も物を言わなかった。

マルメラードフは知死期の苦しみに襲われていた。彼はその目を、またかがみ込んだ妻の顔から放さなかった。何かいいたくてたまらない様子で、一生懸命に舌を動かしながら、不明瞭なことばを発して切り出そうとしたが、カチェリーナは夫が許しを請おうとしているのを察し、すぐさま命令するように叫んだ。

「黙ってらっしゃい！　言わなくてもいい！　何を言いたいのか、わかっていますよう……」

で、病人は口をつぐんだ。しかしその時、頼りない視線が戸口へ落ちると、彼はソーニャを見つけた。

この時まで彼は娘に気づかなかった。彼女は片隅の物かげに立っていたのである。

「あれは誰だ？　あれは誰だ？」と彼はふいに息ぎれのするしゃがれ声で言った。全身に不安の色を現わし、恐ろしそうな目で娘の立っている戸口をさし示しながら、身を起こそうともがいた。

「寝てなさい！　寝てなさいよう！」とカチェリーナは叫んだ。

けれども彼はほとんど超自然的な力で片肘を立てた。そしてしばらくの間、まるで娘が誰かわからないように、

けうとい視線をじっとすえながら、その顔を見つめていた。のみならず、彼はまだこんな服装(なり)をしている娘を、一度も見たことがなかったのである。と、ふいに彼は娘を見分けた――虐げられ、踏みにじられた娘――けばけばしい安衣裳を恥じ入りながら、臨終の父に告別する番が来るのを、つつましげに待っている娘。限りない苦悶(くもん)が彼の顔に描き出された。

「ソーニャ！　娘！　許してくれ！」と彼は叫んで、手を差し伸べようとしたが、ささえを失ってぐらっとしたかと思うと、うつぶしに長椅子から床へどうと落ちた。人々は駆けよって抱き起こし、もとの長椅子に寝かしたが、その時彼はもう息を引取っていた。ソーニャは弱々しくあっと叫んで、いきなり傍へ走りより、父を抱きしめたと思うと、そのまま気が遠くなってしまった。彼は娘の腕の中で死んだのである。

「とうとう本望を達した！」カチェリーナは夫の死骸(しがい)を見て、こう叫んだ。「さあ、これからいったいどうしたらいいのだろう！　どうしてこの人を葬ったものだろう？　どうしてあれたちを、あの子たちをどうして明日から養ったらいいんだろう？」

ラスコーリニコフはカチェリーナの傍へ寄った。

「カチェリーナ・イヴァーノヴナ」と彼は言い出した。「つい先週、亡くなられたご主人が僕に自分の身の上話と、お家の様子を話して聞かせてくださいました……誓っていいますが、ご主人はあなたの事を、感激に近い尊敬の念をもって話しておられました。ご主人が皆さんに献身的な愛情をささげ、ことにあのお気の毒な病癖を持っていられたにもかかわらず、あなたを尊敬しかつ愛しておられることを伺ったその晩から、僕はご主人の親友になったのです……そこで、カチェリーナ・イヴァーノヴナ、失礼ですが、いま僕に……友人の義務を尽くすことを許してくださいませんか。ここに……たしか二十ルーブリあるはずです――もしこれが何かのお役に立ちましたら……そしたら……僕は……いや、なに、いずれまた伺います――きっと伺います……僕さっそく明日にも伺うかもしれません……では、さようなら！」

彼はすばやく部屋を出て、人ごみを押し分けながら、急いで階段の方へ行った。けれど群衆の中で、警察署長のニコジーム・フォミッチにぱったり出会った。彼はこの不慮の災厄を聞くと、すぐ親しくその処置を講じようと思い立ったのである。署での一幕以来、二人はそれきり会わなかったが、ニコジーム・フォミッチは彼を見分けた。

「ああ、あなたですか？」と彼はラスコーリニコフに声をかけた。

「死にました」とラスコーリニコフは答えた。「医者も来、坊さんも来て、万事ちゃんと式(かた)どおりにいっています。どうか、あの不幸のどん底に落ちた婦人を、あまりわずらわさないでください。それでなくても肺病なんですから。もしできることなら、何か元気をつけてやってください……ね、あなたは親切な方でしょう、僕知っています……」相手の目にひたと見入りながら、薄笑いを

ふくんで彼は言い添えた。
「それにしても、君はだいぶ血まみれのようですな」灯(ランタン)の光りで、ラスコーリニコフのチョッキに生々しい血痕(けっこん)をいくつか見つけて、署長は注意した。
「ええ、よごしました……僕は血だらけです！」何かしら一種特別な表情をして、ラスコーリニコフはこう言った。それからにやっと笑い、一つうなずくと、階段をおりて行った。
　彼は体じゅうおこりにでも襲われたような気持で、静かに階段をおりて行った。自分ではそれと意識しなかったけれど、張り切った力強い生命が波のように寄せてきて、その限りない偉大な新しい感覚が、彼の全身にみちあふれた。この感覚は、一たび死刑を宣告されたものが、急に思いもよらず特赦を受けたような感じに似ている、とでもいうことができよう。階段の中ほどで、家路に向かう僧が彼に追いついた。ラスコーリニコフは無言の会釈を交わし、黙ってそれをやり過ごした。しかし最後の幾段かをおりようとした時、突然うしろに急がしげな足音が聞こえた。誰か彼を追っかけて来たのである。それはポーレンカだった。彼女は後ろから走って来ながら、彼を呼んでいた。
「ねえ、ちょっと！　ねえ、ちょっと！」
　彼はふり向いた。娘は最後の階段をかけおりると、彼より一つ上の段に立ち止まって、ぴったり彼に顔を突き合せた。ぼんやりした明りが、裏庭からさし込んできた。ラスコーリニコフは、やせてはいるが愛くるしい少女の顔をつくづくと見た。彼女は楽しげにこにこしながら、無邪気に彼を見守っている。見たところ、彼女は自身でもすこぶる気に入っていることづけを持って、駆けつけたものらしい。
「ねえ、ちょっと、あなたの名前なんていうの？……それからも一つ――お家はどこ？」と彼女はせきこんで、はあはあ息を切らしながら尋ねた。
　彼はその肩に両手をおいて、何かしら幸福な感じをいだきながら、じっと彼女を見た。この女の子を見ているのがなんともいえずこころよい――どういうわけか、それは彼自身にもわからなかった。
「誰が君をよこしたの？」
「ソーニャ姉さんにいいつかったの」少女はひとしお楽しげにほほえみながらそう答えた。
「僕もそう思ったよ――ソーニャ姉さんがよこしたんだろうと」
「母さんも行けって言ったのよ。ソーニャ姉さんが行けってった時に、母さんもそばへ来て、そう言ったのよ。『急いで駆け出しておいでよ、ポーレンカ！』って」
「君ソーニャ姉さんが好き？」
「ええ、誰よかも一等すき！」なんだかこう特別力をこめて、ポーレンカは言った。と、その微笑が急にまじめくさってきた。
「僕も好きになってくれる？」
　返事の代わりに、彼は自分の方へ近づいてくる少女の顔を見た。ふっくりした唇が、接吻(せっぷん)しようとして、無邪

気に前へ突き出される。ふいに、マッチのような細い手が、固く固く彼の首に巻きつき、頭がその肩へ押し当てられた。こうして、少女は次第に強く顔を彼の体に押しつけながら、しくしく泣き出した。

「お父さんが可哀想だわ！」しばらくたってから、彼女は泣きはらした顔を上げ、両手で涙をふきながら言い出した。「このごろこんな不仕合せなことばかり続くんですもの」彼女はことさらしかつめらしい顔つきをして、だしぬけにこう言い足した。それは子供が急に『大人』のような口をきこうとするとき、一生懸命にとりつくろう表情なのである。

「お父さんは君を可愛いがった？」

「お父さんはリードチカを一ばん可愛いがってたわ」と彼女は大まじめに、にこりともしないで、もうすっかり大人口調でことばを続けた。「あの子は小さいから、可愛いがってもらえたの。それに病身だったから。あの子にはいつでもお土産を持って帰ってらしたわ。あたし達はお父さんにご本を読むことを習ったの。あたしは文法と聖書のお講義」と彼女は澄まして言い添えた。「お母さんはなんにも言わなかったけど、それを喜んでらしたのは、あたし達もわかってたわ。そして、お父さんも知ってらしたわ。お母さんはあたしにフランス語を教えてやるとおっしゃったのよ。あたしもう教育を受ける年ごろなんですもの」

「君お祈りができる？」

「ええ、そりゃできなくってさ！　もう先からよ。あたしはもう大人みたいに、口ん中でお祈りするのよ。だけどコーリャとリードチカは、お母さんと一緒に声を出して唱えるわ。はじめは『聖母マリア』を唱えて、それからも一つのお祈りをするのよ。『主よ姉ソーニャを許し祝福したまえ』っていうの。そのあとでまた『主よ、われらの第二の父を許し祝福したまえ』って。それはね、先のお父さんがもう死んでしまって、今のは違うお父さんだからなの。あたしたち先のお父さんのことも、やはりお祈りしてよ」

「ポーレンカ、僕の名はロジオンていうんだよ。いつか僕のこともお祈りしてちょうだい。『奴隷ロジオンをも』って――それっきりでいいから」

「あたしこれから一生、あなたのことをお祈りするわ」と彼女は熱心にいった。そして急に笑い出して飛びつくと、再び彼をしっかりと抱きしめた。

ラスコーリニコフは彼女に自分の名と、住所をいって聞かせ、明日は必ず寄るからと約束した。彼女はすっかり有頂天になって帰って行った。彼が通りへ出た時は、もう十時をまわっていた。それから五分の後、彼は橋の上に立っていた。先ほど女が身を投げたちょうどその場所である。

『もうたくさんだ！』と彼は勝ち誇ったようにきっぱりと言った。『蜃気楼を吹っとばせ、すき好んで招いた恐怖も追っぱらえ、幻も消えてしまえ！　生命はあるんだ！　いったいおれはいま生きてないのか？　おれの命はあの老いぼれ婆あと一緒に死にはしなかったんだ！

婆さんには天国の冥福を祈っておいたら、それでたくさんだ。もうゆっくり休んでもいい時なんだ！　今は理性と光明の王国だ！　そして……意志と力の……さあ、これから力くらべをしようじゃないか！』ある目に見えぬ力に向かっていどみかけでもするように、彼は昂然としてつけ加えた。『だっておれはもう方尺の空間にでも生きる覚悟をしたんじゃないか！』

『……今おれはひどく衰弱しているようだが、しかし……病気はすっかりなおってしまったらしい。さっきあの家を出る時に、なおるだろうと感じていたんだ。ときに、ここからポチンコフの家はほんの一足だ。どうしたって、もうラズーミヒンのとこへ行かなくちゃならん――よしんば一足でなくっても、賭はあいつに勝たしてやろう！……まあ、喜ばしといてやれ――なに、かまうものか……力だ、力がかんじんだ――力がなくては何も得られやしない。ところが、力を得るには力をもってしなくちゃならん。つまり、これをやつらは知らないんだ』と彼はごうぜんと恃むところありげに言い足した。そして、やっとのことで足を運びながら、橋を離れた。

矜持と自信は一刻ましに彼の内部で生長して、次の瞬間には、まるで以前と違った別の人間になってしまった。とはいえ、いったい何事が起こって、かくまで彼を一変させたのか？　それは彼自身にもわからなかった。わらしべにでもすがろうとしていたような彼が、突然『生きて行くことはできる、まだ生命はあるんだ。おれの命は老いぼれ婆あと一緒に死んだのじゃない』と感じたのである。もしかすると、彼はあまり結論を急ぎ過ぎたかもしれない。が、彼はそんなことを考えようともしなかった

『しかし、奴隷ロジオンのことを祈ってくれと頼んだじゃないか』こういう考えがふと彼の頭にひらめいた。『いや、なに、これは……万一の場合のためだ！』と彼はつけたした。そしてすぐに自分ながら、自分の子供っぽいでたらめがおかしくなり、からからと笑い出した。彼はこの上なくいいきげんになっていた。

彼はわけなくラズーミヒンを捜し当てた。ポチンコフの家では、もう新しい借間人を知っていて、庭番がすぐに道を教えてくれた。もう階段の中ほどから、いかにも大きな会合らしい騒ぎと、いきいきした話し声を聞き分けることができた。階段へ向かった戸はいっぱいにあけ放されていて、わめき声や争論が聞こえていた。ラズーミヒンの部屋はかなり大きい方で、集まった人数は十五人ばかりだった。ラスコーリニコフは入り口の控室に立ち止まった。すぐそこの仕切り板の陰で、おかみの使っている女中が二人、二つの大きなサモワールや、おかみの台所から運んできた菓子、酒肴などを盛った皿や、鉢や、酒びんなどのまわりを立ち働いていた。ラスコーリニコフはラズーミヒンを呼びにやった。ラズーミヒンは有頂天になって飛んで来た。彼がいつになく酒を過ごしているのは、一目で見え透いていた。ラズーミヒンはけっして酔うということはなかったのに、この時はどこやら違ったところが見えた。

「実はね」とラスコーリニコフは急いで言った。「僕がやって来たのは、君が賭に勝ったということと、実際どんな人でも、自分がどうなるかわからないものだってことを、一口君に言いたかったからなんだよ。僕ははいるわけにゆかない。ひどく衰弱してね、今にもぶっ倒れそうなんだ。だから、今日はこれで失敬する！　あす僕の方へ来てくれないか……」

「じゃね、僕が君を家まで送ろう！　君が自分でそんなに弱ってるというくらいだから……」

「だって客をどうするんだい？　あの縮れ毛の男は誰だい、ほら、今こっちをのぞいて見た？」

「あれ？　あんなやつ知るもんか！　きっと伯父の知人だろう！　が、もしかすると勝手にやって来たのかもしれない……とにかく、あの連中には伯父をつけとくよ。伯父は実にいい人間だぜ。君にいま紹介できないのは残念だよ。だが、あんな連中どうだってかまやしないんだ！　みんな今ぼくなんかに用はないんだ。それに、僕は少し風に当たらなくちゃならない。だから、君、ちょうどいいところへ来てくれたんだよ。もう二分もいようものなら、僕はやつらとなぐり合いをはじめたかもしれないんだ、ほんとうだとも！　何しろあきれ返るようなでたらめをしゃべり出すんだからな……君、人間てどこまでたらめが言えるものか、想像もつかないだろう！　だが、どうして想像ができないんだ？　われわれ自身だってずいぶんでたらめをいうじゃないか？　まあ、勝手にやらしとくさ、その代わりあとで言わなくなるだろうからな。ちょっと待ってくれ。今ゾシーモフを連れて来るから」

ゾシーモフは何かむさぼるような表情で、ラスコーリニコフに飛びかかった。彼の顔には一種特別な好奇の色がうかがわれた。やがて間もなくその顔は晴れやかになった。

「ぜひ寝なくちゃいけませんよ」彼は患者をできるだけ丁寧に見た後、きっぱりとこう言った。

「そして夜ねる前に、一つ飲むといいんだがなあ。飲みますか？　もうさっきこしらえておきましたが……ちょっとした散薬を一服」

「二服でもけっこう」とラスコーリニコフは答えた。

散薬はその場で服用された。

「そりゃ非常にいい、君自身が送って行こうというのは」とゾシーモフはラズーミヒンに言った。「明日はどうなるか別として、今日のところはなかなか悪くないですな。さっきと比べると著しい変化です。人生は永久の研究だなあ……」

「ねえ君、いま出しなにゾシーモフが、たいへんなことを僕に耳打ちしたんだぜ」ラズーミヒンは通りへ出ると、いきなりぶっつけに言った。「君、あいつらは馬鹿だから、僕も君に何もかもをありのままに話してしまうがね。ゾシーモフは僕にこんな事をいいつけたんだよ。みちみち君とおしゃべりをして、君にもしゃべるように仕向けてさ。それをあとですっかり聞かせてくれって。というのは、やつに一つの観念があるからなんだ……つまり、

君が……気ちがいか、あるいはそれに近いものだっていうのさ。まあ、君考えてもみたまえ！　第一に、君はやつよか二倍も三倍もりこうだし、第二に、君が気ちがいでなければ、やつの頭にそんな馬鹿げた考えがあろうとあるまいと、君にとって屁（へ）ともない事だからなあ。第三にあの一個の肉塊先生、専門は外科のくせに、いま精神病の方へ夢中になってるもんだから、今日の君とザミョートフとの会話が、根底から奴を動顛（どうてん）さしてしまったんだよ」

「ザミョートフが君に何もかも話したのかい」

「ああ、何もかも。そして、話してくれてよかったよ。で、僕はいま底の底までわかったんだ。ザミョートフもわかったよ……で、まあ、一言にしていえばさ、ね、ロージャ……要するに……僕今ほんのぽっちり酔ってるがね……しかし、こんなことはなんでもないさ……要するにあの疑念は……わかるだろう？　実際あいつらの頭にこびりついてたんだ、わかるだろう？　といって、やつらも誰一人それを口に出して言うものはないんだ。あまり馬鹿げきった考えだからね。ことにあのペンキ屋がつかまって以来、妄想がすべて一時に崩壊し永久に消えてしまったんだからな。だが、なんだってやつらはあんな馬鹿なんだろう？　僕はその時ザミョートフを少しぶんなぐってやったよ。しかしこれはこの場きりの話だからね、君、知ってるなんてことは、素振りにも出さないでくれよ、いいかね。僕は気がついたんだが、やつは神経質な人間なんだね。ラヴィーザのところであったことなんだ――しかし、今日という今日こそ、すべてが明瞭になった。一番いけないのは、あの副署長さ！　やつは君があの時署で卒倒したのを、さっそく種にしやがったんだ。しかしあとでは、自分でも恥かしくなったんだがね。僕はちゃんと知ってるよ……」

　ラスコーリニコフはむさぼるように聞いていた。ラズーミヒンは酔ったまぎれに、ぺらぺらしゃべり立てた。

「あの時は息苦しくて、それにペンキの臭いがしたので卒倒したのさ」とラスコーリニコフは言った。

「まだいいわけしてるよ！　それに、ペンキばかりじゃないよ。炎症がまる一月も徐々に進行していたんだ。現にゾシーモフが証人だ！　だが、今あの青二才がどんなにしょげてることか、君、想像もできないくらいだぜ！

　『わたしはあの人の小指ほどの値うちもない』といってるよ。つまり、君の小指のさ。しかしあの男だってどうかすると、善良な感情を持つこともあるよ。だが今日の『水晶宮』であったことは、やつにとっていい教訓だった。あれは完成の極致だ！　だって、君は初めてやつをびっくりさせて、震え上がらせたそうじゃないか！　君はまたやつにあの忌まわしい無意味な想像を、ほとんど完全に信じさせておいてさ、それからふいに――舌をぺろりと出して、『へん、どうだ、うまくいったか！』なんて、実に完璧（かんぺき）というべきだ！　奴（やつこ）さんすっかりへこんじまって、面目だまをつぶしてしまってるよ！　君は名人だね、全く！　やつらはそんな風にやっつけてやらなきゃいけないんだ！　僕がその場にいなくって残念

だったよ！　やつは今も君を待ちこがれていたっけ。ポルフィーリイ（予審判事）も君と近づきになりたがっているよ……」
「ああ……あの男なんか……だが、なんだって人を気ちがい扱いにしたんだい？」
「といって、気ちがいじゃないのさ。いや、僕はどうやらしゃべり過ぎたようだな……つまり、あの一つの点に君が興味をいだいてるってことが、さっきゾシーモフに異常な印象を与えたんだよ……だが今では、なぜ興味を抱くか明瞭になった。すべての状況を知ってみると……またあの時あの事件が極端に君をいらいらさして、病気と一緒にない合わされてしまったことを知ってみるとね……ところで君、僕はいささか酔っ払ってる。しかし、なんだか知らないけれど、やつには何か考えがあるらしい……だから、僕そういうのさ……やつは精神病で夢中になっているんだよ。まあ君、唾でもひっかけておくさ……」
　三十秒ばかり二人は黙っていた。
「おい、ラズーミヒン」とラスコーリニコフは口を切った。「僕、君にまっすぐに言ってしまいたい。僕はいま死人の傍にいたんだ、ある官吏が死んだんだ……僕はそこでありたけの金をやってしまった……のみならず、そこである一人のものが僕に接吻してくれた。それは、たとい僕が誰かを殺したとしても、やはり……一口にいえば、僕はそこでもう一人別のある人間を見たんだ……燃えるような羽毛を帽子につけた……だが、僕はでたらめをしゃべり出した。僕非常に衰弱してるんだ。僕をささえてくれ……もうすぐ階段じゃないか……」
「君どうしたんだ……どうしたんだい？」とラズーミヒンは不安げに尋ねた。
「少しめまいがするんだ。しかし問題はそんなことじゃない。問題はただむやみに気が沈むことなんだ。むやみに気が沈むんだ！　まるで女のくさったみたいに……全く！　おや、あれはなんだ？　見ろ！　見ろ！」
「なんだ、いったい？」
「あれが見えないかい？　僕の部屋にあかりがついてるじゃないか？　隙間からさしてるだろう……」
　彼らはもうおかみの戸口と並んだ最後の階段の前に立っていた。はたして、ラスコーリニコフの小部屋にあかりのついているのが、下からも見えていた。
「変だな！　ナスターシャかもしれんぞ」とラズーミヒンは言った。
「いや、いま時分あれが僕の部屋へ来ることはないんだ。それに、あいつはもうとっくに寝てるよ。しかし……どうだっていいや！　じゃ失敬！」
「何をいうんだ？　僕は君を送って来たんじゃないか、一緒にはいろうよ！」
「一緒にはいることは知っている。だが、僕はここで君の手を握って、ここで君と告別したいんだ。さあ、手を出したまえ、失敬！」
「君どうしたんだい、ロージャ」
「なんでもないよ……じゃ行こう……君は目撃者になる

がいいさ……」
　二人は階段を登り始めた。ラズーミヒンの頭には、ひょっとしたらゾシーモフのいうことが本当かもしれない、という想念がひらめいた。「ちぇっ！　おれはあまりしゃべりすぎて、先生の頭をめちゃめちゃにしてしまった！」と彼はひとりごちた。二人が戸口に近づいたとき、思いがけなく部屋の中に人声が聞こえた。
「いったいなにごとだ？」とラズーミヒンは叫んだ。ラスコーリニコフは一番に戸に手をかけて、さっといっぱいにあけ放した。あけたと思うと、いきなり敷居の上で棒立ちになった。
　そこには母と妹が長椅子に腰かけて、もう一時間半も彼を待っていたのである。なぜ彼は二人を全然予期もしなければ、まるっきり二人のことを考えもしなかったのだろう？　しかも彼は今日も重ねて、二人がすでに向こうを出発して、間もなく到着という報に接していたのではないか。この一時間半のあいだ二人は先を争って、ナスターシャにいろいろ根ほり葉ほりきいた。ナスターシャは今も二人の前に立っていい、もう何もかもあけすけに話してしまったのである。彼が病気のくせに『きょう家を飛び出して行った』と聞いた時、二人は驚きのあまり茫然自失した。話の模様でみると、必ず熱に浮かされているに決まっている。『ああ、いったいどうしたことだろう！』二人は泣いた。二人はこの一時間半待っている間に、十字架の苦を忍んだのである。
　喜ばしげな感きわまった叫びが、ラスコーリニコフの出現を迎えた。二人は彼に飛びかかった。にもかかわらず彼は死人のように突っ立っていた。ふいに襲った堪え難い意識が、雷のように彼を撃った。それに、二人を抱擁しようにも、彼の手は上がらなかった。上げられなかったのである。母と妹は彼をしっかと抱きしめて、接吻したり、笑ったり、泣いたりした……彼は一足ふみ出したと思うと、ぐらぐらっとなり、気を失ったまま床の上にどうと倒れた。
　混乱、恐怖の叫び、呻吟……敷居の上に立っていたラズーミヒンは、部屋の中へ飛び込んで、その力強い手に病人をかきいだいた。そして病人はすぐさま長椅子の上に寝かされた。
「大丈夫、大丈夫！」と彼は母と妹にいった。「ただ気絶しただけです、つまらん事です！　つい今しがたも医者がもう非常によくなった、もうほとんど健康体だと、言ったばかりです！　水を！　ほら、もう正気に返りかけています、さあ、もう気がつきました……」
　こう言いながら、彼はドゥーネチカの手を、関節がはずれそうなほど引っつかんで『もう気がついた』のを見せるために、ぐっと下へかがめた。母も妹も、感動と感謝のこもった目で、ラズーミヒンを神の如くに仰ぎ見た。二人はもうナスターシャの口から、この『気さくな若い人』が自分たちのロージャにとって、その病中ずっといかなる役を勤めていてくれたか、ちゃんと聞いて知っていた。『気さくな若い人』とは、この晩ドゥーニャと隔てのない話をした間に、プリヘーリヤ・アレクサンドロ

ヴナ・ラスコーリニコヴァが、自分でラズーミヒンにつけた名であった。